
無敵プリンセス

算裏 友城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無敵プリンセス

【Nコード】

N7080S

【作者名】

算裏 友城

【あらすじ】

さる大国に、誰からも好かれ、誰からも認められる皇女が居た。その名をアンジェリという。

一方、誰からも認められず、日陰に生きてきた第二皇女、サロメ。だがある日、そんな彼女の前に魔法使いを名乗る男が現れて……。

無敵シリーズ第三弾、無敵プリンセス、開幕！

第一姫 無敵P VS 自称魔法使い

ここは、皆も知ってるの通り、大国ニルベールリング国である。唯一大陸オメテオトルーの広大な面積と潤沢な資源を持つ、今最も豊かで熱い国だ。

そして平和過ぎる程平和な国…… たった今、このネフィルム城の門番兵士がうつらうつらと夢心地なのが何よりの証拠だった。

さて、ニルベールリングの名物といえは何か？ と問われたならば、人々は口を揃えてこう答える。

“それは、第一皇女アンジェリ姫である”と。まだ歳は二十一つばかり。だが、誰もが…… 同性の者でさえも立ち尽くし、見惚れてしまう程の美貌の持ち主であった。

長く腰まで伸びた金色の髪はどんな糸よりなめらかで、風にふわっ、と揺れ動く。薔薇の香りがほのかに流れ、人々は酔いしれる。

常にその顔は微笑みをたたえ、民の誰もが手を振った。

純白の淡雪の様な肌を、純白のドレスが包み込むそのさまは、さながら女神とさえ言わしめた。

今日も詩人が歌うのは、アンジェリ姫の事ばかり。言葉に出来ぬ美しさ、天より舞い降りたアンジェリ、耳をすませば、そればかり。

さて話は変わるが、アンジェリ姫にはたった一人、妹が存在している。第二皇女サロメ、それが妹君の名であった。

「ヲホホホホッ、サロメ、アナタまた今日も外出なさらないのですってねえ！ まあ、仕方ないわよね、アナタみたいなお子様、相手にしてくれる殿方なんていないでしょうから！」

アンジェリ第一皇女は、サロメの個室に入るなり、高笑いを発し言った。

「うっ、うるさいお姉様！ 私だって、お化粧さえすれば……」

「お化粧さえすれば、なあに？ 髪も肌も黒くてお子様体型、拳げ匂口汚くてがさつ……そんなアナタが化粧なんぞしたところで無駄ですわねえ」

そう、第二皇女サロメは、姉と天と地ほど差のある存在だった。その理由の一つとして、アンジェリは王の正妻の娘であるが、サロメは妾の娘である事があげられる。

つまり、アンジェリとサロメは腹違いの姉妹となる訳だ。遺伝の違いが大きく現れている。

まずサロメの髪は短く、墨が滲んだ様に黒い。肌までもが浅黒い。アンジェリを天使として持て囃す一方で、サロメは悪魔の様だ、とさえ言われた事がある。当然ながら、純白のドレスが似合いはしな

かった。

そして体型……姉が女性らしく丸みを帯びたシルエットであるのに対し、妹は胸部も、はたまた腰周りも目立ったものはない。ドレスを脱ぎ、庶民らと同じ衣服を身に付けたなら、男か女かもよく分からないだろう。

姉が微笑みの美しい女神ならば、彼女はしかめっ面の魔王様。つり目、キレ目で目付きが悪く、唇も薄く、またやせ気味の為かフェイスラインは骨格に添っていた。

以上の理由から、美しさの観点ではサロメはアンジェリに大きく劣る。

それを自覚してか、彼女は断じて姉と共に歩かなかった。最近では姉人気のせいもあり、部屋にこもりがちとなっている。簡単に言うなら、彼女は姉が大嫌いだった。

「わたくし、今度婚約しますの。相手は名家の貴族でとても素敵な方よ。どう？ 顔も知らない殿方と結婚するであろうアナタなら、羨ましいでしょ？」

姉は益々攻勢を強めた。だが、いちいち事実だけにサロメは拳を握り、俯くだけだった。

「ホホホ、ではねサロメ。せいぜい、おしとやかに振る舞える訓練でもしてなさいな」

と、アンジェリは言い残し、あくまでゆるゆると歩み部屋を出ていった。天敵の退室を確認してから、サロメは壁を思い切り殴り付

けた。

「……………姉様の、バカ……………」

こんな自分に嫌気が差したのは何度目だったろうか？　きっと思
い出し数えるだけでその日が終わる。

サロメは女性訓練……………今でいう花嫁修行の類いは大の苦手だった。
姉が何でもそつなくこなすから。自分があまりに不器用で、何一つ
満足に出来やしないから……………。

一時期、サロメは剣術を習っていた。別に魔物を倒したいからだ
とかではない。何か一つでも姉に勝るところを得たかっただけなの
だ。

だが、城お抱えの騎士らは、第二皇女に対し、本気で教えようと
はしてくれない。そればかりか、この間陰口をたたかれている事を
知ってしまった。

彼女は剣をやめた。何もかもが中途半端……………そんな自分を嫌悪し
ている。どうして私をキレイに生んでくれなかったの？　……………それ
ばかりだった。

そんな時、彼女は決まってベランダへと出て上を眺めた。空はも
う、真っ黒だった。

サロメは星を見るのが好きだった。人が海を見て、自分の悩みな
どちっぽけだと思いきると同じ原理だ。地の果てまで広がる暗黒

のスクリーンに投影された星々の煌めきは、どんな宝石細工よりも美しい。

こうしている間だけ、サロメは辛い現実を忘れられたのだ。

ふと、星が流れた。尾を引き、スクリーンを移動するシューティングスター。サロメは咄嗟に手を組んで流星に願いを託す。

「姉様に呪いあれ、姉様に呪いあれ、姉様に呪いあれええええ！」

「……随分と物騒な願いをするな、お前は」

「……!?」

突如、背後から声がした。サロメは慌て振り向くと、そこには見慣れない男が仁王立ちしていた。

「なっ……お前、どこから!？」

そう言う間もサロメは、相手をしつかり観察していた。男はただ、部屋の中央に立っているだけだ。その手に武器の様なものは持っていない。

だが……彼が、ただ者ではないのは明らかだ。新しい世話係では決まてないだろう。頭には天に向き真っ直ぐ伸びる角が二本。黒一色で統一された衣服とマントを身に纏う彼は。

「どこからと言われてもな……まあ、あれだ、私は……見るに見兼ねた魔法使いだ」

「はあ？」

そんなナリの魔法使いがどこに居る！ と全力のツッコミをぐつと飲み込み、けど少し考えて……ようやく一つの可能性に辿り着く。それは、この男が本物の悪魔であるという可能性だ。

「……で、その魔法使いが、この地味な第二皇女に何の用よ！？ 誘拐とかなら姉様にしときなさい、私をどうこうしても誰も悲しまないし、得なんてないわよ！」

彼女は怯えるでもなく、自称魔法使いに言い放った。命が惜しいから、他人をおとしめたいから、そう言っている訳ではない。純粹にそう思っているのだ。

だって私は、いらぬ子なんだから……。

だが、魔法使いの男はやれやれと言わんばかりに首を振ると、言った。

「フン、何か勘違いをしているらしいが……私からすれば、裏のないお前の方がマシだ。腹に一物持っている者にろくな奴は居ない……それに、その堂々たる態度、気に入った」

「えっ……？」

男の言葉に、サロメは戸惑いを隠せなかった。異性に姉よりもいい、と言われたのは初めてだったからだ。

あの人？ は私の方がいいと言った。ただそれだけでサロメは、涙が出る程嬉しかったのだ。と、同時にもしかしての考えが頭をよぎる。

彼は、本当に私をさらいに来たのだろうか？ もしこの男が悪魔で、私を魔界に連れ帰るのが目的だったとしても……自分でもちろんでもない事、考えているなと思えた。

だけど彼が手を差し出し、“私の元へ来い”と言ってくれたなら、多分躊躇う事無くひよいひよいと行ってしまっただろう。

サロメはもう、正体不明の魔法使いに虜だったのかもしれない。完全な一目惚れだったのかもしれない。

よくよく見れば、彼はとても素敵だった。背が高く足は長く……顔も悪くない、第一に私の方がマシと言って貰った時点でどうでも良かった。

それにピッタリだ。人々が私を悪魔に例えるのなら、悪魔になってもいいとさえ思っていた。

「ごほん……では、お前に問おう」

「……はい……」

既に目がハートマーク状態の彼女に気付きもせず、自称魔法使いは言った。「お前は何を望む？」と。

サロメは一瞬迷ったが、すぐに答えた。

「（アナタの）ステキなお嫁さんになりたいです……」

と。すると男は、ようやく笑みを浮かべサロメに言い放った。

「よかろう！ お前に力を授ける、愛とは力づくで奪うものなりつ！ さあ行けつ、世界中を探すのだ、お前の目にかなう屈強な者を探しだせええ！」

サロメが何か、呆けた顔で何か言おうとしていたが、きっぱり無視し、魔法使いは両の手から光を放った。

あまりの眩しさに目を閉じた。やがて光が消え、彼女が目を開けた時には、男の姿はどこにもなかったのだ。

彼女はまた呆けていたがすぐさま我にかえると、

「チクシヨオオオオ……！！」

と叫び、再び壁を殴り付けた……。

翌朝、王の間は異常な雰囲気にも包まれた。皆が皆黙り込み、顔面に深くシワを刻む。

特に王と王妃、第一皇女の表情といったら、醜悪なモノを見る目

付きだった。それらの視線は全て、玉座の下でうやうやしく頭を垂れる者へと向く。

それは、第二皇女だった。もう彼女はドレスなど身に付けてはいない。その身体には、どこで手に入れたのか、鉄の鎧を着付けている。ガントレットも完備で、新人兵士に見えなくもなかった。

「サロメ……ワシはボケたのか？ それとも耳がおかしくなってしまうたのか？ もう一度、言ってみる」

王は低く、厳かに言った。大国を束ねる者らしい、威厳に満ちた、それと同時に重量を感じさせる言葉であった。

「はい、父上……いえ、ニルベールリング第十二代国王様……私、サロメ・ニルベールリングは本日を持って王位継承権を捨て、旅をいたします。伴は不要、私一人で旅をいたします」

彼女は堂々と王の言葉を受け、そして返した。王をきつ、と睨み付け、一時たりとも目を逸らす事はなかったのだ。その言葉に嘘偽りの無い事を確認した王は、激怒した。

「許すとも思っているのかサロメ！ 誰がキサマを養子に迎え、誰がお前を育て、誰がお前を立派に教育したのか……答えよ！！」

「それとて、他国に私をくれてやる為でしょうか？ この妾の娘を！」

「口を慎めサロメえ！ ラオド、この不埒者を捕えよ、牢にでも放り込んでおけ！」

「承知」

ラオド・メシュリトス、我が国一の騎士。実力も人望も全てがナンバーワンの王国騎士らの憧れ、尊敬の対象。

しかしサロメは知っている。あの男は姉の夜の相手の一人であることを。唾棄すべき人間のクズ……彼女の印象は正にそれだ。

「さあ、サロメ様……いつまでも我が儘を申されぬよう……」

彼の腕がサロメへ伸びる。いつもなら、なすすべなく捕まっていただろう。だが、今は、違う！

「私に、触れるなっ！」

バキィッ！

一瞬、何が起きたのか、サロメを除き理解できなかつたろう。ニルベールリングーの騎士は、壁にたたき付けられ動かなくなっていた。たったの一撃だったのだ。

「なっ……？」

誰もが言葉を失った。サロメは続けて言った。

「私は行きます。自分の道は自分で歩く！」

膝を立て、サロメは立ち上がると玉座に背を向け走り出した。

王の声はもう、彼女に届く事はないだろう。彼女はもう、第二皇女サロメではなく、無敵プリンセスなのだから。

第二姫 無敵P VS ネフィリム城騎士隊

かんかんかん

サロメは、城の通路をひた走っていた。

今のところ追ってくる者は誰も居なかった。

かんかんかん

足が明らかに速くなっていた……気のせいなんかじゃない、それに全く疲れない。

私は本当に力を得たらしい。昨日、壁を殴った時それに気付いた。

あの、頑丈でいつも私の手に痛みをもたらした忌々しい壁にもひびが入り、そして砕けたのだ。

私は強くなった！ その思いが行動を大胆にしたのだろう。もう父上など怖くない、ただのオッサンだ。

かんかんかん

サロメは城門を抜け、庭に出た。

外には既に兵士らが集まっている。ようやく、かんかんと喧やかしかった音の正体を知った。

あれは、隊に指示を送る半鐘の音だ。伊達に訓練をしている訳ではないらしい。ラオドを倒したから騎士らは浮き足立つと考えていたが、甘かった。

……それにしても、滅多にない実戦に備えての訓練、その成果をまさか自国の城、それも皇女相手に発揮しなければならないとは……何とも皮肉な話だ。

騎士らが何かを叫んでいる。隊列を成し、城門を固めている。

だが今のサロメには、何の障害にもならない。相手は武器を抜かず、その手で捕まえなければならない。それに、まだサロメをひ弱な皇女様と見ている者が大半だ。

交戦し、強引に道をこじ開けてもよかった。だが、それは疲れるし無駄ないざこざである。

「皇女っ、どうか止まりなさい！ 怪我をなさりたくなければね！」

そんな言葉でさえ意味を持たない。そもそもサロメは、騎士らと交戦するつもりは既がない。

彼女は強く踏み込み爪先に力を注いだ。

「はああああー！！」

彼女の身体は宙を駆けた。一体、どれほどの跳躍だったろうか……騎士らは啞然と、ただボケっと、上空の皇女を見上げるだけであった。

サロメは親指程の大きさとなった騎士らを誇らしげに見下ろすと、そのまま城壁の上に着地した。

“城の見栄えばかりにかまけて城壁を低くするとは、感心はしないな”かつて騎士の誰かが言っていた事だ。

正にその通りだ、こうしてサロメに飛び乗られている。彼女はすぐに壁の向こう側へと飛び降りた。

騎士の群れから悲鳴にも似た声があがる。それが何とも心地よく響いた。

閉ざされかけた城門が再び開き始めた頃には、もうサロメの姿は見えなかった。

はなしかけてきたおとこに　しょうりした

第一皇女、アンジェリの部屋

「何たる失態、何たる体たらく……言葉もありませぬ」

ラオドは眼前の女神に対し、膝を付き頭を垂れて言った。アンジェリは椅子に腰を掛け、足を組みラオドを睨み付けていた。

「どうかどうか、チャンスを下さいます……このままでは私は……」

「……ラオド、顔を上げなさい。確かにあれはアナタの失態。しかし……私の愚妹はどうなってしまったのか……ラオド、何か知らなくて？」

「いいえ、何も……しかし、サロメ様は運動もそれ程お得意でなかった筈。まして、あんな人間離れた行為など……」

「もしや、悪魔に憑かれたのかもしれないわねえ……ラオド、チャンスを与えましょう。あの愚妹を捕え、わたくしの前に引き摺り出して来なさい……生死は問いません」

「なっ!?!　しかしそれは……」

「わたくしからお父様に進言しておきます。ラオド、二度目の失態は許しませんわ。……それとも、わたくしの言い付けが聞けないとでも？」

「いつ、いいえ滅相もございません！ ラオド・メシユリトス、これより準備を致します！」

と、言い残すと、ニルベールリングの筆頭騎士は足早にアンジェリの部屋を出ていった。

一人、広過ぎる部屋に残されたアンジェリ。彼女は化粧台の大きな鏡を覗き込むと、その顔に笑みを浮かべた。いつもの如く女神の微笑みではない。

鏡の中には、獲物を待ちわびる悪魔の嘲笑が棲んでいた。純白のドレスを身に纏いし異形は、誰にも聞こえる事なく、声を殺し笑っていた……。

第四姫 無敵P VS モンスター ビッグワーム

ひがくれてきた

サロメは しゅとニルベールリングをとびだし かいどうを ある
いていた

(……くらくらくなってきたな やっぱり ひきかえして やどをと
ったほうが よかったかな……)

「シャアアアア！」

「!？」

モンスター ビッグワームが きしゅうをしかけてきた

サロメに 1のダメージ

「!!!!!!!!!!!!!!」

ズバツ!

ビッグワームに 453のダメージ!

「ジシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
」!

ビッグワーム にしょうりした

第五姫 無敵P VS 筆頭騎士ラオド 1

「……！」

サロメはさっそくヨロイをぬぎすて ベッドにとびこんだ

やすものもつぶも このときばかりは ここちよくかんじられた

それほどまでに サロメはつかれていたらしい

ヨロイのおもさが ぬぎすてたいまも そのままからだに のこ
っているかのようだ

すぐに うつつらうつらと まぶたがおもくなる

「……………」

かのじょが ねいきをたてたのは まもなくだった

・

ラオド・メシユリトスは既に千からなる兵を引き連れ、皇女探索を始めていた。王とアンジェリの、サロメの件に対する判断は極めて早く、即決即断であったと言えよう。

ラオドの下した指示は“第二皇女サロメ様を探し出せ。そして発

見たなら私に報告せよ”という様な内容だった。

そう、この件は自らの手を持ってして解決しなければならぬ。アンジェリの期待に応える為にも、サロメを連れ帰らねば……ならないのだ。

彼は座して吉報を待った。本来ならば自分が最前線で直接探索をしたいところだが、それは出来ない。兵士千名を首都に展開させているというのに、指揮官の居場所が変わっては彼らはどこに報告をせよというのだ。

爪先が、たんたんと小刻みに音をたてる。

“……ラオド様、必死だな……”

“当然だろう、本来なら首から上は台の上、首から下は土の中だったんだから……アンジェリ様の進言がなければ、な”

ニルベリング筆頭騎士の失態……呆れ返る程平和な国内に於いては、一大事であったろう。既に目撃者の口は固く封ぜられ、箝口令までしかれている。

が、それでも事実は耳当たりの良い流言蜚語にすり変わり、瞬間に広まってしまふ。他のニュースが特になく騎士らにとって、話題写本の出版も同意義であったのだ。つまり事実如何に関わらず、この事件は騎士らほぼ全員がおぼろげながらも知り得ている。

さて、夜もふけ、所々に灯が灯り始めた頃……ちょうどラオドが兵の増強を考えていた頃の事だった。彼の元へと一人の騎士が駆け寄り、報告を行う。

それこそが、彼の求めたものだった。

「分かった……では、お前達は引き上げる。付近の者達にも同様に伝えよ。あとは、私だけの問題だ……」

ラオドはそう言い残すと、部下の一人に指揮を預け、報告の場所へと歩きだした。サロメの泊まる、あの宿へ……。

第六姫 無敵P VS 筆頭騎士ラオド 2

「んんー、あー……」

朝日が窓際を訪れるより早く、サロメは目を覚ましていた。

ニルベールリングの人々は朝日こそが目覚めの証、とされているが、彼女は例外であった。毎日朝早くに起こしに来る、教育係の女中の甲高い声……。身体に早起きが染み付いている以上、自然な事だ。

「……もつと寝ても良かったかも……」

軽い伸びをした後には、完全に目が冴えている。二度寝なんてのは不可能らしい。

サロメは現在、寝間着も着替えも持っていない為、眠る際は自然と下着姿であった。ここから直接、モンスターらの皮を素材とするレザーアーマーを着用し、その上にプレートアーマーを装備する。インナー扱いのレザーは防御用ではなく、単にヨロイのサイズが合わなかった為、詰め物の要領で着込んでいるだけだ。

ちなみに兜は身に付けていない。女勇者たるものは、顔を隠さず立ち回る……。かつて読んだタイトルも知らない物語の主演になぞらえたのだ。

ヨロイを着込んだ時には、陽がもう、窓から差し込んでいた。総重量にして約三十カラム（約三十キログラム）前後もあるが、サロメには重量よりもレザーが肌にチクチク痛いほうが気になっていた。

そんな珍しい出で立ちの客が宿より出ていく。目立たぬ筈はないのだ。

彼女が宿を出たその時だったか……正面、向かい側の建物の外壁により掛かっていた者が、こちらを認めて声を発する。サロメは、黒猫に目の前を横切られた様な気分になった。

「サロメ様、どうか私と共にお戻り頂けませんか？ 皆、心配しております」

筆頭騎士ラオドである。姉の夜の相手の一人……正直話し掛けて欲しくない程に、彼は敵だった。

「愚問よラオド。私がそんな言葉を聞くと、少しでも思ってるの？」

「いいえ、思っておりません」

彼は考える素振りもなく淡々と、事務的に返答をした。その態度が、サロメをより苛つかせる。

ならば、私がお前を相手にしないのは分かっているだろう！ そう言いたい気分であった。ラオドは元第二皇女の手間を省く。

「ですが、アンジェリ様に“必ず任務を果たせ”と仰せ付かった故に、退く事を考えてはおりません」

「ふうん、姉様の？ あの女の事だし、どうせ私を殺せだとか言

いかなないと思ったんだけど……違つかしら？」

「……………」

ラオドは答えようとはしない。さては凶星か、と思う。彼は返答の代わりに、腰の鞘から剣を抜いた。

騎士らが共通所持している両手剣。長さにしておおよそ一メートル（約一メートル）ばかり。ラオドの剣は柄に赤色の玉がはめ込まれ、外見も意識している。筆頭騎士ならではの一品だ。

「なあに？ 実力行使って訳？ 悪いんだけど私は今からここを出て……………」

「サロメ様！」

サロメの言葉を遮って、ラオドが言う。怒声にも似たもので、その迫力にサロメは思わず言葉を飲み込んでしまう。

「私は……………これ以外のやり方を知りませぬ！ お願いでございませぬ、どうか、どうか剣で勝負を！」

彼は願った。筆頭騎士は願い、頭を垂れる。いつも見せられてきた、習性の礼ではなく、ラオドは心から頭を下げている。

はつきり言って、サロメの判断には何の関係もない願いであり、この場で一蹴してもよかった。……………。

嫌な奴だとずっと思っていた……………姉様の相手、それもお気に入り……………嫌な奴だとずっと思ってたのに、なのに……………。

彼は私を、一個人として扱っているのではないか？ 馬鹿な第二皇女ではなく、相手として、敵として……。

「……分かったわよ。その代わり、終わったらもう追って来ないですよ？ ちなみに負けても私は逃げるから」

サロメは、ラオドのものと同じ剣を、片手で引き抜き片手で振るう。

「ありがとうございます。では……ニルベールリング筆頭騎士、ラオド・メシュリトス、参ります！」

彼は、言葉を言い終えると同時に動いた。

“ サロメ様、さすがお上手でございます。この調子でしたら、すぐにも私めを追い抜けるでしょう”

“ 本当に？ 私、才能ある！？”

“ 勿論でございます。さあ、お次は構えですよ姫様”

私の知っている第二皇女の訓練光景は、そのような状態であった。典型的な接待訓練……無論、王族が剣術を本格的に習う事など、この国では有得ない。精々、教養として基本の型を学ぶ程度である。二・三日もすれば興味を失い、訓練場に顔すら出さなくなるものだ。

皆もそう思っているからこそ基礎もおざなりに、応用などはひとつも教えなかったのだ。だというのに……サロメ第二皇女は、一週経ち一月が過ぎても訓練場に現れ続けたのだ。

“ ほう……なかなかどうして、根性はあるらしい”

私は、他の訓練生と離され、一人となってもひたすら剣を振るうサロメ様に、関心をもったものだ。余りにセンスが無くどうしようもない素人だが、私自らが教えたいとさえ思い始めていた。

だが、あれは訓練場へと向かう最中だった。騎士二人の会話が耳に入る。

“ おいおい、サロメ様さあ、一体いつまで来る気だよ。どうせ女

なんだからさ、花嫁修行をやってりゃいいんだよ”

“ 全くだな。少しはアンジェリ様を見習ってくれりゃあいいんだが”

“ いつそ、達人になったから我々からお教えする事は御座いません、とか言ってみるかよ？”

“ おだてりゃあ調子に乗るからな、いいんじゃないか？”

そんな内容だったと思う。彼らの言っている事は正論だろう。だが、だがしかし、何故私は激しい憤りを覚えたのであろうか。

この日から、サロメ様は訓練場に現れなくなった。

ラオドはレンガ造りの地を蹴り、駆け出していた。ヨロイの重量を感じさせない、機敏な動作である。カシヤカシヤとの金属音が確実に迫っていた。

間合いに飛び込むのに、五歩ばかり要した。そのまま、肩口より剣を振り下ろす。狙いは無論、サロメ本人でなく、彼女の剣だった。相変わらずサロメは片手保持をしているのだ、取りこぼすに違いない、と踏んだ！

甲高い接触音と共に、カネとカネがぶつかり合う。

ラオドは直後に、自身の感覚を疑った。自分は何を叩いたのだ、と。まるで大岩を殴りつけた様な感触であった。

受け止める側のサロメはその場から毛の一本程も動いていない。この結果が示す事実の一つ、彼女側の筋力が、こちらを遙かに上回っているのだ。

「う、オオオオオおおおおおー！」

力を増した、体重を乗せた……だというのに、枝のように細い腕一本に支えられる剣は、どうしても動かなかった。

「じゃ、私の番よね」

サロメはわざとらしく言うと、一步をぐつ、と踏み出した。それによってか、ラオドが一分、後退させられた。

（何だというのだ……この、異常な力は！）

筆頭騎士は、得体の知れない力に恐怖すら感じた。

第八姫 無敵P VS 筆頭騎士ラオド 4

剣と剣、金属と金属がぶつかり合い火花散らす。片や斬撃、片や静止。

細腕一体にて、こちら側の渾身を受け止める皇女。どうしようもなく、力の差を感じた。

サロメが踏み出し、剣を振るった。ラオドの込めていた力は呆気なく碎かれ、弾き飛ばされてしまう。

それでもどうにか体勢を整え、二メートル程後方に着地した。

正面、もう間合いの中にサロメが居た。ほぼ一瞬の間、恐るべき速度での肉迫だ。間髪入れず、斬撃が繰り出される。それは白銀の線にも見えた。

振り下ろされた敵の剣。先刻からの人知を超えた力を考慮したなら……まともに受ければ手が碎けるかもしれない。あれは剣でなく大縄、いやそれ以上の何かと化している。

ならば……。

だからラオドは、剣と剣が接触し力が伝播するその瞬間に、ツルギに傾斜を付けたのだ。

斜め三十度程に傾いた刃に添い、サロメの剣は滑り落ちてゆく。受けるのでなく、受け流したのだ。

サロメは受けを失い、前のめりに崩れた。ラオドは回り込んで無防備の背面を睨む。

「剣はまだ未熟です、サロメ様っ！」

剣を振るう。無論ヨロイを打つただけだ、露出部を斬る気はない。それでも全力を込めたつもりだった。

「なっ!?!」

その時ラオドは非常識に出会った。サロメはもう剣の圏内に存在しなかったのである。

今度は皇女が、彼の背中を捉えていた。サロメはラオドの背後に居たのだ。

ドッ!

「がっ……」

筆頭騎士の全身を、衝撃が駆け抜けた。ヨロイが変形し身体を締め付ける。目の前は建物の外壁のみ……。

“あなたが筆頭騎士ラオド様ですか？ お会い出来て光栄ですわ”

第一皇女アンジェリは訓練場に突如現れ、言った。皆が女神の突然の登場に慌てふためく中、名指しされた筆頭騎士は跪き、頭を下げた。

“これはこれはアンジェリ第一皇女様、このようなむさ苦しい場所に如何な御用事でしょうか？”

“いえ、私は我が国一の騎士様を見に來ただけですわ”

更にアンジェリは口を近づけ、ひそひそとラオドに耳打ちをする。

“後で……私のお部屋にいらして下さいませ。私とお話でも……いかがでしょうか？”

この言葉こそが、筆頭騎士にとっての地獄の始まりであった。第一皇女は獲物を蜘蛛の糸にかけてしまうのだ……。

「ハッ!？」

ラオドは目を覚ました。反射的に身体を起こそうとし、激痛に悶える。背中だ、背中にたいまつの炎を押し当てられているかの様に熱い。ヨロイは既に剥ぎ取られていた。

「目、覚めたのね。なら私は行くわ……じゃあね」

と、声のする方向に首だけを動かすと、ヨロイの人物が見えた。

そう、サロメだ。どうやら彼女が、ラオドをここまで運んだらしい。向かいの宿屋だろう。

「サロメ様っ！ どうして私を!？」

彼は問うた。が、答えは返ってこないものだろうとも思っていた。しかしサロメは……。

「アンタが、ちょっといい男に見えたからよ！」

「はあっ!？」

どうやら本人はバツチリキメた風である。首を傾げるラオドに背を向けると、サロメは颯爽と駆けて行った。階段を駆け下りてゆく音が響く。そしてラオドが窓から下を見下ろせば、第二皇女……いや、サロメが街の外へ向けて走っていつていた。

第九姫 無敵P VS 街道モンスターズ

ニルベールリングかいどう

サロメは ふたたびかいどうに あしをふみいれた

いまは ひるまである きしゅうのかのうせいも ひくい

「……！」

サロメは せきしょをめざして いっぱを ふみだした

「グオオオオオオオオオ！」

モンスター ビーストロウが あらわれた

ズシャッ！

「グギアアアアアアアアア！」

ビーストロウに しょうりした

「ピギイイイイ！」

「ジャアアアア！」

モンスターらが きしゅうをしかけてき……

ビシッ！　ズカッ！

「バアアアアアアアアアアア！」
モンスターらに　しょうりした

「！！」

サロメは　おもわず　ガッツポーズをきめた

モンスターらが　さらに　4たい　あらわれた

シユババババババツ！

ひめいをあげるまもなく　モンスターらは　たおれた

第十姫 無敵P VS 無礼な兵士達

サロメは せきしよに たどりついた

「ああそこの方、お待ち下さい。通行許可証はお持ちでしょうか？」

兵士らがサロメの前に立ち塞がった。

「……………！」

サロメは むねをはると じぶんのかおを ゆびさした

「……………何のつもりだ？」

「……………！！！」

サロメは じぶんの もととのみぶんを あかした

「第二皇女様だと？ お前、いくらなんでも嘘が過ぎるのではな
いか？」

「全くだ。いくら第二皇女様が地味で空気だといっても、お前が
名を語るのはあんまりだ」

「……………！！！」

奥歯をぎりりと食い縛り、ベッドを、続いて剣を杖代わりにラオドは歩を進めてゆく。その時、ドアがぱんと開き、見覚えのある出で立ちの集団が現れた。

「ラオド様、ご無事ですか!？」

「……ああ、お前達か、どうした、帰れと命じたハズだが……」

それは、彼の配下の騎士達であった。

ともかくこれで……安堵したのか、筆頭騎士はぱたりと倒れこんだ。

第十一姫 無敵P VS モンスター イービルフィッシュ

サロメは ラアズがわにかかる ラアズおおはしにあしをふみ
れた

「……………」

かのじよは はなうたまじりに はしをわたっている

ザッパアアン！

「！！！」

モンスター イービルフィッシュが きしゅうをしかけてきた

右方には、既に大口が開き牙を剥く。ラアズ河の水面より五メ
ルの高さをこの魚は跳んだ。こうしてこいつは橋上を行く者を一撃
のもと、その強靱な歯と顎により噛み砕き捕食するという。

だが、今回ばかりは相手が悪かったらしい。跳躍から捕食までの
刹那にもサロメは既にその身をかわし、自分の代わりに剣を馳走し
た。

イービルフィッシュは驚愕したに違いない。獲物が消えて、たっ
た今自分は……………。

ズパアアツ！

イービルフィッシュに しょつりした

第十二姫 無敵P VS モンスター サベージウルフ

サロメは だい2ニルベールリングかいどうを すすんでいる

(なんでよ なんであんなにモンスターだらけなのよ!?)

つぎのまちまでは あとどのくらいか けんとうもつかなかった

「おや、首都の騎士の方ですか?」

にぐるまをひくおとこ があらわれた

(ん? そうか このひとにみちをきこつ)

「……?」

サロメは みちをたずねてみた

「ああ、あと少しでトシューズの町ですよ」

サロメは ペこりと あたまをさげた

「グルルルルルル………」

「!?!?」

そのくぐもった咆哮で気付いたのだが、いつの間にか四方をモンスターに囲まれていた。サベージウルフ……数多く見られる狼形のモンスターである。集団攻撃を得意とし、単体でも手強い。

「ひっ……し、しまった、こいつらここまで……」

荷車を引いていた男は恐怖に顔を歪ませ、尻餅をついていた。かつてはウルフの群れに集落一つが滅ぼされたという話もある程だ、人生の終わりを思っていたのかもしれない。

一際大きく吠えたかと思うと、四方から牙を剥いた。男は目を閉じ、訪れるであろうその時を待ってしまう。

だが……ぎゃん、という鳴き声が重なり、物音は消える。静かな、あまりにも静かな時間が過ぎた。

「……？」

男は恐る恐る目を開ける。悪夢かはたまた地獄か……少なくとも、彼に良い方向を想像するのは無理な話だった訳なのだが……。

倒れたウルフ……そして、鞘に剣を収める騎士の姿……即座に理解出来た事、それは彼女がモンスターを一瞬で倒したという事実。

「……凄い……凄い！ あの、騎士様……今日はどちらにお泊りで!？」

男は、サロメに尋ねた。彼女はあてはない、と答える他ない。

「でしたら是非とも、ウチに泊まって頂けませんでしょうか？
ああ、ウチは町一番の宿屋です。無論、お代は頂きません、どうぞ
すか？」

「ええっ！？ いいの本当に？」

「はい、あなたは命の恩人です。どうぞ、お返しをさせて下さい
」！

サロメは きょうのやどをかくほした

トシューズのまちに たどりついた

第十三姫 無敵P VS 擧取量

「~~~~~」

サロメは ただめしをくらい ふかふかのベッドにとびこんでいた

(あー たくさんたべたし あとは……)

ぐっ！ ぐっ！

サロメは ふっきんをはじめた

きょうも たいけいを いじした

「本当だよあのお客さんな、あの人はお強い方で、ウルフ共を一瞬で蹴散らしちまったんだ！ 恐らくはこの状況を見かねて、王国は腕のたつ騎士様を派遣してくださったんだ！」

宿屋の亭主は町の仲間らと酒を飲みつつ、今日の出来事を喋っていた。

「しかしな、ありゃあまだ十五、六程度の娘じゃないか。それに王国騎士には確か男しかなれない筈だが……胡散臭いぜそいつあ」

「あ、俺さ、あの騎士の人どっかで見たとある気がするんだけどなあ……………」

「ほれ見ろ、皇女様にしか興味のないお前さんが見たことあるんだ、有名な方なのさ！」

「うーん……………」

「しかし……………」

と、それまで沈黙を保っていた老人が、ゆっくりと口を開く。皆、様のおしゃべりを止めると、その方へと向き直る。

「あのお方が何者であれ……………お前達の話が事実ならば、我々にはあの騎士様を頼る事しか出来ぬのだろうよ。決して粗相の無きようにな……………明日、ワシから伝える」

町民らは皆頷くと、一人、また一人席を立った。

第十四姫 無敵P VS トシユーズ町長

夜が明ける。

その頃のサロメといえば、朝の入浴をしている最中だった。この宿には、宿泊者用の風呂がある。

ネフィリム城のそれとは比にもならない小規模風呂だが、時間に縛られること無く、口うるさい教育女中も居ないこの現状……はつきり言つて断然、ここの方が心地よく感じられた。

ふと、自分の身体に視線を落とす。そこではあ、と一度溜息。

なんとも薄く、平たいボディだな、と思う。コーガー平野の様に、どこまでもフラットライン。肉付きの薄い骨ばったカラダ……。

まあ、このように身体つきは変わっていないのに私は圧倒的な力を得ている。私の前に現れた自称魔法使いは大したものだ、と改めて思えた。

そこはいくら感謝してもし足りない。あの、クソツタレた場所から自力で抜け出せる程のものを、くれたから。

ゆっくりと彼女は湯船を出た。その身に射し込む朝陽を水滴が反射し、キラキラと輝いている。

「ふう……」

傍目にサロメは、十分に美しい出で立ちをしてはいよう、だがやはり文化圏によって、褐色肌は大きなマイナスだ。特にニルベリングでは常にダークなイメージが付きまといっているのだ。その手のヒトには眼福やもしれないが……。

「いよう……し！」

頬を両手でパァン、と叩き、彼女は風呂場をあとにした。

ヨロイを着込んだサロメは、宿のカウンターへと辿り着いた。最後に一言礼を言ってから、ここを発つつもりであったのだが……。

「騎士様、少々お待ちくださいませ……」

老人が一人、サロメの前に現れた。

「えっ、何か用？」

その言葉に、待つてましたと言わんばかりの老人。嫌な空気を肌で感じた。

「実は、騎士様のお力をお借りして、ある事を成して頂きたいのですが」

何か面倒臭そう……それが第一印象。きつと厄介事に違いないっぽい。

「この町の東に、ラビリユンズ、という森があるのじゃが……どうやらそこで何かがあったようじゃ、モンスターらがやたら凶暴になってな、申し訳ないのじゃが……」

(どうせ、森に行って事態を治めて、とかでしょ？ あー、面倒だし、第一……)

事実、老人は予想通りの言葉を吐いた。

「どうかどうか、ラビリユンズの森の調査を依頼したい。無論、相応の報酬は出させていただきます。どうでしょうか？」

さて返答はというと、“是非やらせて下さい”が格好いいのだから、自分的にはさっさとニルベールリング領内を出たい訳で……ぶっちゃけ面倒だし、顔に傷でも付いたら大変だし……。

「ごめんなさい。悪いんですけど、先を急いでいるし私はこれで……」

丁重にお断りしようとしたその時だった。宿屋に一人の青年が駆け込んでくる。

イケメン青年が現れた。

「!？」

「どうかお願いします、本当は、本当は今すぐにも俺が行って村を守りたい！ だけど……」

悔しがる青年。そんな彼の手を、サロメはもう取っていた。

「えっ!?!」

「任せて！ アナタの為に、私ガンバルから!!!」

目をハートマークにしたサロメは、依頼を受けた。

町民らは、ハイタッチをした。

第十五姫 無敵P VS もりのなかまたち

ギョッ ギョッ

サロメは ラビリユンズのもりに あしをふみいれた

「……………」

かのじよは あたりをけいかいしている

ガサッ

「!?!」

「ぎゅっぎゅっぐらう……………」

よわよわしいウサギが あらわれた

「!?!?!?!?!」

(かつ、かわいいい!?!)

サロメは かけよって てをさしだした

ガブツ!

バーサークラビットは シャープファングを しようした

(ちっば かわいいい!!)

サロメは かけよって てをさしだした

ガブウツ!

ヘルドッグは ギガファンクハイを しようした

「!?!?!?!」

サロメに 119のダメージ

ゲシッ!

「ぎゃん……イ、ヌ……」

ヘルドッグに しょうりした

(ハアア……いいかげん がくしゅうしよう このもりたいるの
は かわいさのかわをかぶった あくまばっかりだって……)

ガサッ

「!?!?!?!」

「みーみー」

よわよわしいネコが あらわれた

(ふんだ　こんどはだまされないわよ！　むしむしガンむし！)

サロメはむしして　あるいていく

「みー　みゃああ………」

よわよわしいネコは　うしろをついてくる

(むしむしむしむし！)

ぱたっ

よわよわしいネコは　ころんだ

(　かんけいがない　かんけいがない　かんけいがない　かんけいがない
かんけいがないいいいい！)

「みいー　みいー　みっ………」

(　やっぱりダメ！　みすてることなんてできない！　ごめんね
ごめんね　ごめんね　ごめんね　ごめんねええええ！)

サロメは　かけよって　てをさしだした

ガブウウツ！

ビーストキヤットは サーベルファンクを しようした

サロメに 212のダメージ

「……………！！！！！！！！！！」

ベコオオオオツ！

「びいああああああああああああ……………ねこ……………」

ビーストキヤットに しょうりした

(……………バカか わたしは……………)

サロメは さきをいそいだ

第十六姫 無敵P VS ラオドのその日

サロメが森に入ってから半日程過ぎた頃、ラオドは既に牢の中に居た。囚われの身となってしまうたのである。

彼は部下に肩を預け、満身創痍の様相をもって玉座の前に現れた。その筆頭騎士の様子を王や妃は大層嘆いた。或いは部下を下げさせ一人で向かい、挙げ句返り討ちにあった彼を非難し罵倒した。

二度目もの醜態をさらした騎士は、例外なく位を剥奪され相應の罰を受ける。だがラオドは騎士らに対し絶大な影響力を持っており、また筆頭騎士という立場である。この事実を王は考慮に含めた。

よって彼は筆頭騎士の立場こそ失ってしまったが、騎士号剥奪とまではいかずに、牢も罪人が羨む程清潔なものが与えられた。

牢屋番を担当するのはラオドを快く思っていない者達であった。それ程までに彼の人気はある意味恐れられていたのだろう。

ラオドは素直にその日を過ごした。時間に規則正しく対応し、その日に与えられた飯は残さずに食べ、空いた時間は目を瞑り座っていた。

夜もすっかりふけ、闇が全ての境界を飲み込んだ頃、かつかつと歩む音が静寂を微かに破る。毛布をかぶり眠っていたラオドは、その僅かな音で目を覚ました。

とはいえ、鉄格子には背を向けたまま聴覚のみをそちらに向ける。

足音は見張りのものでないのは明らかだ。

足音の主は、ラオドの牢の前で止まる。オレンジ色の光が壁に凹凸を与えた。たいまつの灯りだろう。

「ラオド……」

その声を聞いた時、ラオドの身体は痛みを忘れ跳ね起き、土下座にも似た低姿勢を作った。声の主には、日常的にこうしなければならぬ、そう身体が覚えているのだ。

「アンジェリ様……」

ラオドは相手の名を、頭を垂れたまま口にした。そう、彼の目の前に現れたのはアンジェリ第一皇女であたのだ。

「ああ……可哀想なラオド。わたくしの妹は悪魔に魅入られて、邪悪な力を手に入れてしまったというのに……父上にはそれが分からないのだわ」

彼女は大仰な口調で切り出した。あたかも、ラオドを本心から心配しているかの様に。

「わたくしは分かっていますよラオド……あれは最早怪物も一緒に国に、いえ世界に災厄を振りまく存在やもしれません。今度こそはあれを仕留めたいと考えるのが、筆頭騎士たるあなたの想い……」

ようやく分かった事が一つだけある。彼女の同情とも憐れみとも

思える言葉は、手段でしかないという事だ。人の耳元で甘く優しく微笑み吐息を洩らして見せて、相手の心に入り込んでゆく。

「ラオド、あなたがわたくしを頼って下されば、父上に進言してあなたを筆頭騎士に戻してもいいわ。それだけじゃない、わたくしを愛して下されば、失態を帳消しにして差上げます、さあ、ラオド」

魔女の懐柔、甘き劇物。ああ、彼女は支配したいだけ。自分に絶対を持っているから、勝利を確信しているからこそ、発言である。そうだ、天使の名を名乗る第一皇女こそが……。

「ラオド？」

彼の選んだ筋道は、より自らに厳しく破滅を願うものであった。

「私は、騎士にあらず……まして、アナタ様の私物にもあらず。

私は……ちよつとだけイイ男に見えるだけだそうです、アンジェリ様」

「なにを？」

「私は……アナタの望みの道具ではないのです。どうか、役目を果たせぬ身に成り下がった私を捨て置いて下さいませ……」

彼は拒否した。第一皇女アンジェリの意見を拒否するという事は、王、妃の命令に背くに次ぐ大罪。それこそ、彼女の進言の一つで首が飛ぶ事だろう。

「命を捨てるかと申すのですか？ 筆頭騎士ラオド……」

彼女の顔が段々と、歪んでゆくのが分かった。じわりじわりと、憤怒と化す。

「……あなたの傀儡より、死を、望みます」

ああ、もう死を宣言してしまったのだな、私は。自覚したのだと思う。

「そう……ならば、勝手に死ぬ、私の預かり知らぬところでゴミの様に死ぬ、朽ち果てて死ぬがいい！ キサマなどくたばってしまっうがいいわ！」

アンジェリはそう言い残すと、牢を足早に去って行った。

「……これでいい、これで……」

ラオドはまた、目を瞑った。

第十七姫 無敵P VS ゴマ粒

森の奥地に到達したとき、サロメは啞然とした。木々が真っ黒く染まってしまっていたのだ。

いや、よくよく見て見れば、口に出すのもおぞましいが……あの黒いのは、一つ一つが蠢いていた。そう、あれはゴマ粒程の虫の集合体であったのだ。

「!!!」

彼女は理解した。あの虫共が大量に発生して森を食い荒らしてしまったのだ。それにしてもとんでもない数……黒い枝葉にも見えてしまった。

こればかりはどうしようもない。数百万、いやいやもしかしたら数千万の生物が相手である。しかも生理的に許容出来ない、絵にも描けないおぞましさ。

サロメは即座に回れ右をすると、一目散に駆け出した。しかし一歩を踏み出した直後、目の前に黒の河が現れる。虫の河だ。前後のみならず、左右にも虫は壁を作っていた。閉じ込められたのだ!

「!!!」

ズバッ!

剣の刃が壁を一字に切り裂く。百は始末しただろうか、黒の壁に切れ目とへこみが生じる。が、すぐさま別の虫が隙間に流れ込み欠落を埋めた。まるで水を相手にしているかの様だった。

じわりじわりと、壁は狭まってゆく。彼らは良質のたんぱく源を見つけたのだ。目的はサロメの補食であるう。

剣を振り回すサロメ。しかしのれんに腕押し、水にチョップ、尽きる事を知らぬ黒の洪水は着実に第二皇女へと迫ってゆく。

「!!!!!!!!!!!!!!」

最早悲鳴ですらも漏れない。黒の蠢く天井が、光を奪う。そして、天井は抜け落ち彼女へと降り注いだ……。

(もうダメ……!!)

彼女が諦めかけていたその時だった。

ポオオオオオン!

虫が割れ、橙色に染まった。

かと思えばまた黒に染まり、ばらばらと形を崩してゆく。

黒の家は崩壊し、サロメは再び外に出た。

何だ!? そんな思いが頭を駆ける。

理解不明の現象が、この一瞬の内に起きた……。

「ふん……危うい所だったな、小娘……」

そんな言葉が響いた。その直後、サロメの眼前にこれまた漆黒の影が降り立った。この声、そしてその存在の姿形にサロメは見覚えがあった。

「まつ、魔法使い様!？」

サロメは叫んでいた。あの漆黒のマントは、あの天に向け伸びる角は、そして、振り返りざまにこちらを向いたあの顔は……彼女に力与えた謎の魔法使いであったのだ。

「そうだ、謎の魔法使いである!」

が、虫はまだ、一部を焼かれたに過ぎない。今度こそ、山の様に高く積み重なり二人に襲いかかる。そのさまは巨人の手が握り潰そうとしている風にも見えた。

「失せろ、雑魚が!」

謎の魔法使いはただ右手を敵へとかざし、そう言ったただけ。魔法使いならば呪文でも唱えるもの……そんな常識は刹那に碎ける。

彼の手から、炎が放たれる。規模の為か、あらゆるものが紅に染まりサロメ自体も焼かれているかの様に熱かった。

ゴマツブムシの大群に勝利した。

「……終わったな」

「はいい……そうですねえ……」

サロメの目付きは既に、獲物に照準定める猛獣のそれであった。ちなみに目自体はハートマークと化している。

「魔法使い様、どうしてこんなに私を助けて下さるのですか……？」

うつとりとサロメは尋ねた。謎の魔法使いは答える。「それは、お前を守るのが使命だからだよ」と。

「それは……私だけの特権ですか……？」

謎（以下略）は答える。「ああ、勿論さ」と。前歯がキラツ、と輝いた。

「私……あなたの、お嫁さんに……」

「何をもしもじしてるか知らんが、さらばだ。また会おうー！」

謎は、ワープの呪文を唱えた。謎は、いずこかへとワープした。

「……して下さい、ご迷惑ですか……って……」

謎は、どこにもいなかった。

「ちくしょーっ！！！！」

大木が一本、へし折れ倒れた。

第十八姫 無敵P VS トシユーズのイケメン青年

「……………！」

サロメは まちにもどつて じじょうをせつめいした

「そうでしたか、虫の仕業だったと……それはそれは、本当にありがとうございます。ところで、あつかましいのを承知でお願いがあります……」

サロメはいやな よかんがしている

「当分は居場所を追われたモンスターらの襲撃があるやもしれません。そこで……可能な限りでいいのです、我々の町を守っては下さらぬか？」

「……………！？ ……！」

サロメは きよひした

(仕方ない、あいつを呼べ……)

町長は町民の一人に、小声で指示を出した。

「……………そうですか、どうしてもダメですか……仕方ない、騎士様、どうかお気をつけて……………」

町長が白々しく言った。

「……………」

サロメは あたまをさげると ちょうちょうのいえを あとにし
ようとした

ばんっ！

ドアがひらき ひとりのおとこが あらわれた

「！！！！？」

イケメンのせいねんがあらわれた

「騎士様、どうしても行かれるのですか！？」

青年はサロメに言う。

「どうかお願いします、この町を守って下さい！ 最早、あなた
しか頼れる方はいないのですー！」

サロメは ゆらいでいる

(よしよし、あと一息じゃな……………)

(そうですね、町長)

「どうか、どうかお願いします！ 私や私の家族らもそう願って
いますー！」

(……………ん？ かぞく？ ……たぶん おやとか きょうだい
のことよね？)

「……………？」

サロメは せいねんに しつもんした

「ええ、親も兄弟も妻や娘も皆、願っています！」

つま？ むすめ！？

せいねんは さいしもちであった

(馬鹿者！ それを言うてはならんとあれ程……)

ダッ！

サロメは にげだした

「ああっ！ 騎士様ああああああああああああああああああああ
あああああああ——！！！」

第十九姫 無敵P VS よく分からない筋肉隆々の男

サロメは みちにまよっていた

(……あわてて にげたからなー もうすぐ ひがくれるっ
てい
うのに)

サロメはいま とつげにさしかかっていた ほんにんは きづいて
いないが

(ん？ なにあれ？)

サロメのめには ところどころにゆらめく あかりがみえていた

そろりそろりと ちかづいてみれば たきびをしている おとこ
たちがいた

「 ……？ 」

さらにサロメは ちかづいて……

「 おい、貴様 」

はいごから こえがした

「 ……！ ……！ 」

ゲシッ！

「なっ、ぐあああああああああああああああああー!」
よくわからない きんにくりゅつりゅつのおとこに しょうりした

「!?! ナンだ、今の悲鳴は!」

「あそこに誰か居るぞおお!」

サロメは おとこたちに みつかってしまった

第二十姫 無敵P VS ボスらしき男

サロメは、今正に生命の危機を感じていた。筋肉隆々の男達に包囲されつつあるのだ、それはそうだろう。

いくら彼女が力を持っているからといっても、まだ十六の乙女だ。そんなサロメから見た彼らは魔物と呼んで差し支えないほど凶悪である。

付け足すなら、この暗闇と焚き火、及びたいまつの効果加わる。光と影を顔におとした男達は十分にモンスターの類だ。

「胸クソ悪いそのカツコ……。テメエ、騎士か!？」

「しかもガキの騎士様なあ、ご立派な事だ」

彼らの目付きが変わる。憎悪にも似たものから、獲物を見る……。例えば、ヘビがカエルを睨むそれだった。

殺される……いや、もしかしたらヒドイ事をされるかもしれない。彼女の頭の中には既に、縄でぐるぐる巻きにされリンチを喰らう自分の姿があった。

「!？」

ちよつとずつ後退りを開始した時だ、サロメは羽交い締めになれてしまった。いつの間にか男が背後から忍び寄っていたのだ。

彼女は軽々と持ち上げられてしまう。足が地上から離れた。

「おとなしくしてな騎士様よお、なあと悪い様には……………」

（！！ いやだ いやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ
！！）

「……………！！」

「暴れても無駄だぜ、そんな細つちよろい身体でなにが……………」

バキヤッ！

「ぐっ、あああああああ！？ 足がつ、足があああああ！」

サロメは腕が緩んだ隙に抜け出すと、男らを睨み付けた。

（そうだ、なにを恐れているの！？ 私は強いんだ、こんな身体
が大きいだけの奴らに……………）

「このガキっ、調子に乗るんじゃないぞ！」

（負ける訳がない！）

男らが動く。だが、サロメはより早く、飛び出していた。相手に
狙いを定め、身体を動作させ……………。

「止めないかキサマらあ！」

が、突如、声が響き渡り、戦いの雰囲気は一気に霧散する。男らはまるで雷にうたれた様に、動きを止めた。サロメは既に二人をノックアウトしていたが、やはり同じく動きを止め、声の主に視線を向ける。

そいつは、男達から三步ばかり離れ立っていた。背丈に関しては周りの男らと大差はなかったが、細くすらりとした身体には周囲が周囲だけに、美しくすら感じた。

筋肉男らは左右に寄って、男の通り道を作った。この様子から、多分、こいつらのボスだろう。

「ウチの連中が失礼したな。だがお前さん、派手に暴れてくれたもんだ……誉められた事じゃない」

闇の中から、男は顔を出し、言った。その男の顔を見た時、サロメは一つの事を考えていた。

「……………」

(かつ、カッコいい……………)

イケメンが現れた。

サロメは、男に見惚れてしまっている。

「ん？ ……お前さん、もしかして……おいテメェら、こいつを俺の部屋に連れて行くからな。誰もついてくるなよ」

と、ボスらしき男は言い、サロメに手招きをした。サロメは、まるで熱にでも侵されているかの様な、とろんとした目付きで、ホイと着いていってしまった。

第二十一姫 無敵P VS 山賊ボス ワイルド

「よし、これでここには誰も入れない。さっ、そいつに座ってくれ」

ボスと思しき男は、サロメに椅子へ腰掛ける様促した。サロメは言われるがまま腰掛ける。

「自己紹介がまだだったな……俺様はまあいわゆる山賊って奴で、そのリーダー、ワイルド様だ」

(ワイルド様っていうんだ……)

サロメは、“山賊”の部分のスルーした。

「で、お前さん……騎士のナリをしちゃあいるが女だろう？ 多分、違うのだろうが一応聞いておく。俺達に何用だ？ 最近、巷で噂の山賊を殲滅しに来た……にしては妙だが」

「……………」

サロメは聴いちゃいない。ワイルドなワイルドに見惚れている。

「おい、聞いてんのか。目的は何だと言っているんだが？ 第二皇女様」

「!?!?」

さすがにサロメは我に帰る。今、ワイルドは確かに第二皇女様と言った。つい、数日前までの彼女の立場をだ。

「何故、知っているのか？ と言いたげだな。その反応なら間違いないくあんた……いや、あなたは第二皇女のサロメ様、って訳だ」

「な、なななっ、何を言っ！？ 意味が分からない、そっ、そんな訳ない、第二皇女とやらはもっとセクシーで優しくて国民から人気のあるパーフェクト美女だったんじゃないかしら！？」

サロメはテンパっている。

「そこまで自分を讚美するかね？ そいつは第一皇女の方だろう、あれは確かに作りものみたいに美しいがな、第二皇女様は地味で、幼児体型でがさつで肌は浅黒い。ついでに髪も黒だったか、だろう？ サロメ様」

「なんで……どうして、そんなに詳しく……」

いつも姉の影に隠れて、顔すらも知らない者だらけのサロメを、ここまで知っているワイルドとは……。

「決まっている……俺様ワイルドは第二皇女サロメ、あんたの大ファンだった男だ！！」

「！！！？」

ワイルドはサロメのファンだった。

第二十二姫 無敵P VS 山賊ボス ワイルド 2

「俺様ワイルドは、あんたのファンだった男だからだ！」

山賊ボス、ワイルドは言った。

「!!!?」

サロメは雷に打たれた様な衝撃を受けた……と同時に、膨大な喜びを、身体から溢れ出す喜びを全身でもって表現した。

具体的には笑っているのか惚けているのか分からない限りなく無表情に近い顔で涙とヨダレを垂らし、手は阿波踊りを彷彿とさせる奇妙な動き、足は軽快なステップを踏みリズムを刻む。

後にニルベールリング名物となる、通称“サロメの舞い踊り”、その貴重な誕生の瞬間だった。

(そう……見ている人は見ている、見る目のある人は居る、私のファンがここに居る！)

サロメは天にも上る気分であった。

「いや、俺様も生のサロメ様が見れて嬉しいぜ。ほら、こっちに
来いよ」

「……」

「!?!」

咄嗟にサロメは拳を突き出した。ぶっ、と風を切り裂きワイルドに向かう拳。迎撃の一手であった。

だが……

「おっとお、危ない危ない」

「!?!?!」

ワイルドは拳をかわした。

第二十三姫 無敵P VS 山賊ボス ワイルド 3

サロメの一撃は空を切る。かすらせる事すら出来なかった。ワイルドは一瞬の内に間合いを開いていたのだ。

「ふう、危ない危ない。大丈夫、安心しろ、出来るだけ優しくしてやるつもりだから、な」

彼はその場で軽く足踏みしながら言った。ようやくサロメは理解した、ワイルドが自分に対してしようとしている事……それは彼女にとつて背徳行為である。

「……………！」

サロメは言った。

「あん？ そりゃあ一体どこの国の紳士様だ？ まあ、まだまだ夢を見がちなところは、お前さんの魅力の一つだろうがな」

彼は、冗談を言っている訳ではなさそうだ。サロメのファンというの事実であろうし、サロメを自分のものになりたいというのも本当だろう。

（確かに嬉しい……うれしかった、だけど、どうしてそんな事をしようとするの？ ……うれしかったのに、この人なら、もしかしたらと思ったのに！）

「サロメ様よお……俺の気持ちに嘘なんて無え。今までもそうだ、欲しかったものは全部、力づくでも奪い手に入れた……欲しいって感情は、俺の中の何よりも優先すべき事さ。だから俺は、お前が欲しい、俺のものにしたい、そこに……嘘は無え！」

嬉しいよ、だけど……だけど、ワイルド！

サロメは なによりもはやく ふみだした

「なっ……！？」

サロメは ワイルドの うしろにたっていた

かれがようやく ふりかえろうとする だが そのまえに

バキッ！

「ぐっ……あああああああああ！？」

ワイルドに しょうりした

「……こいつは、驚いた……姫様よ、何をした？ 何も……見えなかった、強え、強えな、サロメ。やべえ……益々、俺のものに……したくなった……」

「……………」

「ん？ 何だっ、て？」

「アナタは、確かにカッコ良かったよ。そこは自信持っていていいと思う。だけど、そういうのはもっとお互いを知ってからよ。覚えておきなさい」

「……互いの、事？」

「そう……アナタは私の熱狂的ファンで私をどうこうしたいのは痛い程よく分かるわ、何せ対象は私だもの、どうしても欲しいのは分かるわ！ だけど、私はアナタの事、名前と見た目位しか知らないでしよう？ 長く一緒に過ごして、互いがどんな人かを理解しなきゃいけないんだと私は思うの」

「……ははっ、未だ……そんな事言う奴が居るとは……なら、俺様と一緒に居てくれ……そうすれば万事オツケーだろう？」

「魅力的な提案ね。だけど残念、もう恋は冷めちゃったかも……それに、私は今急いでたんだっただわ……じゃあね」

「……待てよ、せめて一晩ゆっくりしていけ。もう夜中だぞ？」

「……何もしないでしようね？」

「何かしたくても、身体中が痛てえから……何も出来ない、さ」

「……分かったわ、一晩だけ泊まらせて。いい、一晩だけよ！」

「……ああ、お姫様……」

「……………」

サロメは取り敢えず、ワイルドの部屋に泊まる事にした。未だ動けぬワイルドを部屋の隅へと移動させ、自分は正反対側に腰を下ろす。

睡魔は、すぐにやってきた。

第二十四姫 無敵P VS 山賊団

「うそ うそ

」……………?」

サロメは ものおとに めをさました

「よう、起きたか?」

「……………!!!!!!?」

サロメは ひめいをあげた めのまえに さんぞくボスの かお
があつたからだ

バシィッ!

「ぐああああっ! ちょっと、何しやがる、ただ寝顔を特等席で眺
めていただけだろうが!」

「……………!」

バキッ!

「ぎゃああああああああああああああああああああ!」

ワイルドに こんどこそ しょうりした

「……………!」

サロメは　へやをでていこうとした

「ボスッ、どうしたんですかい！？　何か悲鳴みたいなものが…

…」

ワイルドのぶかたちが　あらわれた

「なっ、ボ、ボスが壁に礫にされてやがる……お前がやったのか
騎士め！」

ワイルドのぶかたちは　いつせいにおそいかかってきた

(じょうとつ……わたしはいま　イラついてんのよ！)

ビシッ　ガッ　ドカッ　メキッ！

「「「「ひぎゃああああああああああああああああ！」」」」

」

かけつけてきたぶかたちに　しょうりした

サロメは　そとへとかけだした

「そいつを逃がすなああああ！」

たいりょうのぶかたちが　おそいかかってきた

サロメは　こんしんのちからをこめて　じめんにけんをうちつけた
ポオオオオン！

「バカなああああああああああああああああああああ！」

たいりょうのぶかたちに　しょうりした

サロメは　そのまま　やまをくだっていった

「…………ふっ、ふふ…………第二皇女サロメ…………益々、ファンになった
ぜ…………」

ワイルドは、言った。

第二十五姫 無敵P VS 空腹

ぐううう……。。

サロメの はらがなっている

(……そういえば きのつのあさから なにもたべてない……)
さんぞくたちから たべものを もらってきてもよかったのに
といまさらおもった

「……? ……!」

サロメはすぐに キノコをみつけた

「~~~~~」

サロメは キノコへとはしっていった

(クッククク ……まさか このどうみてもキノコなおれが モ
ンスターだとはおもっまい)

キノコは モンスター キラーマタンゴだった

(さあ ひっこぬくがいい そのしゅんかん マンドラゴラもび
つくりの こえでないでやる)

第二十五姫 無敵P VS 空腹（後書き）

キラーマタンゴ

美味しいキノコ。ひっこ抜かれたとき、キノコの下にある球根の様な部位も一瞬に抜け、そこが悲鳴を発する。その声の凄まじさや、鼓膜は確実に破壊され、場合によっては死に至る危険もある。

ひっこ抜かずに切断し採集するのが良く、サロメの対処は正しい。生でも美味しい。因みにサロメは偶然にも最善の対処を行っていた。

第二十六姫 無敵P VS 深い霧

「……………」

サロメは ひたすらみちを あるいている

(……………あー しんどい あれからどれだけあるいたかしら ……
つぎのまちはー?)

あれから サロメは やくいちじかん さんどろをあるきつづけ
ていた

(たぶんもう さんじかんは あるいたわ まちがいなく……………)

サロメは サバをよんだ

とそのとき とつぜん ふかいきりが あたりをつつんだ

しかいが ほぼゼロとなった

「!?!?」

サロメは とつぜんのできごととに どうゆつしている

“グルルルル……………”

「!?!?」

モンスターのような うなりごえが きこえた

サロメは けんをぬき みみをすませた

「……………?」

“ がっうっ!! ”

「……………!?!」

サロメは けんをふりまわしている

ガラッ

(えっ……………?)

サロメは あしをふみはずした

「……………!?!」

かのじよは がけしたへと てんらくしていった

第二十七姫 無敵P VS 第一皇女アンジェリ現状

第一皇女アンジェリは日が昇ると同時に父、ニルベールリング第十二代国王の元へと足を運んでいた。

国王は既に起きており、あれは恐らく他国の商人だろう、と商談をしている風であった。

アンジェリの登場を知った商人らの対応は一つしかない。決まって振り返ってから、にっこりと営業スマイルを作り、口々に定価通りの安っぽい世辞を述べる。

相変わらずお美しいから始まって、ニルベールリングに咲く一輪の花、あるいは絵にも描けない美しさ……中には神が作りたもうた芸術品と大盤を振る舞う者もいた。

アンジェリは顔こそ笑っていた。いつもと何の変わりもなく、薔薇の様に。内心、溜め息一つ。いわく“何を当然の事を、もっと気のきいた言葉はかけれないのか無能どもめが”。

「お父様、大切なお話しがあるのですが……出来れば人払いを」

彼女がそう言えば、王も、商人も警護の騎士らでさえも彼女の望む様に動き、王の間には二人しか残らない。

「アンジェリどうした、こんな朝早くから？」

王は少々機嫌を損ねているのか、砂を噛んだ様な顔付きだ。お楽しみに茶々をいれられた様な態度でもある。

「実は、ラオドの事なのですが」

いかにも深刻そうに、アンジェリは切り出す。

「あの者は失態を二度繰り返す中、されど未だ位は騎士、何故でしょうか？ このままですと、罪人が騎士のままだと笑われましよう」

静かに、しかしはっきりと彼女は言う。相変わらず、顔は笑っていた。

「待て待て、待つのだ……どうした急に？ 以前はラオドの失態に目を瞑る様にとお前は言ったではないか」

「あれは単に、あの男の騎士のプライドを考慮した故です。しかし今、あ奴は騎士としての誇りすら持ち合わせておりません」

彼女の脳裏には、昨晚の出来事が再生されていた。奴は私を拒絶した……私が、私があんなに目をかけてやったというのだ。

「ではアンジェリ、お前はラオドをどうしたいのだ？」

「……騎士位を剥奪し、畑でも耕して生きていただいた方が、国の為になるかと……」

彼女は最大限、言葉に気を付けながら発言した。

「ふむ……アンジェリ、お前の言いたい事は分かる。だが、ラオドの扱いは慎重でなければならぬ。あ奴に心酔している者も多いし、牢に入れる際にも一悶着あつたのだ……なあに、お前は心配せずとも私に任せておくがいい」

「しかし……」

「アンジェリ、私は誰だ、私は何者なのだ？」

王は言った。声色から、彼が今どんな状態にあるのか理解した皇女は、喋るのを止め頭を下げた。

「……申し訳ありません、出すぎた事を……では、失礼します」

アンジェリは、足早に王の間を立ち去った。だがそれは、決して王に気圧された訳ではない、これ以上の言葉は不要と判断したからだ。

王の間の外にで待ちぼうけの商人らに、笑顔で申し訳ありません、と頭を下げ、彼女は去ってゆく。

背後から、賛美の声が聞こえる。

(父上には……そろそろ、ご退職願おつかしらねえ……)

第二十八姫 無敵P VS 無垢 1

夕陽が目に眩しい頃お母様の声が聞こえる。私は遊びに夢中で時間が経つのを忘れていた。

友達との別れを惜しみながらも、私はわざわざここまで迎えに来てくれた母親の胸に勢いよく飛び込んだものだ。

お母様はとても優しく、お母様はとてもお料理が上手くて、お母様はとてもきれいで、お母様は……。

・

「うっ、うん……？」

「あ、サロメさまがおきたー！」

「おきたー！」

「！！？」

目を開けた途端、二つの顔が覗き込む。子供だった……それもー見し五つか六つ位の。

「なっ……なっ、なに？ 何事！？」

全く訳が分からない。必死に何があったのかを思い出そうとしたが、なかなか形にならない。輪郭がぼやけているのだ。

取り敢えず私は今、ベッドの上に寝かされていて、子供二人がおきたーおきたとはしゃいでいる。ここは、どこかの家の中らしい。

「サロメさまー、よかったね」

「よかったよかったー」

どうやらこの子らは双子ちゃんらしい。しかしなんでまた……。

「サロメさまはね、みちにたおれてたの」

「たのー」

道に……倒れ……？ ああ、そうだ思い出した、私は崖から落ちたのだ。急に濃い霧が出てきたと思ったら、足を踏み外した。

と、いう事はこの子達が私を助けてくれたのだろうか？ 試しに私を家まで運ぶ双子ちゃんを想像してみたが……引き摺られて、顔を小石でガンガン打つの図しか想像出来ない。

って、そもそも子供だけで家に居る訳がないだろうから、この子達の両親が私を運んでくれたに違いない。

「……あ、お目覚めですか、サロメ様」

今度は大人の女性が現れた。ああ、たぶんこの人は……。

「「ママー！」」

やっぱりお母さんだった。

「あの……ありがとうございます、私を運んで下さって」

「えっ……いい、いいえ、私の夫が気絶しておられたあなたを抱えて帰って来たのです。狭い家ですが、どうかおくつろぎ下さいな」

女の人はそう言うと、ぺこりと頭を下げた。

「ねー、サロメさまー、あそぼー！」

「あそぼー！」

しかし、子供というものは気まぐれなのだろう、すぐに会話らしい会話もした事のない私に、遊ぼうと持ち掛けてくる。

「「こらこら、サロメ様はまだ目が覚めたばかりなのよ、ダメでしょ」

「いいえ、私は全然構いませんよ……さあ、何して遊ぼうか？」

「おそとであそぼー」

「おそとー！」

二人はこちらがベッドから起き上がる前に、走って行ってしまった。

「ありがとうございます……あの子達、遊び盛りなのに、私があまり遊んであげられないから……」

私は、いえ、任せて下さいと言い、二人の向かった方へと早足で向かった。

外に出た私は子供達と遊ぶ事にした訳なのだが、何して遊ぶかを尋ねたところ二人は首を傾げてしまった。余りに悩んで、むむむー、とか言い出したものだから私が率直に鬼ごっこでもしようかと切り出した。

が……。

「鬼ごっこってなにー？」

「なにー？」

なっ、おっ、鬼ごっこを知らないだど!? 私が小さい頃は最もポピュラーかつ誰もがやるうつやろつと言った鬼ごっこを知らないとは……年代の差? いやただ単に、ここにはこの一家しか住んでいないっばいから、知らないのだろうか? 外界から隔離された感じの場所だし……。

ともかく、私は鬼ごっこのルールを二人に熱弁した。鬼を決め、残りの者は鬼に捕まらない様に逃げる。鬼に触れられたら、触れられた人間が鬼となり、元の鬼は逃げる立場となる。

この単純明解なルールこそ、鬼ごっこがアツい理由なんだと思う。

さて、続いてはもう実戦だ。私が最初は鬼を担当した。二人には逃げて貰い、十数えたら鬼が発進する。十、つと……鬼が、解き放たれた！

きゃーきゃーと悲鳴をあげて逃げる二人。子供の歩幅に私はすぐに追い付いた。だが、すぐに鬼を押し付けてはこの遊びの魅力は伝わらない！ 待てー、食べちゃうぞー、とのセリフを吐きつつ、私は二人の歩幅に合わせた。

よし、そろそろ鬼の立場も教えてあげよう。私は加速し、二人の前へと回り込んだ。一際大きく、きゃーと悲鳴があがる。

「つーかまえたー！」

私は手を伸ばす。よし、タッチ！ ……と思いきや、二人は左右にひょいとかわし、私のタッチを回避した。

案外すばしっこいのね、と今度は背面から追い詰め肩にタッチ……が、また空を切る。な、何イ！？

「鬼さんこちらー！」

今度は歓声があがる。何？ 何が出来たの？ と思っていると、二人がててと駆けて来た。その何かを、背中に隠しているらしい。「どうしたの？」

私は気付かないフリをしてあげた。それが年上つてものでしょう。まあ、虫系の脚が沢山ある系の生き物だったら悲鳴をあげるけれども。

「「はい、サロメさま、これあげるー！！」」

二人の小さな手に乗っかってたもの……それは、花で作られた輪っかの冠だった。凄い……わざわざ二人でこれを作ってたんだ。

「わぁ……どうもありがとう……」

手を伸ばす私。が、二人は花冠をさっ、と遠ざけた。えっ、あれ？ くれるんじゃないの？

「ダメ、わたしたちがサロメさまのあたまにのつけるのー！」

「のつけるのー！」

成程、そういう事か。私は乗せ易いようにと頭を向けてあげた。

「はい、どうぞー！」「これでサロメさまはじょうおうさまだねー！」

「じょうおうさまだねー！」

はは……ありがとう。でも、私はどう転んでも女王様にはなれないし、なりたくもない。

「じょうおつさまー、どつぞごめいれいをー！」

「ごめいれいをー！」

だけど、今、この場ならこの子達にとっての……王とは違っけど、何ていったらいいのか……姉的なものになれたらいいな。無論、あの性悪アンジェリみたいなるくでもない姉とま真逆の、優しくて面倒見のいい。

「そうね……なら、私の事はサロメ様じゃなくて、サロメお姉ちゃんで呼んでくれるかな？」

「うん、いいよサロメおねえちゃん！」

「おねえちゃんー！」

何故だろうか、私は今までのどの時、どの瞬間より幸福だったのかもしれない。二人はどこまでも自然体で、どこまでも純粹で……それを美しいと思えた。二人の言葉を素直に受け止められたのだ。

本当に、本当に楽しい一時でした。

「みんなー、ご飯の時間よー！」

と、母親の声が聞こえる。私が振り向いた頃には、双子ちゃんら

はもう母親の元へと駆けていっていた。私が所作なさげにしていると、彼女はこちらにも声をかける。

「サロメ様ー、豪華な食事とはまいりませんが、どうぞお食べになつて下さいな」

彼女は手提げのかごを開いた。中にはパンに野菜やハムなんかを挟み込んだもの……なんだっけ、こいつの名前。度忘れした。

「わあいつ、サンドイッチだー！」

そうそう、サンドイッチだ、小さい頃はよく食べてたなあ。そういえば、お母様が時々こうして持って来てくれた……。

さて、陽も傾いて来た。あの後も芝生の上で昼寝をしたり、また追いかけてこをしたり、歌を歌ったりした。こんなに楽しかったのはいつ振りだろう？

いいや、きつと……こんなに楽しかった日は初めてだ。ここまで無邪気にはしゃいだのは本当に初めてだったのだ。

夕陽に向かう帰り道。双子ちゃんは手を繋ぎ、スキップしながら先に行く。母親が、私に話しかけて来た。

「あの子達、あんなに嬉しそう……サロメ様、ありがとうございますわ
ます、あそこまではしゃいだのは久しぶりですわ」

「い、いえ、いい子供達ですね、私もつい全力で、というか我を忘れてしまって……」

「あの……もしよろしければ何日でもウチに居て頂いていいのですが……」

「えっ……!?!」

「あの子どもも喜びます。もしも、もしもサロメ様に居て頂けたのなら、どんなに楽しい事でしょう」

その言葉に、心揺らいだ。

「「いただきまーす！」」

私は、運ばれて来た晩御飯に反応を示すことすら忘れる程、考えていた。“もしよろしければ、しばらくここに留まってもいい”その言葉が原因だ。

どうしてこんなにも悩んでいるのだろうか？ 簡単だ……別れたくない、その一心。

私はもしかしたらずっと、憧れていたのかもしれない。

楽しかったから。この人達と過ごしていて分かった、ここは私の理想とする居場所なのだ。ずっと辿り着きたかった理想郷にも似て……。

「サロメ様、どうかなさったのですか？」

その言葉で我に帰った。一家の大黒柱の言葉だ。

「いえいえ、美味しそうな料理だなーと思って」

ならいいのですが、と彼は言った。子供達も、“どうしたのーしたのー”と時間差で心配してくれていた。うん、ここは一丁、心配かけないように振舞わなくては！

「うん、もぐもぐ……おいひい……むしゃむしゃ、おいふういで

ふゆねこれ!」

「あはは!、サロメさまげひん!」

「おげひん!」

いつまでも……。

そうだ、無理だっていい、いつまでも居たい。一時でもそう思った。

でも叶う筈はない、どこかでそう分かっていた。

夜の時間。外は暗幕を垂らしたかの様に暗い。灯りの一つもない。そしてあまりに静かな夜だった。

既に子供らは、すやすやと穏やかな寝息をたて眠っていた。いびきまで時間差だったのには笑ったが。

さて、サロメは大人二人に切り出した。わざわざ子供達が寝静まるのを待っていたらしい。

「申し訳ありません、ここまで親切にして下さったのに……私は、明日の早朝にここを出ます」

サロメの言葉だ。

「あのう、それは明日じゃないとダメなのですか？ どうしても明日じゃないと？ 気兼ねなんてしないで下さいな」
母親は泣きそうな声でそう言った。

「本当にごめんなさい。実は私は今、キレイな身ではありません……下手をすれば皆さんに迷惑の及ぶ危険があります」

「……………」

「この事は忘れません、あなた方の事も決して忘れません。こんなにも私に幸せをくれた人たちが居た事を、決して……………」

「でも……………」

「また、会いに来ます。堂々とこの国に帰って来る日が来たなら真っ先に会いに来ます！ その時は沢山、沢山の土産を持って来ますから……だから、楽しみにしていて下さい！」

「……行くんですね、サロメ様」

これまで腕組みし一言も発していなかった父親が、初めて口を開いた。

サロメははい、と神妙に受け答えをした。不安そうな母親を、父親は諭している。

サロメは最後に一度会釈をすると、奥の部屋へと引っ込んだ。

「……残念ね、サロメ様。もう少し、もう少しだけ居てくれるかと思ったのに」

「それでいい……ほんの少しでも彼女の記憶の中に居させてもらえるのなら、それでいいんだ」

「……そうね。サロメ様、私達は何も求めたりはしません。私達は与えるだけなのですから……」

「「ばばー、ママー」」

「おや、起きてしまったか。よしよし、いい子だいい子だ……」

「まー、サロメさまはまたきてくれるかな？」

「あら、聞いてたの？ ……大丈夫、きっと来てくれるわよ。な
んたってあの子は……」

・

（ああ、しまった、あの人たちの名前を知らないままだ……）

サロメはベッドの中に居た。

（明日……出る時、聞こうかな……起きてたら……失敗した、聞
いておけばよかった……）

サロメはそのまま眠りについていった。

第三十一姫 無敵P VS 花

「……」

サロメは めをあけた

「……？」

サロメは つちのうえに ねむっていた

どうやら がけからおちたあと そのまま きぜつしていたらしい

「……」

かのじよは からだをおこすと つちをはらい あるきだした

……いちどだけ かのじよは ふりかえった

そこには つちがあるだけだった がけがあるだけだった

「また きますから ……ん？ わたしっつてば なにいつてんだ
ろ」

サロメは ふたたび あるきだした

かのじよのせなかを よりそう4りんのはなが みおくっていた

第三十二姫 無敵P VS 謎の魔法使い アトモス

「……………」

サロメは おがわにそって あるいている

どのみち さゆつはがけなので こつするほかない

「……………」

くんくん……。

おいしそつなにおいが ただよってきた

サロメはいわのかけから むこつがわをのぞきこんだ

「うーむ……何と火加減が難しい奴よ。素直に食べ頃に焼けてくれ」

謎の魔法使いは、魚を焼いていた。

（魔法で焼けば炭になる。だからといって、焚き火で焼けば時間が掛かる……じれったい、何ともだ）

彼はパチパチと焼ける魚を凝視し、火に近づけたり遠ざけたり、あるいは向きを変えたりしていた。付近には、かつて魚だったであろう黒い何かが大量に転がっているから、悪戦苦闘しているらしい。

「くっ、面倒な。いつそのこと生で……いいや私ともあるう者がそんな真似を……」

「……あのう」

「ぬなあああ！？」

サロメが声を掛けたと同時に、謎は声をあげる。彼女の方がかえって驚いた。

「また失敗だとオオオオ！？ おのれえ、魚ごときがこのアトモスを愚弄するかっ！」

「……あの、魔法使い様？」

「うあっ！？ な、なんだお前か……」

ようやくサロメに気付いたらしい。彼は安堵の溜め息を洩らす。

「何をされているのですか？」

サロメは尋ねてみた。

「何って魚を調理し……あいや、なあに、魚の黒焼きを作っていたのだ！ 魔術を行使した後の疲労回復滋養強壮に良いのだ、ウハハハハ！」

「そうだったんですか。私はてつきり、火加減が分からないのかと思ったのですが……なんでしたら、私が作りましょうか？」

「むっ……？ ま、まあ普通の焼き魚も食べてみたくなった事だしな、やって見せるがいい」

「はい」

サロメは串通しの魚を焼いた。謎の魔法使いことアトモスは、その様子を凝視している。

「ほう……上手いものだ、お姫様なら料理は苦手かと思ったのだが？」

「いえいえ、こう見えても小さい頃はよく母の手伝いをしていましたし、ある程度のものなら作れますよ」

サロメの手付きは成程、安定している。ぎこちなさ、というか固さが一切ない様だった。

「さあ、焼けましたよ。どうです？ 一つお召し上がりになってみて下さいな」

アトモスは魚を受け取ると、勢いよく頬張った。

「む……美味しい。絶妙だ、なんとなんと……これは本当に美味しい」
アトモスの言葉に、サロメはさり気なくガッツポーズ。小さく“
いよっしゃー”と発言した。

「美味しいでしょう？ 私、お料理は自信があるんです。極悪ア
ンジェリはまだ上手いんだけど十分ですよ。で、魔法使い様、こ
れから先、毎日美味しい料理が食べたいと思いませんか？ 思いま
すよね、それなら私が毎日……」

「うむ、ごちそうさま。ではな、また会おう！ とおっ！！」

アトモスはワープの呪文を唱えた。アトモスはワープした。

「……手塩にかけた料理を振る舞えば、男一人の旅がもつと楽し
くなると思うんですよ！ だから、魔法使い様、私と一緒に連れて
いっ……って……」

彼はもう居なかった。ついでに串だけが残されていた。

「ちつくしよおおおおおおおおおおおおおお
ー！！！！！！」

バゴオッ！

断崖絶壁に拳型の穴が空いた。

第三十三姫 無敵P VS 今日の昼飯？

「……………」

ガサツ ガササツ

サロメは みちなきみちを すすんでいた

こしもとまでのびるくさが かのじょをくるしめている

ブチイッ！

「……………！ ………………！！」

サロメはくさむらを あらしている

「ジシャアッ！！」

「！？」

モンスター レアツチノコが とびかかってきた

スッ……………。

バツ！

ズバッ！

サロメは きれいな いあいぎりで レアッチノコをきりさいた

「ジャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

レアッチノコに しょうりした

(……ツチノコって たべられるかしら?)

レアッチノコのきりみを にゆうしゆした

「ラーズ、相談したい事がありました」

その突然の来客者に、ラーズ第七騎士隊長は慌てて頭を垂れた。
第一皇女アンジェリが現れたからである。

「これはこれは……アンジェリ様、このラーズに如何様な御用件
で？」

「それなのですが……」

彼女は部屋の扉を締め切ると、隅へ移動した。

「どうやらそろそろ、お父様とお母様には退場を願う頃合いかと思
いましてね……それでラーズ、あなたの知恵をお借りしたいので

邪悪な意志は濁流が如く人々を巻き込む、この国にかつてあった
教えだった。

第三十四姫 無敵P VS 子供? 1

「……………! ………………!」

サロメのテンションは現在、非常に高かった。道なき道を進む事数時間、遂にまともな道に出たからだ。ただ、街道を発見しただけなのにこの達成感! 姉を上回った気分にも似ていた。

スキップを踏む元気を見せながら、彼女は街道を進んでゆく。放たれた弓矢の様に一直線に。

(よしよし いいかざむきだわ これで つぎのまちとか みえればさいこうなんだけど)

相変わらず先には道しか見えない。だけど、道さえ辿っていけば行き着く先は人の住む場所だ。希望はもうすぐやってくる、その心地、大きなプラス。

が……………早速、プラスの気分を否定しにかかる声があった。

「おいつ、兄ちゃんよお……………肩ぶつかったぞコラア!」

(……………はぁ なんなのよ いいきぶん だいなしだわ)

サロメは声のする方へと顔を動かした。すると、やはりトラブル

が起きている。

剣を腰にさした、どこぞの兵隊らしい男が五人、たった一人の相手からんでいたのだ。鎧を着込んだ熊の様な男らに対し、ボロボロのマントコートを着込んだ一人は、タヌキを思わせる。

状況は明らかに一触即発であった。これを見過ごせるサロメではない。早速、間に割って入る。

「ちょっと止めなさい！ 明らかに脅しじゃないの、それがどこぞの兵隊さんのやる事なの!？」

彼女の登場に男らは予想通りの反応を示す。いわく、“なんだテメエは”だの“こつちは取り込み中だ”だの……よしよし、絵に描いた様なやられ役だとサロメは思った。

「あろう……」

声色から判断して、このフードを深々と被った者はまだ、幼さが残る少年、あるいは少女だろうとサロメは判断する。

「大丈夫！ 私があなたを助けたげる」

「いえ、いりません……むしろ邪魔なんですけど」

「!!!？」

一瞬、耳が壊れたのかなと思った。思わず言葉を失う。あれ？ 今、邪魔とか言われた様な気が……。

「女の子に助けられたら、ボクの人生おしまいです」

「!?!?!?」

(なっ……!!? こおんの クソガキイイイイ!!)

第三十五姫 無敵P VS 男達

(こおんのクソガキイイイ！)

サロメがそう思ったのも無理からぬ事だった。ガラの悪い男らにからまれていた奴を助けてあげようと、意気揚々と割り込んだ。

だが待っていたのは、要救助者からの“むしろ邪魔”という目から火花が出そうな発言。そりゃあム力つくだろう。

(そこまでいうのなら じっくりよくをみせてもらおうじゃないの！)

サロメは対立するグループ間より数歩さがった。そうして腕組みし、事の成り行きを静観する方向としたのだ。

「おいおい坊や……お姉ちゃんに助けて貰った方が良かったんじゃないの？ 言っとくが俺らは礼儀知らずにや敵しいぜ」

男の一人が、下品な笑みを浮かべ言った。兵隊にもピンからキリが居るが、こいつらは限りなくキリだろう。ろくでなしの類いだ。

だけど、兵隊らの胸の高さまでしかないアイツは、臆することなく堂々と言い放った。

「……御託はいいよ、さっさと来いクズ共」

「つツ！！ じゃあそのクズが行くぞクソガキがあああ！」

あっさりと挑発に乗り、男の一人が駆け出した。常人にはホディ―ブロとなる一撃も、その者にとっては胸部への打撃となるう。

彼はその拳をギリギリでかわした。が、反撃は出来ない。男らは顔以外を鎧ですっぽり覆っている。下手な反撃は相手に捕まるだけなのだ。

「おらあつ！」

体勢を即座に正すと、今度は頭上から腕を振り下ろす。今度は回避しきれず右肩に命中した。どつ、と鈍い音が響く。

彼は悲鳴を堪えた様だが、今の一撃が動きを大きく制限した。続けざま繰り出された蹴りを、まともに受けてしまい大地に倒れ付す。

「ふん……でかい口をたたくわりには大したことねえな、ガキィ！」

男が嘲笑をあげる。ここで彼らが行為を止めていたのなら、サロメの出る幕はなかったろう。だが、兵隊らは手をボキボキと鳴らすと、倒れる彼へにじり寄る。

「ようし、今から二度と俺達に逆らわない様にしっかりと教育してやる。おら、立てよ！」

まだ、やる気だ。

そう判断した時には、既にサロメは動いていた。

バキィッ！

「ぐあああああああああああああ！？」

「なっ……！？」

「あんたら……いい加減にきなさい！！」

第三十六姫 無敵P VS 子供? 2

「あんたら……いい加減にしなさい!!」

男を一人吹き飛ばし、サロメは言った。いい加減にしなさい、男らの彼に対する仕打ちの事だ。

倒れ苦しむ相手に対しての追い討ち、それはサロメにとって卑怯でしかなかった。

しかしいくら予期せぬ攻撃だったとはいえ、鎧含めて百キロ近いものを跳ねとばすパワー……しかも金属のアーマーはメイスで殴られた様にへこんでいた。

「……おい」

「ああ」

彼らは短いやり取りで話を切ると、怪我人一人を担いで逃げ去った。どうやら勝利でいい様だ。

「ふん、口ほどにもない連中ね。……で、アンタ、大丈夫?」

サロメは、未だに起き上がれない彼に声を掛けた。

「……………んで……………た……………」

「えっ、なに?」

「何で、助けたんだ……いらないつて言っただろう」

「別にアンタを助けた訳じゃないわよ。あいつらのやり方が気に入らなかつただけ……それに、抵抗出来ない人間がボコボコにされている所なんて、私がこの世で一番見たくないものなのよ」

「ボコボコになんて、されてない！ これからだっただ、これからアイツらを……」

「あいつをどうするつもりだったのよ？ 例えまぐれで一人倒しても、あと四人居るわ。多分、気を失うかぐらいまでされるがままだったんじゃない？」

「……その時はその時だった」

彼は終始変わる事なく真っ直ぐであり続けたと思う。一貫して助けはいらなかつたと言い、余計な事をしてくれたと非難する。

（これだから子供は……非難するにしても、助かった、くらい言えばいいのに……）

頭でそう思いつつも、サロメの行動は反している。手を差し出し、立てる？ と言った。

「うるさい！ 憐れみなんて受けない」

「そんなつもりじゃないわ。目の前で立てそうもない子を無視する程、冷酷で居たくないの」

「……立てるよ、一人で」

とボソツと言うと、身体を震わせながらも立ち上がる。ダメージはかなり有る様だが、どうにかは歩けそうだ。

「よろしい。で、私はサロメっていうんだけど、アンタは？」

「……………」

「名前よ、あるんでしょっ？」

「……ボクは、カースだ」

彼はそう名乗った。

第三十七姫 無敵P VS モンスター デスバード

ぎゅっ ぎゅっ

ふたりは かいどうを あるいていた

「……何で付いてくるんだよ、お前は」

カースがいった

「……………」

「ボクが心配だって？ 言うておくけどボクはこの前モンスターを倒したよ！」

ガサツ

「!？」

「クアアアアア！」

モンスター デスバードがあらわれた

「丁度いい、ボクの実力を見せてあげるよ！」

カースはけんをぬき デスバードに きりかかった

ひよい

デスバードは こうげきを かわした

「なっ!？」

「クアア！」

デスバードの こうげき カースに12のダメージ

「ぎっ……いつ、痛くないっ！」

スッ……。

パアアン！

サロメは デコピンをしようした

「グエエエエエエエエエエエ！？」

デスバードは ピヨリじょうたいに なっている

「……!」

サロメは カースにしじをだした

「くっ……わっ、分かってる！ でやあああああああ！」

ズバッ

第三十八姫 無敵P VS 少年カーズ

ガサッ

モンスター カオスイーターがあらわれた

「うおおおおおおおおお！」

スカッ

「……」

ガスッ！

「~~~~~!?!?」

カオスイーターに しょうりした

ガサガサッ

モンスター ミニゴウレムが あらわれた

「だあああああああああ！」

ガギイイイン……

ミニゴウレムは ダメージをうけない

「……………」

ズドッ！

「ヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲ！？」

ミニゴウレムに しょうりした

ガササッ

モンスター サロメが あらわれた

「なんでだよ！！？」
ペシッ

カースに 7のダメージ

「痛っ…………やるってのか！」

くいっくいっ

サロメは ちょうはつしている

「後悔するなよ……………」

第三十九姫 無敵P VS 報復 1

「はっ……！？」

カーズが目を開けると、黒ずんだ天井が見えた。普段から見慣れた色だった。

自分は自分の居場所へと帰って来たのだと理解した。頭に鈍痛があった。

「あれ、でも何で……」

自分はここに居るのだろうか？ そんな思いが去来する。自分は確かに街道を行きモンスターを狩って……。

“……………！”

そっだ、あの女だ。モンスターらを指一本で薙ぎ倒した怪力の持ち主。確かあいつが突然しかけてきて、それから……どうなった？

自分が家に寝かされている事を考えたなら、何とも情けない話だが気絶でもさせられて、あいつに運び込まれた……あるいは倒れたまま放置されている所を拾われたか。

「何だ……結局、ボクは負けてばかりか……」

カースは誰に言う訳でなく、強いて自分に呟いた。男らに負け、モンスターにはまともにダメージを与えられず、あの女、確かサロメとかいった奴にも多分負けた。

この間は確かに勝てた。勝てたんだ……。

「父さん……」

ボクが早く強くなって兵士になれば……父さんや母さんは応援してくれるだろうか？ 多分、してくれないだろうな……。

サロメは、鎧を着ていた。あれはニルベリング中央の、ネフィリム城騎士の鎧だ。全ての兵士の憧れと言ってもいいだろう。

もしかしたら彼女は、名のある騎士なのかもしれないと、カースは今更ながらに気付いた。

(……ハアア……あいつも運がないわよねえ)

サロメは街中を歩きつつ、つい先程の出来事を思い出していた。

“うおおおおオオオオオオオオオオオオオオオオ!!”

カースは サロメめがけ とっしんした

ひよい

サロメは ギリギリまでひきつけて かいひした

“えっ……うっ、うわあああああああ！！！”

ゴオオオオーン！

カースは おおきなじゅもくに しょうめんしょうとつした

“ぶべあつ！！！”

カースは たおれた

“！！！！？”

(……まあ、何とかアイツの家に運んどいたから大丈夫だとは思
うんだけど……果物くらいは買っていつてあげようかしら。元々、
私がかかったのが原因だし)

サロメはフルーツ売りの女性に話し掛けた。

「あの、ここで一番高い果物はどれですか？」

サロメはお金を惜しまなかった。こうして彼女は手のひら一杯サ
イズの真っ赤なりんごを五つ、手提げカゴに乗せてカースの家へと

引き返した。

が、そこに現れたのは六つの影だった。何か見覚えのある連中など記憶を辿れば、ついさっきカーズにからんでいた兵士達ではないか。

プラスの一人はすぐに分かった。他の連中を大きく超える身長とサイズの持ち主だからだ。野蛮で知られるオークなんかのモンスターをさらに五割増しにした様な、正しく化け物。

こんな男も鎧を着ているのだ。特注も特注の品だろう、コメディイの様でもある。

「何よ？ リンゴは五つしかないからあげられないわ」

サロメはわざとそう言った。むしろこの状況下でリンゴ目当ての方がどうかしているだろう。

「ああ、仲間の敵討ちにでも来たの？ やめときなさい、今度は怪我じゃあすまないわ」

最大級の脅しのつもりだった。だが、男らは意に介した様子もなく、ただちよいちよいと指を差した。

どうやら人気のない場所に連れていきたいらしい。サロメは素直に応じた。負ける要素など微塵もないと確信しているからだ。

そんな一部始終を、カースは目撃していた。

カースは、男らやサロメのあとを後をつけていった。

第四十姫 無敵P VS 報復 2

「ようしようし……ここならだあれの邪魔もはいらなあいだろう」

サロメが男らに伴われ連れてこられたのは、カビ臭い何かの倉庫だった。足跡がくつきり残る程のホコリ、もう何年も使われていないのだろう。

その真ん中にサロメは引っ張り出された。彼女を円状に五つが囲み、一つが真正面で向き合った。あの巨漢だ。

どうやら男らのボスか、はたまた腕っぷしに自信のある者かだろう。要塞の様に立ち塞がっている。

「やれやれ、情けないわね。か弱い乙女一人相手に大の大人がこんなにも……恥知らずもいとこだわ」

「恥知らずなものかああ、おまえ、筆頭騎士を倒した奴だそうじゃないかあ、なあサロメさまよお！」

巨漢の男が言った。どうやら噂はもうヒト伝いに流れているらしい。あの王などは箝口令をひいているのだろうが、こんな田舎のころつき騎士が知っているのだからあまり意味はなさそう。

サロメは大して驚きもせず、肩の力を抜き睡眠の最中の様にリラックスしていた。だとして、正体を知られたとしてそれがどうした？と。

まああの時、一人をぶっ飛ばした時にこそそと帰っていったのは、事実確認の為だったのだろう。容易に想像出来た。

「お前……いや、サロメ第二皇女様は家出の最中なんだってなあ？　なあらばたまたま皇女様を見つけ、親切にお城まで送って差し上げたあならば、俺はどうなる？　想像しただけで胸踊うる！」

「残念、私は投獄、アンタ達は秘密保持のため抹殺よ。少なくともアンタらの期待しているものは得られない」

どこの訛りかは知らないが、苛つく喋り方だった。“あ”の存在をはっきり判別出来るから、挑発されている風を感じる。

ちょっと黙らせてやろう、そう思ったのも必然だった。サロメは一步を踏み出すと、瞬時に巨漢の間合いに飛び込んだのだ。

周りを囲む連中には、サロメが消えた様にしか捉えられないであろう速度だ。そこから拳を振り抜けば終わりだと思った。

だが、それは甘い夢にも似ていた。手を突き出す、正にその瞬間に視界にかぶる暗黒。奴の巨大な手の平だった。

「えっ……！？」

衝撃。モンスターの突進よりなお重い衝撃が、サロメの身体を駆け抜けた。彼女は生まれて初めての感覚を味わう。

勢いに自由を殺され、されるがまま彼女は粗末な造りの内壁を砕き、その場に崩れる。一気にホコリが舞い上がった。

「グふふふ、油断したなあ、甘く見てたな俺を。普通に見えたぜ、お前の動きはなあ」

巨漢の男は言った。

第四十一姫 無敵P VS 報復 3

咄嗟に両の腕をクロスし敵の一撃をブロックしたつもりだったが、片足が浮いた状態で踏ん張りの効くはずもなく、軽い身体はあっさり吹き飛び内壁を破壊した。

腕を伝い、身体中へと広がる痛み。力を得てから……いや、もしかしたら生まれて初めて味わうものかもしれない。

「グふふふ、見えてるぞお、お前の動きはなあ！」

巨漢の野太い声がじんわり響く。確かにサロメは迎撃されたのだろう。だがしかし、あれが彼女の全力という訳ではない、早合点もいいところ。

ホコリが舞い上がり煙を作るその内に彼女は身体を無理矢理起こし、板きれを投げつける。建物の破片は大砲の弾にも匹敵する威力を得て、巨漢へ飛来。

見えている。それは偽りでない証明に、敵は左手一本でもって弾をバシッとキャッチした。が、既に塞がった左方にサロメが居た。

「あああああ!!！」

一撃。受け止めたが故に生じた隙。サロメの拳は巨漢を穿ち、今度は彼を吹き飛ばす。

重量にして軽く百を超えるであろう男は部下を一人巻き込んで床を

転がった。まるでボウリングの様だ。

だが、巨漢は器用に姿勢を回復、即座に立ち上がってみせた。倒れたら起き上がれないとか、そんな訳ではないらしい。

「グ、ふふ……効いた、効いたなあグふふはははは！ いいなあ、ようやく加減のいらぬ奴に巡り合えたあ！」

彼は心底嬉しそうに吠えてみせ、一度息を深く吸い込む。それで僅かに気流の変化が生じた。巨漢目がけて空気が吸い寄せられていく。

「ふううんっ！！」

全身の筋肉という筋肉に圧力を掛けたのだろう、彼をパッケージしていた鎧が砕け弾けた。一回りも二回りも大きく見える。

内側から現れた薄緑色の皮膚、皮……それを見てサロメは確信した。

「そうか……アンタ、魔族と人間のハーフね！？」

「そうさあ、ご指摘の通り半分は魔族の血が流れている。だから強い、だが……お前は何故強い？ まさかお前も……」

「残念だけど違いわ。強いて言うなら、お話しの主人公みたいな目にあっただって事だけよ」

「さつぱり分からあん！　だが細かい事はいい、さあ続きだあ、邪魔なものは外したあ、久々の本気だあ！」

巨漢は一発床を蹴る。体型とは裏腹に凄まじい速度でサロメに肉薄した。

振り下ろされた拳はまるで鉄塊のようだ。床面を破砕し粉々とする。あんなものを受けては一撃KOだろう。サロメはすんでのころで回避していた。

「ぬうううん！！」

すぐさま次の一撃が来る。コイツにとつての鎧は身を守るためではなく拘束具として機能していたようだ。速度、キレ、全てがダンチだった。

だが、サロメとて負けてはいない。大気ねじ曲げ迫り来る丸太が如き腕を掴みあげると、自身を支点に巨漢をぐるぐる振り回した。

手を離す。遠心力の作用で、巨漢はまたも吹き飛び背中から落下した。が、がばつとバネ仕掛けにでもなっているかの様に身体を跳ね起こし、次の瞬間にはこちらへと突進して来ていた。

どっ！　と正面からサロメは巨漢を受け止める。二人の足元は次第にズタズタとなっていた。

「グふははははは！　強い、なんとも強いっ、皇女にしておくには惜しい女だなああ！」

「アಂತアこそやるじゃない！　顔と体型と性格さえどうにかすれ

ば惚れちゃうかも！」

「それはああ、全部じゃねえかあ!!！」

巨漢の力が更に強まる。質量と力、力の不足分は質量と移動エネルギーで補っている。いかにサロメが人外といえども、じりじり押されつつある。

直後、サロメの足元が粉々になった。支えを失うほんの一瞬、巨漢が押し切る。サロメを張りつけたまま彼は走り続け、内壁と挟み撃ちにした。

当然内壁は跡形もなく崩れ落ち、巨漢はそこで止まったもののサロメは放り出された。街の道をゴロゴロと転がり、彼女は倒れた。動かなくなったのだ。

「グはあ、グはあはあ……もう、終わりか？ サロメさまよお！」

「冗談っ！」

「!!!？」

サロメはそこに居た。道の上にもう、彼女は倒れていなかったのだ。真横から、一撃が迫る。

カースは、遠目に激しさを増す戦闘を眺めていた。凄まじい一撃の応酬は、当然ながら初見だった。

見ている側にまで戦慄を与える闘い……武器を持っていないにも関わらずだ。やはり、あのサロメという女は名のある騎士だったのだとカースは確信した。

そもそも、人間なのかという疑問も覚えたが。

と、巨漢が突進しサロメが遂に押され始めた。これはまずい、と顔を突き出したその時だった。

「よお、クソガキ」

「えっ？」

背後で声が響く。と、同時、カースは意識を失った。最後に、鎧を見た気がした……。

ズドッ!!

感触で分かった。まともに入ったのだ。巨漢は予想だにせぬ一撃をガード出来なかった。

よろよろと、バランスを崩しながらも、彼は未だ立っていた。

大したものだとサロメは思った。一撃必殺のつもりで放った拳は確かに、何かを破壊する感触を伝えた。だというのに、奴は倒れない。

それどころか、ゆっくりとこちらを向き、尚も攻撃体勢を取ろうとしているのだ。

(もう一撃……もう一撃入れれば、もう立てないはず……)

そう思い、サロメは重心を落とし身体を引き絞る。必殺の一撃をもう一度放つ為に。

決着の時間が迫りつつあるのを悟ってか、空気は乾き妙な緊張感が辺りを支配した。あと数秒も遅ければサロメは放たれていた事だろう。

突如、大気は湿り気を帯び沈んでゆく。男は決闘場より五メートル程離れた場所から叫んだ。

「動くな皇女っ！ これを見る！」

動作を止めたサロメが目にしたもの、それは……

「動くとかイツの命は無いぞ！」

男の腕の中で、ぐったり倒れるカースの姿であった。

]

第四十二姫 サロメ VS ダンガル・アフプリト 1

「動くところのガキの命は無いぞ！」

男はそう言った。手の中にはカースがぐったりとしている。つまりは人質のつもりなのだ。

「……………」

サロメは男の言葉に従った。

「グふ、グふふふふ……そうかそうかあ、その手があつたかあ、グふふふふふふ……」

巨漢はのっそりと巨像の様に立ち上がる。まわりつく粘着質な声が溢れた。

ずしつ、ずしつと彼は男の方へと歩み寄る。

「グふふふふ、そんな手がなあ……………」

巨漢が、男の肩をぽんぽんと叩いた。男はそれに応え、笑みを浮かべた。

「……………つまんねえことしてんじゃねえよお！！」

その瞬間、何が起こったのか当人以外、誰にも分からなかったろう。遅れて気付いたのは男が吹き飛び床を転がって、巨漢の腕へと

カースが移動していた事実だ。

その際の衝撃のお陰か、カースが目を開ける。途端に短い悲鳴をあげた。

「ガキ……早く帰るんだなあ、これ以上ここに居るんじゃない、目障りだあ！」

言われずとも、カースはすぐさま腕を抜け出し、走る走る。だが、カースは帰らなかつた。振り返り、二人……巨漢とサロメをみたのだ。

二人ともボロボロだった。サロメはあらゆる場所を切ったり擦り剥いたりしている。ポタポタと赤が落ちている。

だが巨漢の側も深手を負っている風だった。左足を踏み出した際によるけている。至るところにアザが浮かび上がっていた。

カースは、じっと二人を見た。それが自分の役目でもあるかのように。

「ふむ……なかなか盛り上がっているな」

「！？」

カースは、背後からの声に寿命が縮んだ心地がした。恐る恐る振り返ると、巨漢ほどではないが、これまた長身で黒ずくめの男が立っていた。

「戦いとはやはりこうでなければな……いいぞもつとやれ、傷は

男の勲章なりっ……って、あいつは女だったか」

「あの、あなたは……？」

「気にするな、ただの見物客な魔法使いだ。いよいよとなれば出ていくつもりだったがな」

自称魔法使いはそう言うと、静かに二人を見た。見物客、成る程……演劇のクライマックスを凝視している様にも見えた。

(見物……見る、視る……)

カースも、二人に釘付けになった。彼も観客になったのだ。

「さあ、続きだサロメさまよ！ とはいってもなんだ、次が最後だなあ……悔しいが、もう立ってんのもやっただなあ……」

ぜいぜいと肩を激しく上下させて呼吸する巨漢の男。言葉に偽りはないのだろう。だが、わざわざ限界近い事を宣言し、次撃が最後と言いつつ切った。

最大の一撃が来る。確実な一撃が来る。後がないのだ、次に全てを乗せて来る！

「……前言撤回よ、アンタ、顔と体型さえどうにかすれば惚れちゃってたかも」

「そうか……なら、ダイエットでもするかなあ？　グふっ、グふふふ……」

「名前、覚えておいたげるわ……アンタ、何ていうの？」

「お、俺は……ダンガル……ダンガル・アフリト……そんな名前だなあ」

「そう。ダンガル、私も次で打ち止めよ。正面、からいくわ……」

「ありがたいなあ……つくづく、女にしとくのがもったいない女だあ」

「ふふ、そう、かもね……」

「グふふふふふ、ふふふふははははは！」

「ふふふふふふふ、ははははは！」

（どうして……どうしてそんなに、楽しそうに笑えるんだ！？　もしかしたら、どちらかが死ぬかもしれないのに……）

カースはそう思った。二人して、幸せの最中に身を置いているかの様だ。爽やかでいて、如何な結果でも悔いを残さないような、そんな笑顔だった。

「好敵手、ライバルという奴なのだろうな。死力を尽くし、己を燃やし、全力を注いで……もう、十分に満足だろうな、あいつらは」
魔法使いが言った。まるで恋い焦がれているかの如く。

「恐らくはあのハーフ、もどかしい思いを抱え生きて来たのだろうな。ヒトの枠の中で波風たてず生きてゆくのはとても、困難なのだ。あれだけの力を持ちながらどうしようもなかったのだろう」

(……このひと、もしかしたら、同じ?)

「ヒトも魔族にも、全力で全力を受け止めてくれる存在は必要だ。相手が次にどう動くか、何を考えているのか、どうしたいのか……互いの事を知りたい、もっと知りたい……その考えは、関係は限りなく友に近い、すなわちあいつらはもう、強敵なのだ」

「強敵……」

そのカースの言葉を最後に、状況は動いた。

二人は全くの同時に床を蹴り、飛び出した。スピードは互角といってもいい。恐らく最後の攻防をまともに見れるのは、この場でただ一人だろう。

第四十三姫 サロメ VS ダンガル・アフプリト 2

あの光景は生涯、ボクの脳裏に焼き付いて離れる事はないだろう。

最後まで立っていたのは皇女の方だった。彼女はフィールドの中央に拳を突き出したまま、蠟人形のように動かずにいた。

巨漢の男……ダンガルとかいう男はさっきまで、視界に現れた直後には立っていたが、すぐにぐらりと倒れた。

あまりに、静かに倒れたのだ。眠りにつくかの様に……。

「あっ……かつ、勝ったの……?」

「そうだな、あいつは勝った」

傍らの黒ずくめが答えた。

「そうか、勝ったんだ！ あの人か！」

「ああ……」

ダンガルは言った。

「グふ……ふふ……お前は、皇女に……向いてねえなあ……」

サロメは言った。

「自覚は……あるわ」

「だ、だがなあ……お前が皇女の国、た、楽しそうだ……なあ……」

「そう……」

「ああ……」

きつと、楽しい。

ダンガルは喋らなくなった。本当に眠ってしまったのかもしいない。サロメは勝った。

「まっ、まさかダンガルが負けるなんて……」

周りに居る兵士らの言葉だった。彼らは一旦様子を見ていたらしいが、サロメが再び身体を動かしたのを見て逃げ去っていった。

「ねえ、アンタ……前言撤回の撤回よ、体型さえ、どうにかすれば……惚れちゃってたかも……ね」

サロメもまた、倒れた。

闘いは終わった。

「がっ……ふう、ふっ……こ、ここはあ？」

「ん……目を覚ましたんだね、ボクの家だよ。傷の手当てをしてる……サロメ様の要望で」

カースはタオルを絞りつつ言った。彼の傍らにはもう一つ寢床が用意してあったが、既にもぬけの殻だった。

「……居たのか？」

「ついさつきまでは、ね。あなたよりちょっと前に目を覚まして、挨拶をして、すぐにどこかへと行っちゃったよ。まるで、嵐みたいな人だった……」

「そうか……残念、だあ。もう少し、もう少し早く目覚めてたらなあ……」

「サロメ様にトドメでもさしましたか？」

「……いいやあ……ダイエット、宣言、してやる……」

「痛たた……ちょっと焦り過ぎたかな？」

サロメは次の街を目指して歩いていった。

第四十四姫 無敵P VS アンジェリ

ネフィリム城

「がふうっ、がっ……………ふう、最近どうしたというのだ？」

ニルベールリング王は言った。最近になって身体を、慢性的なだるさが襲っていたのだ。

（風邪でも長引かせてしまったか…………？ 体調管理には万全を期していたが）

時々、意識が飛びそうになる程眠くもあつた。冬眠前のモンスター
Iの様いだ。

これまで一度たりとも執務を休んだ事のないニルベールリング王が、初めて休養を取ろうかと考えている。さすがに二日三日とこんな状態が続けば、弱気となるのも仕方がないだろう。

（アイツだ…………サロメが出ていってから全てがおかしくなったのだ！ 少なからず国民も騒めきたっておる…………アイツが何だというのだ！）

王は、決して口に出せぬ言葉を自分にだけ呟いた。彼女の家出を皮切りに筆頭騎士が裏切りから投獄され、アンジェリは人が変わった様に言葉数が少なくなつた。

妻はやはり三日程前から体調を崩し床に伏せている。そして今、自分も……。サロメが王家に災いをなしているかの様だ。

（まさか本当に、アイツの娘のサロメが我らに災いを……。いいや、違う！ 惑うな、ワシはニルベールリング国王だ、惑うな。ただの風邪だ！）

「お父様、体調はいかがですか？」

突然、アンジェリが現れた。

第四十五姫 無敵P VS 第七騎士団長ライズ

「お父様……お調子はいかがですか？」

第一皇女アンジェリは、王の間に踏み込むなりそう言った。

「むっ？ 何用だアンジェリ……」

王の間は誰もが気安く入室出来るものであつてはならぬ、いつ何時たりとも敵かでなくてはならぬ。ニルベールリング王は肉親にもそれを求めている。

「お父様、単刀直入に申し上げます。かなりお悪いのでしょうか？」

「……何故、その様な事を聞く？」

「先日より顔色が優れませんし、咳ばかりされていますわ。差し出がましいようですが、医者呼びました」

「何を勝手な！ ワシは何ともないわ、いらぬ世話だ追い返せ！」

「お父様……」

アンジェリは声を荒げた。その初めてみるかもしれない剣幕に、王はつい、口を閉じてしまった。

「ならばこそ、何事も無い事を証明して下さいませ……何もなければそれでよし、何かあれば早期に治療すべきです」

アンジェリは声色を沈めて言った。物語りを朗読する様な口調だった。

「ただの風邪だとしても、お父様は一国の王なのですから、倒れた方がより深刻です。どうか診察だけでも」

今度は彼女、泣き出しそうな風であった。俯き声を絞る。

「……分かった、アンジェリ。お前の思い、確かに。診察だけでも受けよう」

「本当ですか、お父様？」

「ああ、約束しよう。なあに、ただの風邪だとは思っただがな」

「ではお父様、医者は明日にでも着きましよう、それまでしばしの辛抱を」

アンジェリは頭を下げると、王の間をあとにした。扉を閉めると、傍らに控えていた者が口を開く。

「さすがはアンジェリ様、どこからどう見ましても親を心配する可憐な娘でありました」

第七騎士団長、そして現統括騎士のラーズであった。

「わたくしは心配はしているのですよ？ お父様が血迷わないか、とか」

「それは私めにお任せ下さいませ。うまく立ち回りましょう」

「そうねえ、あなたなら百の味方より心強いわ。では、明日の医者到着が楽しみですね、首尾はよくて？」

「はっ……既に大金を積んでおります故」

「で、用済みになった者達はどうするの？」

「人知れず地の底へ」

「ホホホホ……本当に悪い方なこと……」

ネフィリム城の通路に、邪悪な笑いがこだました。

サロメは つぎのまちを みつけた

(ふーん あんがいちかくに つぎのまちが あったのね)

みなとまち ガンド

かんぱんには
そうかいてあった

第四十六姫 無敵P VS 占い師

サロメは みなとまち ガンドに あしをふみいれた

わりと にぎやかそうな ところだった

(みなとまちって いうくらいだから ふねにのって ちがづく
にへいくのも いいわね)

サロメは こくがいへのたびを かんがえていた

(ふなつきばは どこかしら……)

サロメは ふなつきばを さがした

「おやおや女騎士様、何をお探しで？」

「!?!?!」

なぞのろづばが あらわれた

「そんなに驚かなくてもいいよ、わしゃあここで占いをやってる
婆やさ。どうだい、今後の為にもひとつ、占ってあげようか？」

「……………! ……………!」

サロメは おねがいしてみた

ろつばは サロメのてをとり うらないをはじめた

「ほう……お嬢ちゃん、珍しい型をしているねえ。ヒトの未来は大まかに定められている、ヒトはその通りに進む……だが、運命を脱却する為にもがくのもヒト、脱却出来るのもヒト、だけどねえ……」

「……?」

「お嬢ちゃんには、未来がないのさ。運命をキレイに避けてふわふわ浮いている……酷く不安定じゃよ。まるで神様の日記から外れてるみたいさね」

「!?!?」

サロメは ショックをかくしきれない

「だが、それは決して悪い事じゃあないんだ。漠然とした言い方しかできんが……お前さんは無限なのじゃよ。何にでもなれて、何でも出来る、素晴らしい事じゃよ」

「……!?!?」

「ああ、そうさ。……ふふ、真っ直ぐに進めるといいねえ、道は一度引いたら目的地が出来るものさ」

「……!?!?」

サロメは ろうばにれいをいうと ふなつきばさがしを さいか
いした

(ひとつだけ、確定していたねえ。近々、肉親によくない事が起
こりそうだと……頑張りなよお嬢ちゃん)

第四十七姫 無敵P VS ミナアラ行きの船

サロメは船着き場を発見した。

(えっと……こっちのがダリナタル行きで、あっちのがミナアラ、これがバルバロスか。どうしようかな)

サロメは悩んでいる。ダリナタルはニルベールリングと関係の深い、そこそこの大国である事は知っている。他の二つはよく知らないのが本音だった。

(どうせなら知らないところへ行くのがいいわよね。よし、ミナアラ行こう)

サロメは即決即断した。

船が出港し、しばらく進んだその時だった。

(ん？ 何だか黒い船が近づいてきてる……なんだろう)

ドオンー

「!？」

ビリビリと衝撃が伝わってきた。

「つわああああ、海賊だあー!!」

誰かの叫び声が聞こえた。

第四十八姫 無敵P VS 海賊

「海賊だぁー！ 海賊が出たぞぉー！！」

多分、船員の誰かが叫んだのだろう。確かに右舷に一席の船が見えた。

外装は黒く薄汚れてはいるものの、マストにはつきりと描かれたドクロのマーク……海賊に間違いはないだろう。

ドォン！

また、爆音が鳴り響く。大砲をぶつ放したらしい。砲弾は自船のごく近く、海面へと突き刺さり水柱をたてる。

サロメは全身びしょ濡れになった。海水を頭から派手に被ったのだ。

“ あー、あー、聞こえるか、その船！ 我々は見えての通り海賊だ、このままおとなしく停船するなら命までは取らんが、尚逃げるようならうつかりエンジンに被弾するかもしれないぞぉー！”

その脅しにあっさりと屈する船。ついに停船してしまったのだ。

サロメはこの時点で相当にイラついていた。

やがて海賊旗を掲げた船は後ろに回り込み、じつくりと前進、自

船に横付けして来た。向かい側の船の甲板には大小様々な連中が居たが、いずれも獲物にありついた獣の目をしていただけだ。

彼らは何かをあちらで振り回し始めていた。サロメにはそれが見えている、先端にカギ爪を取り付けたロープか何かだろう。

このまま奴らの上陸を許しては、犠牲者がでるかもしれない。サロメは既に助走をつけていた。

「……………!!」

船の端から端までを彼女は走り抜けるや否や、未だ十メートルはあろうかという二つの間隔を、飛び越した。

どんつ、と海賊船に着地した時、構成員らはどんな顔をしているだろう？ ひよいと顔を上げてみる。驚愕、それだけだ。誇らしい気分になった。

バキッ！

「ぐうああああああああ!?!」

手近の一人を一撃のもと黙らせて、サロメは次の相手に狙いを定めた。

ガッ、パキッ、ガスッ、ゲシッ！

二人、三人と流れる様に、そして確実に倒してゆく。そこで、乾いた破裂音が響く。

拳銃だ、とサロメは直感した。髪の毛の一本をかすり、弾丸が飛び去ってゆく。

もう一度引き金を引いた頃には、そこに居なかった。直後に手に痛み。拳銃は弾き落とされていた。

一人、また一人と倒れゆく中、ついに船室からそいつは現れた。サロメは一瞬、そちらを見て目を奪われた。

カッコいい男が現れた。

「おいつ、道を開ける……」

男は静かにそう言った。喧騒怒号に打ち消されるかと思っていたが、構成員らは一斉に静まり男の為に道を開けた。

カッコいい男は、両手の部分がフックだった。サロメが本で読んだ海賊は片手がフックだったが……。

「ようこそ、俺の船へと言ってやりたい所だが……お前さん、名前は？」

「サロメですう……」

既に惚れていた。

「俺はダブルフックアーム……ダブと呼ばれている。サロメ、二人きりで話したい、いいか？」

「はい……」

二人は船室へと消えていった。サロメはまた、ついていってしま
ったのだ。

第四十九姫 無敵P VS ダブルフックアーム船長 1

「まあ座れよ。ちょっと俺と話をしよう」

ダブはそう言つとサロメを座らせた。どうやらここは彼の個室らしい。

「しかしあんた強いな。ウチの部下がばったばったと薙ぎ倒されて行くのを見てたが……何者だ？」

「それはちよつと……」

サロメが答えを躊躇した途端、ダブはじろじろ無遠慮にこちらを見て来た。ケチなおばさんが品定めする様な目付きでだ。

「ふうむ、当ててやろうか？ あんたは多分、ニルベールリングの、それもネフィリムの騎士か何かだな。その強さは破格だが、戦い方が勢い任せの無茶苦茶だからな……しっかりと型を教育されていない」

(ー!?!? すごい……ほぼ当たってる)

「つまりは、新人が習いたてか……そして、あんたの歩き方は騎士のそれとも市民のそれとも違う。あんな見栄え重視の歩き方をするのはお偉いさんだな」

サロメは素直に驚いた。本当によく観察していたらしい。

「つまり、お前は貴族か何かで騎士になろうとしたが、理想と現実の差でも思い知って逃げ出した……そんなところか？」

さすがに、一国の第二皇女という結論に辿り着かなかったらしいが、それでもおおむね正解だった。

「すごい……分かつちゃうんだ」

「おうよ。ただ、その化け物じみた力は訳が分からんが……見たところハーフという訳でもなさそうだが」

サロメは事情を話さなかった。

「まあいいそれよりだ、ここからが本題なんだが……お前の力が欲しい、単刀直入に言って仲間になってほしい。どうだ？」

(や、海賊はちょっとね……)

サロメはきつぱりと拒否した。

「そうか……残念だな。なら、少しの間だが海賊船を楽しんで行きな。お前さんに乗っけてた船は逃がしちまったし」

「……!?!」

そう、サロメは置いてきぼりをくらっていた。わなわなと拳を握り悔しさに震えている。

「おおっ、ごっくろっ。おいサロメ、あんたも飲むかい？」

サロメが振り返ると、コップが二つテーブルに置いてあった。ダ

ブは恐らく酒のビンのキャップを腕のフックでひっこ抜くと、サロメに言った。

「すまんがついでくれないか？ 俺がやると時間がかかってしまう」

サロメは頷くと、とくとくコップについてあげた。

「何やってんだ？ お前さんも飲めよ。初めてって訳じゃないだろっ」

「！？」

(えっ！？ これお酒だよね……私、飲んだ事ないんだけど)

「どうした、飲まないのか？ 勿体ないなあ、せっかく客人に対して出した上物なのによ」

「……………！」

サロメは意を決して酒を自らのコップに注いだ。せっかくの好意なのだ、無駄には出来ぬ。

目を瞑り一度深呼吸をしてから、見開いて一気に飲んだ。

「！？ ？？」

グラッ ……パタッ

サロメは倒れた。

「言つたらう、客人用の上物だつてな」

ダブは倒れたサロメを部下らに運ばせた。

・

カモメの鳴き声がやけに近くに聞こえた。

身体が重い。むしろ動かない。

ぐらぐら揺れる。

風が、強い。

ふと……地に足がついていない感触を味わう。

「!!!?」

目を開けたサロメの真横には、薄茶色いマストがたなびいていたのだ。

第五十姫 無敵P VS ダブルフックアーム船長 2

「ちよつとー、何なのよこれはあー!!」

サロメは地上ならぬ船の甲板より十メートル上空から叫んだ。

彼女は今、ロープでグルグル巻きにされ帆から吊るされていた。まるで糞虫のようだった。

「サロメとかいう小娘、喜ぶがいいこのままお前は干物になるんだよ!!」

「何で!? 部下に怪我をさせたから!？」

「それもあるがな、お前さんは自覚していないのさ、自分の力を! お前さんは化物さ、あんたと比べたらモンスターの群れもカワイイもんだ」

「!!!!」

「お前さんは、俺は強いぞ、というものがねえんだよ。分かるか? 邪悪な魔王が人の皮をかぶって普通に商売してるみたいなさ。人畜無害そつな奴ほど本当は真つ黒だ」

「つまり、なにが言いたいのよ!!」

「つまりだ、俺はそんなお前さんを怖いと思っちまったのさ。…残念だが、おとなしく日干しになってくれ」

声は途切れた。

(……なんで？ どうして私、こんな目にあってるの？ 私がないを……)

……二日後。

サロメはあのまま動かされる事もなく、心身共にボロボロであった。

(私……は……)

最早声を出す余力すらも残っていない。

身体は少々頑丈になっているかもしれないが、それでも死ぬものは死ぬらしい。

喉は焼ける様に熱く、目はぼうつとしてきた。

何度自分はどうしてを口にしたらだろう？

カモメが舞う。

やがて黒い布切れが風にあおられ飛んでゆく。

自由、自由に焦がれる。

そういえば、そらをとびたいなって……

「どうした、きつそうだな」

「!?!?」

聞き覚えのある声が、サロメを包んだ。

第五十一姫 無敵P VS 彼のヒト

「きつそうだな、おまえは」

朦朧とする意識の中、サロメは確かに声を聞いた。これは、あの人の声だ。魔法使い様の。

「全く、度々ピンチになるのは何故だ？」

声は聞こえるが、姿は見えない。目を開き、首を動かだけひねって彼を見つけようとした。だが、瞳に映る事はない。

「あつ……た、助け……て……」

「ん？ 何か言ったか？」

「助け、て……下さ、い……」

「悪いが、断わる」

その返答の残酷さといったらどうだろう。彼女は間違いなく、彼が助けに来てくれたと信じていた。

しかし彼、魔法使いアトモスはその気はないと言った。最後の希望でさえ、アトモスはへし折ったのだ。

「なん……で……」

「何故と聞くか、呆れたものだ。では、今のこの状況、作り上げてしまったのはどこの誰だ？」

「……？」

「それはお前自身だ。いいか、お前はいつもそうだろう。いい男と見るや否や疑う事を忘れる。そして窮地に陥るのだ」

サロメとしてはたまったものではないだろう。ただでさえ意識が寸断されそうなのに、そこへ正論をねじ込まれている。

「とんだ色情家だな、お前は。なんとも愚かしい……確かにお前の旅の目的は男探しだったろうがな、その度その度でこうなられてはいい加減、愛想が尽きるといふものだ。だから、今回はかりは助けん」

「ちが……う……」

「何が違う？」

アトモスは容赦なかった。死人に鞭打つとはよく言うが、現状が正にそれだろう。

「この窮地を作ったのは紛れもなくお前、死地へと飛び込んでゆくのもお前、何が違うと言う？」

「……恋って、私の原動力……」

サロメは吹っ飛んで行きそうな意識を無理矢理にでも己に留め、力一杯叫んだ。それでも、船の甲板までは届いていなかった様だが。

「人を好きになるって……本当に素敵な事なの……私には、見る目がないのかもしれないけど……それでも、それが私を動かしてるの……」

(ほう。まだそれだけ喋られるのか)

「乙女ってさ、みんなドキドキする……恋って生き甲斐を求めているの……だから、私は……」
だから私は……。

「……」

「おや、気を失ってしまったか……一番知りたかった所を言わずになぁ……何とも都合のいい気絶だ。だが、こうなった以上やむを得ん」

アトモスは炎の魔術を唱えた。ロープを焼き切る。戒めより解放されたサロメは重力に身を任せる。アトモスはすぐに彼女をキャッチすると、そのまま飛び去った。

「ふん……魚の礼という事においてやる。が、もう知らんからな」

アトモスは陸地を目指し飛行した。

(……やっぱり、助けてくれた……魔法使い様。神様、ズルいサ

ロメをお許し下さい。だけど、もっ少しのまま……)

第五十二姫 無敵P VS 新大陸

「魔法使い様、この際だからはっきり言います!」

「ん? なんだいサロメ、言ってごらん」

「私、魔法使い様のお嫁さんになりたいんです!」

「ほう、それで?」

「えっ、そ、それでっ……だから、その、お返事を……」

「用がないなら私は行くぞ、さらばだ!」

「ああっ、待ってー!! ……消えちゃった……チクシヨオオオ
オオオオオー!!」

「んー……むにゃむにゃ……チクシヨおー……」

サロメは寝言を言っている。

「全く、どんな夢を見ているのだ。まあいい、手近な大陸に着いた事だ、私の出番もこれまで……さらばだ!」

アトモスはワープの呪文を唱えた。彼が消えたのとサロメが目を覚ましたのは、ほぼ同時だった。

「はあっ!?!? ……あれ、夢? ……いや」

サロメの周りには、木の実やら果物が葉に乗せて置いてあった。

ここはどうやらどこかの大陸の砂浜らしい。波がサロメの足元に打ち寄せていた。

彼女は早速、供物みたいに置いてある食物に手を伸ばし、あつという間にたいらげた。

(うん……おいひい、やっぱり魔法使い様だ、さっきまで居たんだ)

少し休み体調を回復したサロメは、ゆっくりと立ち上がる。

(ところでここはどこかしら……少なくともニルベールリングじゃなさそうだけど)

サロメは取り敢えず内陸の側へと歩いて行った。

ようこそ バルバロスへ

彼女が、最初にみた立て札だった。

「!?!?!?」

「ニルベールリング王様、診断の結果なのですが……無礼を承知で申し上げます」

「なんだ！ はっ、早く申してみよ！」

「……不治の病にございます。保つてあと……三ヶ月」

「なっ……!?!」

ニルベールリング王の顔は蒼白となっていた。

第五十三姫 無敵P VS モンスター スコーピオ

バルバロス……名も知らない土地。サロメはそこを現地ガイドもなしに歩き続けていた。

見渡す限りの平地だった。地平線の彼方まで、ずうつとなんの突起も見えないし、地面も砂浜と変わらぬ有様だ。

こう変化の皆無な土地は、見ているだけで疲れてくる。サロメはせつかく回復したばかりの身体を再び酷使する羽目となった。

(ううっ……歩きにくいったらないわ)

しかしこれでも死の陽光が照りつけていない分、マシだった。何せここは超乾燥地域である、今日はたまたま年に何度かのくもりだったのだ。

(……ホント、魔法使い様もどうしてこんな場所に置いていったのかしら?)

ずっ ずっ

「ん？」

ズボッ!

「!!!?」

砂の中から、スコープオが奇襲を仕掛けてきた！

スコープオは猛毒の尾針を使用した。

ヒュッ……。

尾針は空間を通り、砂を刺した。サロメはもう剣を抜き、軸足を定めていたのだ。

ズドッ！

「キュイエエエエエエエエエエエエエエエエ！？」

スコープオに勝利した。

（全く、油断も隙もない……）

サロメは歩き出し……

ズボッ　ズボズボッ

「……！？」

スコープオの群れが現れた。

「ちよつと……なんでよオオオオ！！」

「……………ワシは」

ニルベールリング王は、薄暗い自室に一人、こもっていた。

診断を受け、既に二日。あれ程血色よかった顔も、もう石膏像の様に白かった。

「……………ワシは」

王は同じ言葉を呟いた。何かを独り言の様に言おうとして、その度断念。これを繰り返す。

視線は虚空をさ迷って、壁と扉と天井をなぞるばかり。厳格なる王の姿はどこにもいない。

「……………これ誰か、誰かおらぬか？」

王は弱々しくも言った。その声は、分厚い扉を抜けられず、王の耳へと帰るだけだ。彼はうなだれて、自身の身体ばかりを見た。

「ワシは……………」

言葉を吐く。独り言。何度目かの。口にするたび、魂を削られて
いるようだ。

「……お父様」

「!？」

薄暗闇に、ニルベールリングの天使の音が響いた。

第五十四姫 無敵P VS 現地の人達？

「ハア、ハア……どうよっ、モンスター共オ！」

一体、何体のスコープオを薙ぎ倒したのかは知らないが、転がる死骸は砂地の道しるべとして使えそうな程だった。

積み上がるそれらの頂上に立ち、空を仰ぐサロメの姿は正に戦神、スコープオ・ザ・スコープオといった具合だ。

パチパチパチパチ……。

「!?!」

拍手と思われる物音が突如響いた。それも、一人じゃなく数名……少なくとも三人は居る。

「 @ ㄟ」

「 ÷×*】!」

どこからともなく、数人の人達が現れた。手を叩いているのは彼らだったようだ。しかし、現地の言語だろうか、何を言っているのかさっぱり分からない。

「 < ! < !」

一人の女性が、サロメの腕を引いた。顔に笑みを浮かべ方向を指差している事から、多分こちらに来て、という事だろう。

「ちよつ、ちよつと、そんなに引つ張らなくても行くから！」

サロメは現地の人達？ に連れられ移動した。

「アンジェリ……どうした？」

ニルベールリング王は、部屋に現れた第一皇女に言った。

「いえ、ただお父様のご体調はいかがかと……早く良くなってもらわなければ困りますので」

「……………」

アンジェリは常に微笑みを浮かべている女だった。しかし、今は違う。いつもが雲一つない晴天だったとするならば、今は雨が降りだしそうだった。

「……………アンジェリ、聞いたのか？ ワシの病状を……………」

アンジェリは首を横に振った。

「ならば、アンジェリ、大切な話があるのだ……よくお聞き」

ニルベールキング王は、王に立ち戻り言った。

「ワシはもう、長くないらしい、医者はその言った」

「そんなんっ！ お父さ……」

「だから、王位は誰かが早急に継承せねばならん……アンジェリよ、ワシが言っておる事、意味は分かるな？」

「……はい……」

「すまぬ……せめて、身体が動く内に戴冠式を執り行わなければならぬ……アンジェリ、すまぬな」

「お父様っ……」

「さあ、アンジェリ、皆のところへと戻るのだ。学ぶべき事は沢山ある筈……」

アンジェリは返事をする事なく、頭を下げながら部屋を出た。

(すまぬ……すまぬ、アンジェリ……このまま、途方もない重責をお前に残さねばならぬ……すまぬ、アンジェリ……)

(ホホッ……ホホホホホホホホホホホホホホホホホホ！ 信じている！ 信じているわお父様っ！ 後はこの頭に冠を載せるだ

けっ、ホホホホホ！！
)

第五十五姫 無敵P VS 集落の戦士 1

その集落は砂地の真っ只中に存在していた。こんな所にも人は住んでいるのだ。

「ソンチヨウ！ ツヨイヒト ツレテキタ！」

サロメの手を引く女性は、集落に入るや否や年寄りに言った。

「ムツ！？ ソイツハ ヨソモノ デハナイカ！」

「デモ スコーピオ ヲ タクサン シトメテタヨ！」

(……何かもめてるみたいだけど……言葉が分からないって不便過ぎるわ)

二人の論議はだんだんとヒートアップしている様で、身振り手振りも大きくなってきた。

そしてさらには、あちらこちらの家からも、ぞろぞろ人が出てきて、大集会と化した。

しかも品定めする様な視線で見られたり、指を差されてたり……嫌な予感しかしなかった。

「トニカク コノヒトハ ツヨイヨ！ タブン サイキヨウ！」

「ナラバ タメセバ ヨカロウ！ ゲエンバア、イデヨ！」

年寄り的一声に、そいつは現れた。奇怪な面で顔を隠し、槍を持った者である。

そいつはサロメの正面に立つと、槍を構えた。

「えっ……ちょっと、何のつもりよ！」

サロメがそう言った直後、面の者は槍を彼女目がけ突き出した。

第五十六姫 無敵P VS 集落の戦士 2

面の者は、突然槍をサロメ目がけ突き出した。勿論、棒切れの先端には鋭利に加工された刃が括り付けられている。

「ちよつと！ いきなり何よ！」

サロメは咄嗟に後方へ飛び退き、切っ先を回避した。面の者は一旦その場に足を止め、様子を伺っている風だった。

(……ハア、はっ……ヤル気満々な訳ね。言葉が通じない以上は何言ってもダメだし……やるしかないの?)

サロメは一瞬だけ、周りに視線を走らせた。いつの間にか集まったギャラリィらは緊張感を持って観戦しているのか、誰一人言葉を発していない。

しかし誰も現状を止めないという事は、面の者が旅人に襲いかかったという訳ではないらしい。意味ある戦いだ。

ならば……と、サロメは相手に視線を戻す。直後、敵は動いた。

穂先が加速し向かって来る。その軌道は顔面を狙ったものだ。

「女の子の顔を狙うなんて……」

切っ先をサロメは目で追った。顔の真横をそれは彼女の的にゆっくりと通過してゆく。

「サイテーね！」

サロメは目にも止まらぬ速度で、槍の柄を叩いた。先端は金属でも、そこは木だ。へし折るつもりで一撃を見舞う。

が、その衝撃に面の者の手を離れた。そのままブーメランの様に回転し飛んでいって、遙か後方の地面に刺さった。

「……どう、まだやる？ 言っとくけど私は普通じゃないの。分かる？ 私は強いわよ」

サロメは腕を曲げて力こぶを示して言った。分かり易いジェスチャーだ。

ギヤラリーがにわかに騒めきたつ。やがてそれは雪崩の様な歓声へと変わった。言葉が分かればちよつとは嬉しいかもしれないが……。

「……オドロイタ ツヨイナ オマエハ」

面の者はそう言つと、ゆっくりと顔をさらした。面の下には……

「……!?」

イケメンな戦士が現れた。

(かつ、カッコいいー!!)

サロメは心の中で歓声をあげた。

第五十七姫 無敵P VS 戦士ゲエンバア

「オオ アノヨソモノノ ムスメガカッタ アラタナ ツカイハ
アノムスメダ！」

一斉に歓声があがり、二人を包んだ。まるでご贔屓の選手が勝利した時のような、祝福ムードだった。

だが、地鳴りの様なこの騒ぎもサロメの耳には入って来ず、目の前の元面の男に全てを向けていたのだ。

「スバラシイチカラダ オマエナラバ ツカイノヤクメヲ マカ
セテモ ダイジョウブダロウ」

カッコイイ爽やかな青年は右手をスツと差し出した。サロメはその手を取り、握手の意味合いで応じた。

「オオ アノムスメ オウジタゾ！ ツカイヲ ヒキウケルンダ
！」

サロメの耳に青年の言葉は、「アナタガ スキデス」と聞こえた。

（ああ……歯あ白い、なんて素敵な笑顔なの）

「デハサツソク ワタシノオヤニ ホウコクセネバ イツシヨニ
キテクレ！」

そう言って青年はサロメの手を引く。

(ええ！？ お父さんとお母さんに報告って、早過ぎるわよお！)
言っている事は一応何故か伝わったが、意味合いは別だ。

「ワタシハ ゲエンバア トイウ ナマエダ」

「私はサロメです……ゲエンバアさんよろしくお願いします」

なんとも自然な会話だろう、これが心で理解し合うということなのか？

彼の家はすぐだった。干草かなにかの扉を押しつけ、彼は言った。

「ゲエンバア タダイマモドリマシタ！ キイテクダサイ ワタシハモウ ツカイヲ シナクテイイノデス！」

「ええ！？ お付き合いもまだなのに！！」

サロメはまた勘違いをしている。

第五十八姫 無敵P VS ゲエンバア一家

サロメはゲエンバアの一家と食事をしていて、ランプの灯りだけが照らす薄暗い食卓を囲むのは、まずゲエンバア本人。

そして彼の父親と母親と思しき人達。その横に多分弟と妹がそれぞれ二人ずつ。それに向かい合う形で上座っぽい位置に腰掛けているおばあさんは、恐らく祖母だろう。

八人一家に囲まれて食事をしているサロメは、相当に気を遣っていた。例えばテーブルが狭くなるからと一人離れて食事をとろうとした。

が、ゲエンバアと父親母親に手作りらしい椅子を指差され、座る様促された。テーブルのど真ん中にサロメは陣取った訳だ。

「コノタビハ ムスコノ ツカイノヤクメヲ ヒキツイテイタダキ アリガトウゴザイマス」

父親と思しき男性が、そう言ってサロメに頭を下げた。

（ええと……この度は息子とのお付き合いをありがとうとございませ、かな？）

サロメの勝手な解釈が始まった。彼女は取り敢えず微笑み頭を下げる。

「コレデ ムスコハケンナメニ アワナクテスミマス ナント
オレイヲ イッタライイカ」

(……これで息子は一人前です。何とお礼を言ったらいいか、だよね？ って、早い早い！ まだまだそれは過程を経て……)

「フン タイセツナ オヤクメヲ コンナ ドコノウマノホネト
モシレナイ ムスメニ トラレオツテ…… ワシハ ザンネンダヨ」

(……うーむ……家事や料理は出来るのかい？ この何処の馬の骨とも知れない小娘が！ とかだろうね、あの顔と口調からすると)

「コノヒト ナンダカ バードードウ ミタイ！」

(……子供達は……こんな素敵な家族が増えるなんてとても嬉しい！ だね、絶対！ 素敵って照れるわ……)

「コラッ メッタナコトヲ イウモノジャナイ バードードウハ
オハナシノナカニシカ イナインダヨ！」

父親は突如、声を張り上げて言った。どうやら子供達の言葉が原因らしいが、現状を結婚申し込み親対談式くらいにしか思っていないサロメには意味が分からなかった。

食事が終わり、皆が皆バラバラに動き始めた頃、サロメの元に祖

母らしい人が歩み寄って来た。

まるで、親の仇を見る様な目付きだ。鋭くサロメを睨み付けた。

「ナルホド ミレバミルホド バードードウニニトルワイ アナ
ガチ コドモラノ コトバモムシデキンノウ……」

(……本当にゲエンバアに相応しのかのう、この馬の骨が、とか
言ってるんでしょ……これが姑との確執ってヤツかしら)

と受け取ったサロメは胸を張り、自信に満ちた表情を作った。こ
ういう時こそ、弱々しい態度を見せてはいけない。姉主導の生活の
中で学んだ事だ。

言葉は通じなくとも、態度や心意気みたいなものは通じるだろう、
と考えた結果だ。

「……フン……ブキミナムスメヨ……」

祖母はそう言い残し、奥の方へと消えていった。サロメが所作な
さげに立ち尽くしていると、ゲエンバアがやってきた。

「スマナイ ソボハ トクニヨソモノニタイシテハ アアナンド
ユルシテホシイ」

多分、ゲエンバアは謝っているのだろう。私は首を横に振り気に
していないよとアピールした。

「デハ アシタハハヤイ ネルコトニシヨウ」

と、ゲンバアはおもむろに蓑の様なものを床にしいた。そして彼は寝転ぶと、編み乾草を身体にかける。どうやら、布団の様だ。

(……ってあれ？ お布団が二つ並んでるけど……まさかっ、一緒に寝ると!?)

サロメは生唾をごくりと飲み込んだ。

第五十九姫 無敵P VS 役目人 1

「……………」

翌朝。

「ムスメ オキロ キョウハ ツカイトシテ ヤクメヲ ハタサ
ナケレバナラナイ！」

サロメはゲンバアに叩き起こされた。

目を覚まし、僅かに考えるサロメ。

(……………ああ、特に何もなかったのね……………)

「サア コノ ワタシガツケテイタ “ダヴァラノカメン” ヲ
カブレ」

ゲンバアはそう言うと、面をサロメに差し出した。彼女は受け
取ると、言われた通りに身に付けた。

「ウム デハイクゾ！」

サロメとゲンバアがそこに辿り着いたのは、あれから三十分程
だった。

「あの……………これから一体何が？」

サロメがそう言ったのも無理はない。二人が集落を歩いていたら、家の前を通るたびに人々は大きな声で何かを言って、その後は後ろをつついてきた。

最終的に集落の外に出て、砂の上で止まった。何かを待っているかの様だ。振り返れば、百近い人間が長蛇の列を作っている。

「ムツ キタゾ！」

ゲエンバアが言って指差した。サロメはつられて指の向く方向を見た。

すると……面の者を先頭に、あちら側からも百人単位の人々がぞろぞろと歩いて来る。

「ツカイヨ ツルギヲヌクノダ イマコソ ヤクメヲ ハタスト
キ」

ゲエンバアが何かを言った。

「えっ？ 今何て……」

あちら側の面の者は、槍を構えた。

「！？」

第六十姫 無敵P VS 役目人 2

「ちよつと、どつなつてんよコレは!？」

サロメは思わずそう言った。それはそうだ、集落の外れまでお面をつけさせられ連れて来られ、炎天下にて見たこともないお面の相手が槍を構えてる。

おまけにギャラリーがゲエンバアと戦った時の約二倍。どうしてこうなつた？

「ワタシハノゾム セイギノケシン ダヴァラ ノシヨウリヲ！」

(えっ!？ ゲエンバア今なんて……)

彼の発言は、こちら側の人々に歓声をもたらした。

“ワタシハノゾム セイギノケシン メスカ ノシヨウリヲ!”

あちら側の面の者が叫ぶ様に言った。言い方からして、恐らくゲエンバアと似た事を言っているなとサロメは理解した。

「ムスメ! ナノリハ オワツタノダ ハヤク ケンヲヌケ！」

「えっ、え？」

相手は槍を突いた。サロメは咄嗟に二歩分後退し、切っ先をギリ

ギリでかわす。

間違いなく突き刺すつもりであった。敵はそこから更に踏み込み、切っ先は尚もサロメを追い掛ける。

体勢を大きく崩されたものの、今度は左方に回避。少々の使い手ならばこの時点で骸となっていたらうに。サロメの動きが規格外だからこそ避けられたのだ。

次の一手はもう来ていた。横薙ぎに槍が振るわれる。遠心力を生かし、更なる一撃を間髪入れず放つ。

どこに逃げようが、追い掛けて来た。剣を縦にブロック。槍が鎚の様に叩きつけられた。地は砂であり、踏ん張りが利かない。

脆い足場。足元の僅かな振れは、上に登り大きくなった。一瞬の間隙であったが、面の者は的確にそれをついた。

僅かに引き、再び槍が突き出る。剣の先端を正面から切っ先が打ち、衝撃でサロメの手をすり抜けた。

遂にサロメは武器を失った。槍はもう一度引き、また突きが来るだろう。針穴通す正確さとはこの事だ。サロメが圧倒的力で蹴散らすのとは真逆の、細く鋭い戦闘スタイルである。

ギャラリーから、悲鳴とも罵声ともつかぬ声があがる。ゲエンバアも同様だった。負けがこちら側を支配しつつある現状、サロメは刹那の敗北を既に彼方へ排除していた。

槍がサロメを貫い……。

「!？」

静寂。

皆、一様に槍の先端を眺めた。

哀れな使い、ダヴァラはメスカの槍によって天に召された。この戦いの結末の祝詞。

だが、それを読み上げる者はどこにもいない。

槍は、穂先は、サロメの僅か数十センチの手前で停止していた。

「……ふっ、くあっ……は、反撃、開始よっ！」

「ナニッ!？」

面の者は声をあげた。槍はサロメに捕まってしまっていたのだ。

第六十一姫 無敵P VS 役目人 3

サロメは荒れ狂う槍を遂に捕らえた。物影から飛び出す暗殺者として、往来に引き摺り出してしまえば容易いものと同じ。目に写る形で止まっていれば恐怖も恐れもない。

「だりやあああつ！」

気合一発、左手で槍の首先を掴んだまま、右手での打撃。槍は見事、ただの棒切れと化した。

「ナンドト！？ ポンニツクノ エダガ オレタ……？」

「何だか知らないけどっ、どちらかが死ぬ儀式？ なんて間違ってるわよ。やり合うなら素手、喧嘩なら素手って決まりがあるでしょうー！」

サロメはそう言い穂先を捨てた。もう勝利に沸き立つ観衆も、敗北を見据えたギャラリも存在しない。ただただ未知の世界を眺める者ばかりだ。

ボクシングのファイティングポーズもどきを決め、サロメはジリジリと間合いを詰めてゆく。面の者もやがて思い出した様に柄を捨てて、拳を握った。

「そう、そうよ、殴り合いで語れば少しは分かるわ！」

男前な発言をする第二皇女。ニルベールリング国民には聞かせられ

ない言葉だ。

「……ソウダ マダテガアル アシガアル ……セイギノケシン
メスカハ タミノタメ マケテハナランノダ！」

面の者は、勝ちに行った。それは楽しむだとか過程がよければなんて話じゃない、使命感にも似た何かに背中押されてだ。

だが、彼女は豪傑ダンガルと殴り合った規格外である。テクニクも何も存在しないぶつかり合いでサロメに分がない訳がない。

「破あああつ！」

結果は一瞬の後に。自らの得意分野へと持ち込んだダヴァラ、つまりはサロメが勝利した。

メスカの化身とやらは、くるくる回転しながら飛んでいき、砂の上に倒れた。お面が砕けて、化身でなく人に戻ったらしい。普通のおじさんだった。

「ウ……ウオオオオオオオオオオ！！！」

地が割れんばかりの歓声、歓喜の叫びが辺りを包む。本人もまた、“いよっしゃあああ！”と声を張る。

正にお祭り騒ぎとはこの事だろう。集落中の老若男女は一樣にはしゃぎ騒いだ。たかだか一つの見せ物が終わったただけなのにも関わらず、だ。

対しあちら側の人々は、集落の村長が亡くなったと錯覚させる様な沈痛な面持ちと、重力に負け砕けそうになる程肩を落として帰っていた。

たかだが、一つの勝敗が何故ここまで……？ サロメはその意味合いを僅かながらに考えた。

そもそも、何の為の戦いだったのか。それすら分からないのだ。

「ムスメ！ ヨクヤツタゾ コレデ ワレワレハ ケンリヲマモツタ」

ゲエンバアはこう言っている。集落の人達も喜んでいた。だから、取り敢えずはこれでいいと、そう思った。

第六十二姫 無敵P VS 女王アンジェリ

「よって、本日より第一皇女アンジェリは第十三代ニルベールン
グ国王とする！」

この瞬間、元国王となった男は冠を現国王となった者に差し出した。

現国王が王冠を恭しく頂戴し、頭に乘せた。その瞬間、地鳴りの様な歓喜の声が沸き上がった。国民らは皆声を揃え、名前を叫ぶ。

そう、“アンジェリ女王”と。

「お父様、ご覧下さい民の顔を……私はどうやら歓迎されている
ようですわ」

「ああ、見えとるよアンジェリ……いや、国王よ。だが、これか
らだアンジェリ、これからも民の顔を歪ませてはならぬ、民らは笑
っていないければならぬ」

「ええ、分かっております。ではお父様、私はこの後の就任パレ
ードへ出席して参ります」

「うむ、ワシも見てやりたいが……」

「ご無理をなさらないで下さいまし、お父様」

「ああ、ワシは部屋で休んでおるよ」

元の国王はまるで老人の様な足取りで部屋へと戻り行く。付き添いの者は誰一人として居なかった。これも権力構造の変化による弊害だろう。

その背中を見送るアンジェリはにやりと笑い、傍らに騎士長を呼び寄せた。ラーズである。

「おお、従順なる騎士長よ、お父様は、“最期に”私の晴れ姿を見たかったらしいわね。残念だわ、お部屋に戻った途端に意識を失い孤独のまま、旅立たれるなんて……」

「ええ、本当に残念です国王様。医者も突然の発作的症状、としか言わないでしょうからねえ……クク、ハハハハハハ」

「悪い人と何度言わせる気かしらねえ、あなたは！ ホホッ、ホホホホホホホホ！」

女王は民の元へと下りていった。

「ふふ……ワシもそろそろ迎えが来ようか？」

元国王、名はガルデル。彼はベッドの上で窓際ばかりを眺めていた。と、その時だ、分厚い扉をノックする音。小気味よく三度響い

た。

「どなたか？」

“国王……いえ、元国王様、医者のカントにございます。定期診断に参りました”

「おお、あなたか。どうぞお入りに」

医者はゆっくりと室内に入り込んだ。一礼をしようとし、ガルデルに止められた。ワシはもう王ではない、との事だ。

医師カントはガルデルの胸を指圧しつつ、慎重に診断を重ねた。本当に病魔が巢食っていたなら、どれほどつかばれた事か。

「げほっ、げほっ、どうかな？ アンジェリが見事国民を導くまでは持ちそうか？」

カントは迷っていた。彼は医師としては大のベテランであり、また有能な者だった。名ばかりの貴族お抱え医師とは比べるだけ失礼だ。

故に、金を受け取り、一人の人生をねじ曲げてしまった自分は何なのだ、と。激しい葛藤に、先日から体調が優れない。医者の不養生という奴かと思った。

「ん？ どうしたのだ……まさか、ワシは……」

「いえ、国王様、滅相もございません……あ、あと……」

カタカタと、指が震えた。決して老いのせいではない。

王に、そもそも死期が迫ってなどいない。自分が、この薬を……良薬と偽り、毒薬を渡せば彼は終わるのだから。

だが胸を張れようか？ 最初はアンジェリの頼みであつたし、深い意味合いがあるのかと思案もした。でも、例え深い意味があろうとも、自分の行為に胸を張れようか？

この手を金と命で汚してまでも……これ以上に腰を曲げる必要があろうか？ カントの答えは、医者としてのものだった。

「おつ、おお……お聞き下さい、ニルベールキング国王様よ。私はとんでもない過ちを犯してしまいました。どうぞ、どうぞお聞き下さいませ！ あなたに死期は……最初から……」

カントが決死の覚悟で挑みかけたその時だった。

扉がどん、とけたたましく開き、そこから飛来した白銀が老医者
の頭を貫いた。

おあつ、と空気を洩らし間もなく医者はこと切れた。ほぼ即死である。

「何奴だっ！」

ガルデルは王の声色を発した。瞬時に上半を起こしたのはさすがである。

「メンドクセイよ、ちゃあんと役目こなしてりゃ、メンドクサク
ならなかつたんだ」

「おっ、お前は第六騎士団の……」

それが最期の言葉だった。

第六十三姫 無敵P VS 真実 1

あれから一週間が過ぎた。サロメは未だ集落の一番大きな屋敷に住まわされていた。

(……はあ、私は何をしてるのかしら?)

毎日毎日、集落の人々が祈りに来ては、何かしら物を置いてゆく。私はありがたいシンボルか！とも思い始めていたりする。

退屈極まりない現状。ゲエンバアらともあれから会っていないし。

「ごめんください」

あーあ……また何だか祈っていく人かな？ ……あれ、言葉が通じる！？ チャンスだわ！

「おいサロメよ、何をやっているのだ？」

「あれっ、まっ、魔法使いアトモス様！？ なんてこんな所に……」

「キサマがいつまで経つてもここを出ようとしなからだ！ それともここがキサマの終着点か、ならば文句は言わないが」

「それでもいいと思ってたんだけど……あの戦いに勝ってから、何かおかしいのよ。まるで私を崇拜してるみたいな……女神みたいなのは分かるんだけど」

「……なら、真実を見てみるか？ 夜中だ、日が沈み皆が寝静まった時、真実を見に連れていってもいい」

「うん、お願い」

夜中になって、アトモスは予告通りに現れた。

「では、行くぞ」

二人は丸い金色の月をバックに飛んでいった。

第六十四姫 無敵P VS 真実 2

「サロメよ、そもそも何故、彼らは代表を選び戦うのか……考えた事はあるか？」

砂の上を飛行しながら、アトモスは問うた。

「それは……確かに疑問に思っていたけど、実際どうなの？」

サロメはアトモスに抱き抱えられ共に飛んでいた。

「深く考えていなかった？ それは困ったな……お前が勝った事によって生じた犠牲者の数、知りたいか？」

「なっ……」

「今日で七人目だよ。少なくとも七人の人間が間接的にはいえ、キサマに命を奪われたと言ったら、どうだ？」

サロメには意味が分からなかった。

「そもそも、何故この人間は生きていられると思う？ 水は？ 食料は？ 一体どこから調達しているのか、それさえ分かれば仕組みが見える」

「……まさか、あの戦いって……」

肌寒い風が身体を叩いた。

「樂園を奪い合う、正義の戦い……分かるか？ 自分達の正義が形をなして自分達の正義の為に戦い、強き正義が全てを得る。全く、風習や伝統に忠実過ぎるのだよ、この連中は。命懸けでそれを守ろうとしている変わり種だ」

と、眼下にはまた建物が見えた。恐らくこの間、サロメらの前に現れた人々の集落であろう。

その集落の真ん中に、月明かりに照らされて微かに見えたもの。高さは三メートル、幅は二メートル程の長方形が砂に突き立っている。何の為に……そう思っただ反対側へと回った時、サロメは愕然とした。

人だ……。

人が、その長方形に磔にされていた。

「そんなつ、あの人……」

「ああ、キサマが倒した男だ。戦いで死ななかつた敗北者はああなる」

それだけではない。磔男の足元には、数人の人がうずくまりピクリとも動いていないのだ。

「分かったか、敗北とは即ち飢餓であり死だ。ここから南にオアシスがある、あれが樂園なのだ。あれを奪い合っただ化身は戦う」

「ちよ、ちよっと待ってよ！ なら私が負けてたら良かったって

言うの!？」

「キサマが負けたらキサマの世話になった集落が壊滅するさ。次の戦いの時までだ……勝っている限りキサマは正義の化身、神に等しき存在である。お前に勝てる者が果たして居るのかな？」

「そんな……どうして皆、馬鹿げた伝統を守るの!？ 皆仲良く分け合えばいいじゃない！」

「無理だな。伝統でがんじがらめにされている連中だ、理不尽な死にすら神を持ち出す連中だ、今更生き方を変えんだろう！」

「……ねえアトモス様、ならさ、神話の続きを無理矢理書き足せばいいんじゃない？」

「? どういう事だ？」

「樂園を奪い合う神話に終止符を打てばいいのよ。終わらせればいいんだわ、ねえアトモス様、協力してくれない？ あの人たちをふざけたルールから解放してあげたいの！」

サロメの目は、決意の色に満ちていた。

第六十五姫 無敵P VS 真実 3

翌朝、集落の人々は異変に気付いた。

「大変だ、あの使いの娘が居なくなっている！」

そう、サロメの居るハズな家はもぬけの殻であったのだ。

「なんて事だ、戦いは今日だというのに、逃げられてしまつとは」
人々は口々に不安の声をあげた。

「皆さん、心配しなくてもいい！ 元々あの娘は余所者、使いの役目を負うなど土台無理だったんだ。今日よりこの私、ゲエンバアが使いの役目に戻り、勝利してみせましょう！」

「おおっ、そうだ、ゲエンバアが居るじゃないか！」

「頑張れゲエンバア、あちらの使いに負けるなー！」

それまでの雰囲気、彼は一変させた。

「私は望む、正義の化身ダヴァラの勝利を！」

「私は望む、正義の化身メスカの勝利を！」

ゲエンバア扮するダヴァラと、メスカが槍を構える。いよいよ、戦いが始まるうかというその時であった。

“マツノダ！”

「!?!」

異界の言語が辺りに響く。空は雲に覆われ、昼夜が逆転したかのようだ。

そして天に雷がゴロゴロ鳴り響き、雲の中から、何かがゆっくりと姿を現した。それは、仮面の者である。

「なつ、あいつは!?!」

「あれは前に使いをしてた娘じゃないか!?!」

ゲエンバア側の民が明らかな狼狽を示した。

「そんな……馬鹿な……」

“化身共よ、ご苦労だった。我は復活せり、化身らよ、主人の名を呼ぶがいい。我が名バードドゥの名を”

神話では祖なる者、バードドゥ。自らが動けぬ故に、化身を作り出した存在。

善なるバードドゥは化身を生み出す。悪なるバードドゥは化身を生み出す。それがダヴァラとメスカ。

“もう化身は必要なくなったのだよ”

バードドゥは現地言語でそう言った。

“ 使いはもう必要なくなったのだ、これからはこのバードドゥ
が全てを支配すればよい ”

台詞はアトモスが言っている。サロメは面を被っているから、口
パクの必要はなかった。

語り継がれてきた、変わらぬストーリー。

勧善懲悪の物語は今、終わりを迎えた。

「 なんだと、よそものの娘が！ お前がバードドゥなどと、妄
想も大概にしろっ！ 」

“ ならば証明しよう……雷よ轟け！ ”

サロメがそう言った瞬間、暗雲がかつ、と光り凄まじい音が大气
震わせる。

人々は恐れおののいた。そして平伏する、理不尽なる支配者へと。

やはり、神話に沿って生きて来た人々だ。結末が書き足された途
端、それに従ってゆく。理不尽に抗う事はしない……自らの命より
も神話の遵守が大切なのだ。

だから、サロメはこう言った。

“人間共よ使い共よ、私は樂園を独り占めしようと思う。お前達はもう必要ないからな……だが、それではキサマらがひたすらに憐れだ。だから一度だけチャンスをやるう、使いよ、二つの使いよ、私と戦え”

それこそが、サロメの狙いであった。

“どうした？キサマらには不条理に抗う気力すらないのか！？このバードドゥにされるがまま、というのだな？”

「いや、戦う……」

その時、声が一つあがった。サロメは面の下で微かに頷く。

「バードドゥ、あなたが人間を不要だとするのなら、この正義の化身ダヴァラは人間の為に戦う……人の為に戦う！」

ゲエンバアだった。やっぱり、そうだ。

「そつ、そうだ！俺だって正義の化身メスカだ！人間の為に戦うぞ！」

二人の化身は、槍を構えてバードドゥの正面に立つ。人々の前に立った。

第六十七姫 無敵P VS 新地平 2

むかしむかし バルバロスという とちには バードードウとい
う かみさまが ありました

「うおおおお！」

ゲエンバアが駆ける。バードードウ扮するサロメに槍を突き出し
た。

バシッ！

しかし刃は届かない。あと数センチにて止まった。

しかし なにをおもったか バードードウは にんげんのごども
を どこからかつれてきて そだてたものです

メスカ扮する男が突く。が、バードードウは何の苦もなく片手で
槍をキャッチしてしまう。

二人の成人男性それぞれを腕の一本ずつで封じ……そして操った。
槍ごと二人を持ち上げ、投げ飛ばしたのだ。

それからまもなく、バードドゥはふたりになりました。どち
らがほんものか、だれにもわからなかったのです。

「ぐあっ……っ、強い……」

「やはり、圧倒的な力だ」

“ どうした？ もうおしまいか？ 今ならば無礼を許してやって
もいいのだが ”

「 やかましい、私達はお前などに屈したりはしない！ 」

やがて ふたりのバードドゥは それぞれべつの ぶぞくにみ
かたしました。じぶんたちのみかたは ぜんバードドゥ じぶん
たちのときは あくバードドゥ とよばれはじめたのです。

槍が走る。

空を切った。

第二撃、第三撃。やはりかすりもしない。

柄を弾かれ、ダヴァラはよろめいた。

バードードウは軽く跳躍し、面に回し蹴りをたたき込む。

ダヴァラの仮面は碎け、素顔、ゲエンバアの顔が現れる。

そしてそれぞれのバードードウは じぶんのつかいを じぶん
のかわりに ぶぞくらへと あたえました そのなは ダヴァラと
メスカ

「……ちいつ、メスカ！ お前も手伝うんだ、同時に行かないと
あいつは倒せない！」

ゲエンバアは、先程から動きを止めているメスカに言った。

「違う……おっ、俺はメスカなんかじゃないんだ！ ただの人間だ、やっぱり俺には無理だったん……」

「その先を言うな使いよ！ お前は皆に選ばれた使いだろうが！ ただの人間だなんてとづくに分かった、俺だってそうだ。だが役目を与えられた以上、自らが背負った人々の為に死力を尽くせ！ 俺はとうにぶっ飛んだ、お前もぶっ飛んぶんだ！」

「でも、俺は……」

「使いじゃないなら使いになれ！ 演じるんだ、今ここで俺達が逃げたら誰が皆を守る？ 走れ、突け、跳べ、振るえ、殴れ、叩け、だが決して背を向けるな！」

ゲエンバアは再びバードドウへと突っ込んだ。

“……それでこそ、使いというもの”

また、ゲエンバアが吹き飛ぶ。だが、ダルマの様に起き上がり、また、駆ける。

何度も、何度も殴られ蹴られ、傷付き血を流し、それでもダヴァラは走る。自分の後ろの人々を守る為に。

それぞれのつかいは けっとうし かったぼうが しんのバードドウのつかい そうなるのです

「うっ……」

メスカは柄を、血が出る程握りしめた。奥歯が鳴く程噛み締めた。

そして……自らを一度、思い切りはたいた。

痛み。恐怖を超える痛みをもって、メスカの身体は動いた。

「うううおおおオオオオ！」

それを見たダヴアラも最後の力を振り絞り、敵に突っ込んだ。

「はああああアアア！」

(……アトモス、今だよ)

(分かっておるわ)

バキィッ！

二本の槍が交差する。

サロメの、バードードウの仮面が碎け散った。

バードードウの仮面が砕け、サロメの顔があらわとなった。

「トドメだ、バードードウ！」

二人の化身はそのまま、一気にケリをつけようとしていた。その時だった。

“止めるのだ、化身よ”

「!?!」

今度は背後から声がした。間違いなく、バードードウの声だったのだ。

人々は振り返る。そこには背高な黒マント姿の、よりそれっぽい神が仁王立ちしていた。

「我こそは、真なるバードードウ……人間らよ、お初お目にかかる」

低く、威厳に満ちた男の声。神でなくとも、王か魔王かという言葉い回しに人々は自然と頭を垂れた。

「なんだと……ならば、このバードードウ名乗る娘は一体!?!」

ゲエンバアがサロメを指差し言った。

「気付いているハズ、私は子供を一人育てた。そう、私がこの土地を離れた時の導き手が必要であったからだ」

アトモスはごく自然に振る舞い、隙を一切見せなかった。嘘が、虚言が真実となってゆく瞬間だ。

「そして私は指示を出した。人間を二つの陣営に分け、競わせろ。結果、人々は助け合いを忘れ、自分の陣営を勝たせる為に戦った。そして犠牲も数多く生じた」

「何故その様な真似を！？ 私の祖父は役目を果たせず死んでゆきました、何故なのでしょうか！？」

「……神の言葉は絶対だ、少なくともお前達はそう思ったからこそ、競い戦った。だがね、嫌だったら嫌でいいのだ、神が間違っているのなら神の目を覚まさせるのは人しかおらぬ。よいか、助け合えば神にすら勝利出来るとお前達は知った」

「……………」

「これから、ルールをお前達ヒトが作ってゆくのだ。争いが嫌なら争うな、一人が間違えば皆で止める、神などもう、お前達に必要なではない。だが……ダヴァラの男よ、私が間違ったのは事実、無念を晴らしたいなら私を貫くがよい」

アトモスは両手を広げ、自らの身体を槍の前に立てた。ゲエンバアは、得物を投げ捨てた。

「しない。ヒトは変わる、神よ、バードードウよ、ならばこれか

ら私達は正しいルールを作る。もう、こんなものは必要ないのだ」

彼は、ダヴァラの面をも投げ捨てる。それにつられてかメスカの男も槍と面を砂の上に捨てた。

「それでよい。ヒトよ、神はもういない、自分達のルールは自分達で勝手に決めるがよい。一人一人がより、正しく導くがよい。ヒトの世を作るのはヒトなり」

と、アトモスは言うと、サロメへと歩み寄る。サロメはアトモスとゲンバアの姿にうっとりしていた。

「デハ、サロメ ユクゾ！」

「ハイ マハウツカイサマ」

二人は天へと舞い上がり、やがて消えていった。

しかし ひとびとがあらそっている バードードウがおりてきました

かれはかみですが まちがえることも あるのです

かみは ひとびとに いいました ルールはじぶんたちでつくり
じぶんたちで ただしくみちびけ と

いじつして かみは このちをさり のいせねた ひどびとほ
いじつぱい くにをよくしていじつと どりちくしていじつのだす

神の書 改定版

著者 ゲエンバア・アード・バルバロス

日が傾き、星と空を分け合った頃、サロメとアトモスは宿に着いていた。

バルバロスに二つしかない港に唯一存在する、簡単に作られた宿だった。ただ板と板をくっつけて構成された寝るだけのスペース、と表現出来なくもない。

「うげっ……こんな所に泊まるの？ これならまだ、野宿の方がいいんじゃない？」

サロメは、壁の腐食や染みを見て言った。所々虫食いも見られる。

「むっ……朝まで船はないというのだ、仕方あるまい。それに野宿だと？ 馬鹿を言うな、殺人毒を持つ生物に寝首をかかれる」

アトモスが言うのだから、余程危険らしい。本当によく知っている人だと、サロメは感心した。

「ところで、部屋はどれ？」

一応、ベニヤ板製のドアで区切られている扉には、現地言語と数字で区別がされている。アトモスはここだと、11の番号の部屋を指差した。

「はい。……ところで、アトモス様のお部屋はどこですか？」

サロメはすかさずアトモスに問うた。

「む？ 私はここに宿泊などしない。空を飛べるしワープだって出来るのだぞ？ 泊まる意味はない」

「ええ！？ そんな、ダメですよ、アトモス様もかなりお疲れでしょう、泊まっついていきましょよ！ 私の部屋につ！ 是非！」

「おい……それなら私は別の部屋を……」

「お金って大切なんですよ、アトモス様っ！」

「しかしだな……」

「お願いしますっ！ こんな知らない土地に独りきりの夜なんて怖くておちおち眠れもしません」

「ハアアア分かった、しかし……変な事をするなよ？」

「勿論です！ サービスまんて……ってエッ！？ ……はい、勿論、変な事なんて致しませんよ、ハハハハ……」

「よし、ひとつ飛びするか」

「あああー、待って下さいって、サロメを置いてかないでー……」

サロメはマントにしがみ付き、懇願している。正直、鬱陶しい。そのまま無視して歩いてても、サロメは手を放そうとせず、ずるずる

と引き摺るばかりだ。

「ええい、分かった、分かったから放せ！」

スツポンの様だったサロメはあっさりと放した。こうして二人は同じ部屋へと入ったのである。

「よいか、真ん中からこちらが私の領分、あちらがお前の領分だ。国境を超えるな、分かったか？」

「……」

「分かったかと聞いているのだ！」

「はぁぁーい……チツ」

露骨な舌打ちが聞こえる。全く、普通こんな事をするのはお前の方ではないのか、とアトモスは頭の中で毒づいた。

こうして、長い夜が始まったのである。

第七十姫 無敵P VS 無敵M 2

「ねえ、アトモス様はどこ出身なの？」

「想像しろ」

「そのマント、暑くないです？ ってか、他に服は持ってないんですか？」

「想像しろ」

「身長、高いですねー、私と頭一つ分くらい違いますけど、毎日何食べてるんですか？」

「想像しろ」

この淡白なやりとりも、もう何回目だろうか。サロメが質問する度にアトモスが同じフレーズを繰り返す。

例えば最初、サロメはいきなり“恋人とかいるんですか？”や、“年下の女の子はどうですか？”などと言ったのが原因かもしれない。

しまいには煩惱の数まで、定期文解答の質問を繰り返しそうな勢いであった。

「アトモス様って、パンツとか自分で洗ってます？」

「……想像しろ」

「アトモス様、友達います?」

「……想像しろ」

だんだんと、解答までの間に雑音が混じる様になっていた。いわく、ギリリッ、だのチッ、だの。

「アトモス様は、私の行く先々で現れるけど、後をつけて来てるんですか?」

「……」

定期文すら、響かない。まして雑音の類いも、或いは相手側の息遣いでさえ。

「アトモス様?」

まるで壁に向けて会話しているかの様だった。

「……寝ちゃいましたー?」

どこまでも無だった。

「……よしっ」

何がよしなのかはともかくとして、サロメはおもむろにレザーア

ーマーを脱ぎ捨てた。普段着はプレートとレザーの二重構造であり、その下は下着である。

サロメの基本睡眠スタイルだ。当初はレザー姿で眠っている時期もあったが、最近は敬遠している。翌朝には身体中に赤い模様が描かれてしまう事が頻発したのも理由の一つだ。

(んじゃあ、まずはアトモス様の寝顔をば……)

彼は当然ながら、サロメに背を向け寝転んでいた。彼女はそーつ、と強盗脱帽ものの忍び足で彼に接近してゆく。

全く気付いていない。伊達にアンジェリや噂好きの兵士らの会話を、傍受し続けていた訳ではないのだ。

(もうちょっと、もう……)

彼の鼻先が微かに見え始めた。テンションも高まり心音がやけに大きく響く。さあ、禁断の一步を踏み出すのだ。

ベチイッ!

(!!!?)

その瞬間、彼女が自分を客観的に見れたなら、他人に見られたくない顔ベスト3入りは確実だろう。

サロメはパントマイムさながら、張りついていた。空間に。

（えええええええー！？ ナニコレ！？）

二人を隔てる壁は厚さ数十センチの魔力結界と、余りに頑強であった。

空が明るみ陽が頭を出した頃、アトモスはゆっくり目を開いた。

身体を起こし、部屋の真ん中を見る。半透明の壁が隙間なく展開されていた。

「……寝る時にこんな事したのは初めてだ……」

彼は呆れながらも、魔力結界を解除した。すると……。

「むっ？」

彼の見たもの、それは……結界のすぐ傍らで眠って、いや倒れていると表現した方が適切なサロメだった。

下着姿のまま、身体中を薄汚れさせ、仰向けになり……首は七十度程度傾き、手はだらんと垂らして足は妙な方向を向いている。行き倒れの図としては、最高の出来だ。

「……おい、起きんか、おいっ」

身体を揺する。反応なし。

より、激しく揺する。ダメだ、反応なし。

頬を一発、ぴしゃりとしぱく。反応なし。

「ええい、ならば……」

アトモスがいよいよ拳を振りかぶった時だった。サロメが微かに口を動かす。何かを、確かに言った。

アトモスは拳を止め、耳を傾ける。どうやら寝言らしいが……。

「ううん……無理ですって、こんな……沢山の中からなんて……とても……」

“大丈夫、誰を選んでも恨みっこなしだから”

“そうです。どうかサロメ様の思うがままに”

“そうだ、ま、俺様が選ばれるのは確実だがな”

「どの方も素敵で……困ったわ、とても選べない……」

“ならばキサマ、ここで死ぬがいい！ サロメ様を惑わせる奴はくたばれ！”

“なにを！ お前こそ邪魔だ、私のサロメ様に触れる資格などお前にはない”

“何だか知らんが、サロメ様は我々、ワイルド盗賊団リーダー、ワイルド様のものと決まってるのさ”

“グふふふ、サロメ、三十キロも痩せてやったぞお。さあ、早速”

“俺様の腕のフックが疼くぜ、サロメ様よお”

“サロメ、私の一生の使いになってくれ”

「……そんなの、選べる訳が……」

“おい、お前。魚の焼き方を教えてくれ。どうしてもまる焦げになるんだが……”

「アトモス様まで……」

“うむ、うまい。ではな、さらばだ！”

「えっ、ちよっ……私まだ何も」

アトモスが消えたと同時に、男らは一斉にサロメ目がけ群がって来た。

「きゃー、ちよつと待ってまだ心の準備がああああ……」

「ああああ……っつて、ん？」

サロメは目を覚ました。

「何だ……夢か……」

ひどく残念そうに、サロメは呟いた。

「ん？ 何、コレ」

どうやら書き置きらしい。一枚の紙にでかかと言だけ、書いてあった。

“さらばだ！”と。

「チクシヨオオオオオ………」

第七十二姫 無敵P VS ミナアラの若者

サロメは船を降りると、新大陸に足を踏み入れた。着いたのは、ミナアラ。当初の目的地であった。

港に降り立った時、一番に気付いた変化は行き交う人々の服装である。バルバロスの人々は、ポロ布を身体に巻き付けただけ、みたいな人が大半であった。

だが、ここミナアラは皆が皆、競い合う様に派手な衣服を身に付けている。目に痛い格好は女性のみならず男性までもを飾っていた。

（そういえば以前……アンジェリがミナアラの服を取り寄せたわね）

派手に着飾り、誕生会に出席していた姉を思い出した。皆が一樣に褒め称える中、サロメだけはスカートがカボチャみたいで吹き出しかったのを覚えている。

（……しかし、目立つわね、鎧姿だと）

そう思うのももつともで、サロメの様な年頃の娘は見える範囲でも、肌を露出させ耳やら頭に装飾品を、或いは化粧やらを当然の様にしていた。

まだ港だからいいものの、街まで出ていったらどうなるう？ 悪い意味で注目の的、嘲笑の対象とならないだろうか。

しかし鎧一つでここまで来たんだし……今更着替えて荷物を増やすのか？ いやでも、おしゃれはしたいし一度はあの娘達みたいに着飾ってみたいという感情も、確かにある。

どうしようかと悩んでいると、道行くけばけばしい過剰化粧な娘らが、こちらをチラチラ見て笑っているではないか！ ヒソヒソと何かを言い合っては声を殺し笑う。

(……何が可笑しい……ニルベールリング騎士団の鎧の、何が可笑しい、小娘共オオ！)

自分の方が小娘なのだが、サロメは既にとさかに来ていた。

ぶん殴ってやるうか！ その妙な、筆か角みたいな髪の毛ぼつさばさにしてやるうか、と既にサロメは脳内で百回はぼこぼこにしている。

だがその時、娘二人に近づく男二人。男らに気付き、キャピキャピと色めきたつ彼女ら。サロメを嘲笑していた表情はおくびにも出さない。

男らもまた、軽薄ななりである。奴らは会話もそこそこに、腕を組んで歩いていった。

残されたサロメは俯き、無念と空振りの怒り、振り下ろす場所を失った拳が重なって全身をわなわなと震わせた。

(……あんな不細工でもおしゃれさえすればモテるんだ……上

等オオ
)

サロメは街へと、弾かれた様に駆け出した。

サロメは取り敢えず手近な店に入ってしまった。

「いらっしやいませー！」

店員が会釈をし、大きな声で迎えてきた。サロメは思わず深々と礼を返した。どうやらここは、服屋のようだが……。

店員の視線が痛い。ええ、どうせ鎧女なんて珍しいでしょうよ。

「ごっ、ここはアレ、洋服屋さん？」

その発言は、ファッションに疎い事実を惜し気もなく晒しているが、店員は笑顔のまま答える。

「はい。しかしお洋服だけでなく、お客様自身のコーディネートも承っております」

「ふうん、散髪とか？」

「はい、当店には美容師も揃えておりますので、散髪から今流行りの髪型も思いのままです」

サロメは自身の頭を、近くの鏡で見てみた。前髪は最近になって気になり始めたのだが、やはり目にかかってしまっている。後ろもまた、肩近くにまで到達していた。

しかし、現時点で美しさなんてものは微塵もない。さらりとまとまらず、ぼさりとバラけ、手串をすればガリガリ引っ掛かる。

よくよく見れば顔なんかも元々肌は浅黒いとはいえ、今は焦げた魚みたいに黒い。日焼けと汚れのダブル効果だ。

「あろう……」

「はい？」

「お風呂屋さんって、どこにあるの？」

「……よろしければ、当店の美容入浴室をご利用なさいますか？多少、お値段は張りますが」

「……お願いします」

サロメは美容入浴室へと向かった。

「これはなんでしょうか？」

アンジェリ王は、目の前に運ばれて来たモノを見て、言った。

「はい、こちらはミナアラ製のドレスにございます。最高のデザイナーと最高の材質を使い作りました、まさに国一のドレスです」

「これはこれは……これを私に？」

「はい。最高の衣服は最高の美貌の持ち主に身に付けて頂いてこそ、最高に栄えるのでございます」

「まあ、最高の美貌だなんて……お上手ですこと」

（当然よ！ 最高の一品は全て私が身に付けてこそ美しい。分かり切った世辞を並べなくてもいいわ）

「しかしこの度は、十二代国王様の事は残念でございました。謹んでお悔やみ申し上げます」

「……ええ」

（あの男はもう関係ないでしょう！ いちいち煩い商人ね）

「しかし、今はアンジェリ様が国王になられ、民の心も一つとなつております。大変でありましようが、どうか、どうか……私も応援しておりますので」

「そうですね。一日も早く民の為、王の責務を全うしたいと思えます」

（小煩い商人風情が……用事が済んだならさっさと帰りなさい！）

「では、私はこれで。どうか今後も良い間柄でありましよう」

「ええ」

(さっさと帰ればいいのよ、うすのろが！)

豪商人は王の間をあとにした。

「ふう、話が長いのよ年寄りって……ラース、このドレスなわけけれど下女にでもくれてやりなさいな」

「よろしいのですか、アンジェリ様」

「ええ。あのジジイは最高の衣服の後に最高の美貌と言ったわ。私が服より劣ると、そう言ったのよ。だからいらないわ」

「かしこまりました」

「……ふん、人あつての服でしょうに。あくまで服なんてもの、引き立て役であつて主役ではないのよ」

アンジェリはそう言った。

第七十四姫 無敵P VS 入浴室

「こ、こらあげん……?」

サロメは現在、美容入浴室内に居た。だが、彼女にとっては異次元であり驚きだらけだった。

まずは、ごちゃごちゃと隅に置かれた数々の道具。一体風呂場で何をやる気だろう? と思った。

身体を洗うのだって、石鹸一つとたわしがあればいいのに。……等とサロメは本気で思っている。

そう、従者もなしに一人きりで入浴していたネフィリム城時代、それまでは小川を風呂と呼んでいた彼女はどうしたらいいのか、よく分からなかった。

結果として、泡たてる石鹸と、ものを洗うたわしに目をつけ、ごしごしと洗うクセがついてしまったのだ。咎める者もなかった。洗っているのか、あるいは肌を鍛える苦行なのか判別出来なかったとは、下女の談だ。

「……りんす? ナニに使うものかしら……泡だたないし」

サロメは、ビンの蓋を開け、手にとってみる。

(クリーム……? にしたって、私には必要ないわね)

ウロウロと入浴室内をうろつき、そしてようやく、たわしを見つ

けた。

「あつたあつた、これで……」

サロメは早速、たわしで身体をこしこした。石鹸も過剰に泡をたて、隅々までをキレイに洗う。確かに隙間なくキレイにはなるのだろうか……。

その泡を、サロメはそのまま頭にも乗せ、髪の毛をぐわしぐわしと洗う。ミナアラの乙女がみたら卒倒ものである。

湯船から風呂桶で湯を汲み上げ、そいつで泡を流す。シャワーの存在意義を完全に否定してみせた。

……こうして、サロメの入浴タイムは終了した。僅か五分ちよつとの早業である。

彼女はゆっくり鎧を身に付けると、店内へと歩いていった。

第七十五姫 無敵P VS ファッション 2

「これとこれとこれを下さいっ!」

サロメは店内へと戻るなり、一番に下着売り場へと直行した。そして彼女はパンツを三枚買った。普通のと普通のと紐の様な奴を…。

「あの、お客様……そ、それは……」

「いいのっ、せくしいなのが私には必要なのっ!」

「……はい」

店員の憐れむ様な視線が背中に痛い。が、やむを得ない、やむを得ないのだ。時には冒険が必要なのだ!

「あのう……これは何?」

「こちらは、ブラジャーといいまして、バストの保持と保護を目的としたものですが……」

が……何!? 店員の視線が一瞬、自分の胸部を走ったのを、サロメは見逃さなかった。

鎧越しにも分かれている、起伏の無さ。あたかも、お前には必要ない、そう言われているかの様だ。……申し訳なさそうな店員の視線、止めて欲しい。かえって惨めになる。

「あの、すっ、スポーツブラというものもありまして、そちらでしたら……その……」

うん。そっちにする。

でも、何だか楽しい。こうやって自分で衣服を選んだ事なんてなかったし機会もなかった。自分自身をコーディネートするのは何と素晴らしいのだろう。

「えっと、次は……」

いよいよ、洋服を選ぶほうかという時だ。サロメの目に、一枚の商品が映る。彼女は思わず声をあげた。

「ちょっとちょっと……なによアレ、所々破れてるじゃないの!」

「ああ、あれはダメージジーンズという商品です。わざとやっ

……あれもおしゃれ?」

「はい」

「……買ったわ、あのジーンズの」

「ありがとうございます」

(他には……動きやすそうなのがいいんだけど……)

サロメの買い物は、その後も小一時間程続いた。

「……………」

サロメは後悔していた。いくら楽しかったとはいえ、さすがにやり過ぎた。

服だけでは飽き足らず、各装飾類、それに足回りで言えば膝元まである長いソックスやらブーツやら……両手に紙袋を四つずつ提げの帰還であった。

「どうしよう……こんなに沢山、持ち歩けないよ………」

本当に浅はかな行動であった。だけど……ようやく鎧オニリーの生活からおさらば出来るのだ。

重たくて、ピカピカ光を反射して、歩きたびにガチャガチャ鳴って、手足が若干曲げにくいし座り心地も悪くなる。バルバロスの時なんて表面で目玉焼きが焼けていた。

やっぱりダメよ、女の子がそんな歩くフライパンと化してるようじゃ！ との決意の元、サロメは宿の個室に戻り、紙袋の中に手を突っ込んだ。

街行く人々は、皆一様にせかせかとしていた。だが、わざわざ足を止めてこちらを指差す事も、ひそひそと話される事もなくなった。

そう、サロメは変身したのだ。

厚い鉄板の集合体からおさらば、シャツの上から薄手、短丈のコートを羽織り、下は例のビリビリジーンズという奴を履いて、厚底のブーツを装備。

彼女は間違いなく、ここに馴染んでいた。

(あとは、声を掛けてきてくれる、素敵な人だけね)

などと考えていれば、早速彼女は呼び止められた。

「あの、すみません……」

イケメンスーツ男が現れた。

「!!!?」

サロメは思わずガッツポーズを決めた。

第七十七姫 無敵P VS 変身効果 2

「出来ればアンケートに答えて欲しいんだけど……ここじゃ難だしあっちのお店でいいかな？」

かっこいい男はファミレスを示して言った。サロメはよく聞きもせずに頷いた。

「ありがとう、では早速……」

二人はファミレスへと入って行った。

「何か飲むかい？」

「えっと……水でいいですう」

サロメは思い切り声色を高くし言った。

「そう？ 遠慮はしなくていいよ、僕なんかコーヒーにフルーツパフェを注文しちゃうし。甘いものには目がないんだ」

そう言っつて男は微笑んだ。あなたの笑顔も、とっても甘いですよ……なんてサロメは思っている事だろう。

「ね、頼む、おごらせてくれよ。女の子に遠慮させたとあっては、僕の気が済まないんだ」

「ええっ……そ、そこまで言うんなら……私はこのミルクケーキ

ってヤツとジャイアント山盛りガッツリパフェを……」

「えっ!？」

「じゃない! ミルクセーキってヤツとチョコレートパフェをお願いしますう」

ああ、いけないいけない、よく見たらジャイアントくパフェはサロメの座高近くありそうなサイズの上、値段は桁が一つ違っていた。間違ってもか弱い乙女の注文すべきものではない!

「ああ、うん。じゃあ、注文は以上で」

かしこまりました、と店員は会釈をすると、走ってゆく。そこに男は話を切り出した。

「えっと、自己紹介がまだだったね。僕はサーシュって名前なんだ。普段は道すがらアンケートを取る仕事をしているのさ」

「わ、私はサロメと言いますう……名前、最初の文字が一緒ですね」

もじもじしながら、彼女は言った。

「ああっ、本当だ! たまたま声をかけてたまたま一緒に店に入ったら、たまたま名前の一部に共通点があるだなんて……凄く偶然だね。あ、言っておくけど、僕は誰にでも声をかける訳じゃないんだよ」

「本当ですね……何かの運命かも……」

「うん。なら早速なんだけど、アンケートを初めちゃっていいかな？」

サロメは頷いた。

第七十八姫 無敵P VS スーツ姿の男 1

「サロメちゃんが今、一番興味を持っている事ってなにかな？」

「……………そおですね……………やっぱり恋愛、かな。かつこいい男の人にガンガンもてたい」

「……………へ、へえ、それは素敵な事だね。ならサロメちゃんはおしやれとかに興味があるのかな？」

「あ、はい……………試行錯誤してますう……………というかむしろ、あなたに興味……………」

「それならば、いいものがあるんだけど、どうだい？ カタログだけでも見ていくかい」

男は鞆を開けると、中から一冊の雑誌を取り出した。どうやらフアッション雑誌の様で、表紙にはこれでもかと着飾った女性が載っていた。

「へええ……………絵がお上手なんですなえ、まるで本物みたい……………」

「はっ？ あの……………サロメちゃんってもしかして、よその国の人だったりするのかな」

男は怪訝そうに言う。

「私はニルベールリング育ちなんです。つい先日、ミナアラにやっ

て来たばかりで」

男は納得した。だから、彼女は写真も知らないのだと。

「サロメちゃん、これはね、絵じゃなくて写真というものなんだ。誰かが描いているんじゃないかって、写ってるんだよ。簡単に言つと、機械が一瞬で写し書きしてるのさ」

サロメは混乱している。

「まあ、無理ないよね。ところでサロメちゃん、この表紙に写ってる女の人、何歳だと思う？」

サロメはじろじろと表紙の女を眺めた。この大人っぽくて静かな美しさ、見ていて惚れ惚れする。アンジェリと比べても謙遜ない位だ。

「えつと……二十一位ですかね？」

「ブブーっ、残念。正解はこの子、まだ十六なんだよ」

「ええええっ！？ わ、私と同年だとう！？」

本気で驚いた。こんな綺麗で大人っぽいのが同年！？ サロメの自信は奈落の底まで落ちた。

だが、男は不敵に笑みを浮かべると、悪魔の囁きを始める。

「大丈夫、サロメちゃんもこんな風になれるんだよ」

「えっ、本当ですか？」

「もちろんさ。では彼女とサロメちゃん、何が違うのだと思う？
顔立ちや生まれなんかじゃないんだよ、最初は皆、大差ないんだ。
ああ、いい写真がちょうどあるんだけど……特別に見せてあげよう」

男はそう言うと、胸のポケットから一枚の紙を取り出した。僕と君だけの秘密だよ、と追加して。

「……えっと……誰？ この地味な娘」

写真という奴に写っていたのは、乱れた髪の毛に、分厚そうな眼鏡を掛けた、太り気味の女の子であった。強いていいところをあげようとするなら、心は綺麗かもしれない、とバランスは良さそうという事であった。

「実はこれ、この雑誌の表紙の子の二年前の姿なんだ。どうだい、全然違うだろう？」

(なっ、なあにいいいいいい！ 同一人物だとう！！)

サロメはまた、驚いた。たった二年間で人とはこれほど変わるものなのだろうか。こんな重騎士みたいなのが、戦乙女へ……。

「じゃあなんでこの子は、ここまで変わったのか……知りたくないかい？」

「し、知りたい！ すっごく知りたい！」

男は口の端を吊り上げた。

第七十九姫 無敵P VS スーツ姿の男 2

「これだよ、お化粧品セット、これで彼女はばっちりモデルさんになったのさ!」

男はそう言うと、ハンドバッグの様なものを取り出した。

「この持ち運び便利なバッグの中にはなんと、お化粧品に必要な道具が全部揃っているんだ。これ一つでだよ!? ほら、写真の彼女も肩に掛けているだろう。見た目もおしゃれだし、重たくもない!」

男の口調が商人のそれに変わりつつある事も、サロメは興奮と驚愕で気付いていない。人はテンションが急激に変動した時、隙だらけとなる、男はそれを心得ていた。

「今ならなんと、この指南書も付くよ。それで値段はたったの二万エイルだ。どうだい、お買得だろう?」

「二万……エイル? 結構、高いですね、それ……」

つい昨日、サロメが衝動買いとも言える買い物に於いて使ったのは、一万二千エイル。つまりはその倍近い金額である。サロメが戸惑うのも当然だろう。いつの間にか買い物をする、という前提になっている現状はスルーされている。

「うーん、ちょっと高いよね。でもこれ、本当は四万エイルするんだ……サロメちゃんだけの特別な値段だったんだけど……誠意が足りなかったね。よし、特別の特別に一万エイルでいいや!」

突然、半額となるセット一色。サロメだけに特別、という部分も大いに彼女の心を刺激した。この人は、本当に私を特別視してくれている、と。

(……ふん、コイツ全く疑ってねえな。昨日、買い物しまくるコイツ見つけて目を付けてた甲斐があった。おしゃれに興味しんしんみたいだが、ごちそうさま、俺達はその向上心のお陰で飯が食えるのさ)

男は原価五千エイルの品をそつとサロメに近付けた。最初に高額を提示し、次第に安くしてゆくなどは常套手段、基本中の基本なのだ。

(このセット買ったからって、こんなになれるわけねえじゃねえか！ 要は努力と才能を併せ持った奴だけがこうなれるのさあ！)

サロメはやがて、一言呟いた。

「私、コレ買います!」

と。男の待ち侘びた反応。本当は七千エイルまでは妥協するつもりであったが、決まってしまうたから、それでいい。

「おお、本当に？ 買ってくれるのかい？」

「はい」

確認作業も済んだ。後は契約書である。この場での契約成立を形にしておかねば、後々の言い訳と隠れ蓑にならないからだ。

「じゃあねサロメちゃん、ここに名前を書いてくれるかな？
— 応、あれだ、買った時の証明になるものなんだ」

サロメは疑る事もせず、言われるがままペンを持つ。ペン先が契約書をなぞり……。

（ははは、何て簡単に終わったんだ！ サロメちゃん、これからは気を付けるんだよ！ いやいや、ウチでもっとお金を使った後でいいか、気付くのは！）

バシヤツ！

「「！！？」「」

何が起きたのか……二人にはよく分からなかった。

「ああ、すみませんね、お客様」

コーヒーだった。どす黒い液体が、二人に飛沫を契約書に本流を浴びせかけたのだ。化粧セットと雑誌はコーヒー臭がし、契約書は触れれば破れてしまいそうである。

「おまつ、店員！ ナニやってんだよコラアアア！」

男は勢いよく、店員に噛み付こうとした。だが、その勢いは一瞬でへし折られてしまったのだ。

「つい、手が滑っちゃってねえ……」

店の制服が悲鳴をあげる程にこつ、店員が現れた。

第八十姫 無敵P VS 謎店員

店員の男は、身長が二メートルを超えており、全身がゴツゴツとした筋肉の鎧で覆われていた。

しかし彼はコーヒーをブチ撒け、客に損失まで与えたというのに、その場に仁王立ちし二人を見下ろしていた。一応謝罪の言葉は口にはしたが……。

「どういっつもりだお前っ！ 俺のスーツ汚れたし商品もめっちゃくちゃだ、どう責任を取るつもりなんだ！」

「だから、悪かったと言っているだろう。コーヒーは代わりのものをいれるし、タオルも持ってくる。これでは不満なのか？」

「チツ、お前じゃ話にならない……店長だ、店長を呼べ！」

「残念だが店長は忙しい。外出中だ」

その頃店長は、店の奥にてロープでぐるぐる巻きにされ、口にはガムテープ。うんうん唸っていた。

「上等だよこのデカブツ、表に出る！ こう見えて俺はミナアラ式剣術と柔術やってたんだからな！」

脅し文句。これは客との契約が滞った際に使われる文句で、“実は僕、昔ボクシングやってた”とさり気なく言う。これだけで効力を発揮する魔法の言葉。

「分かりやすく結構だ。では表に出よう、よもや逃げたりはするまいな？」

男は一瞬あまりの迫力に躊躇したが、それでも怒りが勝る。売り言葉に買い言葉で返すと、二人は店を出ていった。

「……カッコよかった……」

サロメは店員への感想を漏らした。

店の外では既に、戦いが始まっていた。スーツ男側が店を出るなり仕掛けて来たのだ。

ミナアラ式柔術の特徴、襟元を掴んでからの投げ技が形を作る。掴まれてからは稲妻の如く一瞬にて敵は宙を舞う。

あっさりと形を作れた事で、男は勝利を確信する。が……、

「!？」

投げ飛ばしたはずが、自分の方が宙を飛んでいたのだ。

(なっ……こ、これは、襟投げ返し!?)

そう、スーツの男はカウンターを食らっていたのだ。そのまま背中を打ち昏倒してしまう。

「ぬるいわ、私を誰だと思っている」

謎の店員は言い放った。

第八十一姫 無敵P VS ハジメテノイタミ

サロメは遅れて店の外へと飛び出した。すると、既に決着がついている。

「ちょっと、何してんのよ店員さん！ これはいくらなんでも…」

「やりすぎ、か？ 優しい事だな、この男はお前を騙そうとしていたんだ」

「えっ……？」

サロメは首を傾げた。

「コイツはただの商人だよ。恐らくはお前の事も、ただの金蔓かねむすにしか思っていないだろう。いい加減気付け」

「そんな事ない！ そんな訳ないじゃない」

「何故言い切れる？ 現にこいつは商品の説明しかしていなかったじゃないか」

「それでも、私は信じてる。この人は悪い人じゃないわ！」

サロメは言い放った。店員はふんっ、と鼻を鳴らすと店とは反対側へ歩き出した。

「……一度、本当に痛い目にあうがいい」

そう言い残して。サロメは足元に転がる男の肩を揺すった。すると、男はすぐに目を覚ました。

「うっ、痛てて……」

「だ、大丈夫ですか？」

サロメが手を差し出す。が、その手に痛みが走った。男に、叩かれたのだ。

「うるせえよポケット！　さいあく、マジ最悪だよ、あーあ、スーッもこんなに汚れてんじゃねえか！」

「あ、あの……」

「お前と関わったからこんな事になったんだよ！　とつととサインしてりゃあこんな事にならなかったんだろっつが、もう二度と俺の視界に入んなよな！」

男はまるで別人の様に振る舞うと、さっさと足早にこの場を去っていった。

「……………」

サロメは、訳も分からず立ち尽くすよりなかった。つー、と頬に一筋の涙が伝う。

彼女は、泣いた。

第八十二姫 無敵P VS 騒々しくも楽しくあった日々

「……………！」

サロメはホテルに戻るなり、声を押し殺して涙した。

（どうして？ どうしてあんな事になったの？ 私が悪かったの？）

あんなに優しく親切だった男……だが、契約が交わせなくなった途端に豹変し、サロメに理不尽に噛み付いた。

信じていたのに。

あの店員さんの言う通りだった。彼にとって私は金蔓以外のなにものでもなかったんだ。

まるで夢破れた少女の様に、サロメはベッドで泣きじゃくった。涙も枯れはてたのは二時間も後のことだった。

「うっ、うっ……………ぐすっ……………」

“ 可愛いそうなサロメちゃん ”

「!?!? 誰っ!?!?」

突然、閉ざされた個室で他人の声が聞こえた。

“ 可愛いそんなサロメちゃん……でも、もうなかないで ”

サロメは怖がるどころか、どこか懐かしい声に寧ろ惹かれてさえた。まるで、亡くなった母親みたいに暖かくて慈愛に満ちた声であった。

「 誰……？ 母、さん……？ 」

“ サロメちゃん、もうなかないで……ぜんぶ、わすれてしまいましょう。かなしいこと、つらいこと、いやなことぜんぶ。わたしにまかせて、さあ、おいでサロメちゃん ”

「 あっ…… 」

彼女は言われるがまま、窓に近づいていった。よくよく見れば、耳の穴程の大きさの透明な球が、そこに浮いていた。

“ サロメちゃん、わたしにふれて ”

サロメは手を伸ばした。

ちよん……。

(姉様に呪いあれえええー!!)

（さあ、キサマに相応しい者を探す旅に出るがいい！！）

（剣はまだ未熟です、姫様っ！）

（どうか私達の町を救って下さい！）

（俺様はワイルド、サロメ様、あんたのファンさ！）

（あははーサロメさますてきー）

（すてきー）

（よろしければ、いつまでもここに……）

（行くのですね、サロメ様）

（女の子に助けられたら、ボクの人生おしまいです）

（グふふ、ようやく本気で戦える奴が来たか！）

（お前さんの力は危険過ぎるのよ）

（人の生きる道は人によって決められるのだ！）

（想像しろ……）

（特別に一万エイルまで負けてあげよう）

(一度痛い目にあっがいい……)

“きおくんなんていらぬ、まよいなんていらぬ、なやみなんていらぬ、ただただすめばいい”

サロメのなかで、何かはじけた。

彼女は服を脱ぎ捨てると、鎧を装備してホテルを出ていった。

「あ、お客様、チェックアウトですか？」

「……………」

「お客様？」

バキィッ！

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああ！？」

.....

第八十五姫 無敵P VS 五人の勇者達

「……おい」

ビルの屋上より、ファミレスの店員は見下ろしながら言った。眼下では鎧女の破壊活動が続いている。

「何故あんな事になった？ 我か、我のせいなのか？」

彼はファミレス店員という仮の姿を脱ぎ捨てる。しかしてその実体は、黒マントの元魔王だった。

「うーん……無敵力の暴走みただけで、あれはマズいわね。手当たり次第に攻撃してるわ」

「止められんのか？」

“アトモスキゅんなら出来るでしょうね。でもダメ、我慢なさい”

「ほう、何故だ？ 街どころか大陸一つ無くなるかもしれんぞ」

“それは、彼らの仕事だからよ。今から呼ぶわ、上手いこと状況説明願えるかしら？”

「むっ……説明は苦手だが……」

“つべこべ言わずにやりなさい、アトモスキゅん！”

「……………ああ……………」

・

ズバツ！

「ひゃあああああああああああ！」

ベキィツ！

「やめろおおおおおおお！」

サロメはこうげきを くりかえしている

「だ、だれかたすけてくれええええ！」

ひとびとは さけびにげまどう だが サロメに ようしやは
なかった

「……………」

サロメは ひとびとにむけ ファイアストームを しようした

しかし かげがおどりでて ほのおを むこうかした

「……？」

サロメは くびをかしげた

ひとびとのまえには たちふさがるものがあった

そのかずは 5

「やめるのだ、サロメっ！」

サロメには そのごにんが わからなかった

「元筆頭騎士、ラオド・メシユリトス！」

ドオン！

「ワイルド山賊団、賊長ワイルド様っ！」

バアン！

「元王国騎士団、ダンガあある・アブリイイト！」

ポオン！

「バルバロスノセンシ、ゲエンバア・アーダ・バルバロス！」

ガアン！

「むてええええきまおおっ、アトモおおおス！！！」

ドドドドドドドドドド！

5にんのせんしが
あらわれた

第八十六姫 サロメ VS ラオド

「お前達のやるべき事、分かっているのだろうな？」

「無論、承知している。サロメ様をお止めすればよいのだな」

「ああ、だがお姫様を救うのは、このワイルド様の熱ううい口付けよ」

「ちがああう、このダンガルの拳だああ！」

「ナニヲシテイル、クルゾ！」

サロメは ライトニングブラストを しようした

五人は一斉に分散し、攻撃を回避する。

「まずは私からだ。筆頭騎士、ラオド参る！」

ラオドはサロメ目がけて駆け出した。

サロメは プリンセスブレードを そろびした

「おおっ！」

「……………」

キーン！

剣とけんがぶつかる。

バキイッ!

「ぐっ……」

ラオドに 16のダメージ

(呑まれるな……相手の土俵で戦ってはならない、打ち破るのだ)

ラオドは剣を再び構え、駆け出す。中段、腰横に剣を構えた。

サロメは けんを ふるった

ラオドはかわして見せると、サロメへ横薙に一撃を見舞う。が、次の瞬間にはサロメが消えていた。

ブンッ

(後ろかつ!)

ラオドは咄嗟にステップ。剣先をギリギリで回避。振り向き様に一撃を、プリンセスブレードに叩き込んだ。

「!?!」

サロメは わずかに よろめいた

「サロメ様っ、私はあなたを侮っておりました。確かに力もお強

いが、あなたの太刀筋は一朝一夕のものではありませんまい」

サロメは たいせいをたてなおすと ふたたびかまえる

「あなたは他の貴族王族らとは違う。剣を本気で習っておられた……いつかは私からお教えしようかとも思っておりました」

サロメがまた、きえた

ラオドはその場を動かずに、目を閉じた。

「サロメ様に、ニルベールリング剣術の極意を見せねばなりませんまい。これが、私の二十と余年の成果です」

ラオドの周りは暗黒であった。視野を断ち、脳に流入する情報量の八割方を遮断したのだ。風に耳を傾け、風に肌を張り巡らして、彼は剣の柄にかかる力を軽減した。手を添えているだけ、ということも過言ではない。

まるで、東国剣術の居合い抜きの様だ。彼は今、大気と一体化した。大気こそが、彼の神経。

さっ……

揺らいだ。

サロメが、はっきりと見えた。

ラオドはまるで風が吹く様に、剣を振るった。淀みはどこにもなく、すべてが自然のままに。

キーン……。

カラカラカラ……。

プリンセスブレードは、サロメの手中を離れた。

「……!?」

「さあ、サロメ様、もうお止め下さい」

ラオドが、未だ構えたままの彼女に歩み寄る。が、突然、魔力の高まりを感じた。

「なっ……」

サロメは フレアボールツヴァイを しようした

たいりょうの ひのたまが ラオドへと おそいかる

「ぐうっ、あ……!」

数発を受け、彼は大きく後退する。鎧の一部が溶解していた。

「やれやれ、ようやく俺様の出番らしいな、下がってなよ色男」

ラオドを押し退け、ワイルドが前に出た。

第八十七姫 サロメ VS ワイルド

「二番手はこの俺、ワイルド様だ！ 行くぜ、サロメ様よお！」

山賊団リーダー、ワイルドは短剣片手に疾風の如く駆け出した。

サロメは フレアボールツヴァイを れんしゃしている

「ほっ、よっ、そいやっ、あらよっ」と

ワイルドは軽々とそれらを回避した。

「サロメ様、一つ約束してくれるかね？」

「……………？」

サロメが、僅かに反応した様に見えた。

「俺様が見事、あんたの懐に入ったら熱いキッスをしてやるぜ！
それで目を覚ましたらアンタは俺様の嫁さんだ！」

「なっ、貴様っ！ サロメ様に対しなんて事を！！」

「悪いね騎士さん、俺は彼女にいかれちまつてるんだ、他にやあ
何も見えねえ！」

体軀を沈め、猫の様に身体を縮めた。一蹴り、加速、獲物を捕えるチーターの様である。

サロメは レイビットシューターを しようした

ひかりのたまが ワイルドのまわりを とびまわる やがてたまから ビームがはっしゃされた

「おおっと」

回避、と同時に短剣を振るい、球を切り裂いた。二つ、三つ四つと次々に破壊し、遂に彼は囁き声さえ届くまでに接近した。

サロメは ワイルドをじっとみている ところなしか かれをねつつぽくみつめている ふうでもあった

「どうだい、姫様。やっぱり時代はちょい悪よ!」

とか言いつつ、ワイルドは緊張していた。ガラにもねえ、と二回、息を吐き心音を鎮めようと試みた。

が、何故だろう。ばくばくと高鳴り続ける心臓。これまで欲しいものを力ずくで手に入れてきた彼。ばつ、と奪つちまえばいい……だが、なかなか身体が言うことを聞いてくれないのである。

（くっ……らしくねえ、らしくねえぞワイルド! 事を遂行しろ!）

この時の彼は本当にらしくなかった。まるで思春期の少年のような心持ち……目を閉じ、遂に彼はサロメへと突っ込み……

バキイイイイイツ!

間髪入れずの一撃が、ワイルドを捉えた。

「ぎゃああああああああああああああああああああ！」

(おっ、俺様も、ヤキが、まわった……な)

ワイルドは吹き飛ばされ、壁に張り付いた。

「あ、あとは任せた……」

ワイルドは気を失った。

サロメは やるきまんまんに ファイティングポーズをとって
いる

「グふふははははっ、ようやくっ、俺の出番だなああ！」

ダンガルが前に出た。

第八十八姫 サロメ VS ダンガル

「グおおあああ！」

「……………!?!」

バキィッ!

ダンガルの拳と、サロメの拳が正面からぶつかり合う。互いに押しているつもりが、僅かに後退してしまっていた。

「グふふははは、なあんだそれはああ！」

ぐくつ……………

次第に、サロメが後退ってゆく。

「!?!?!」

「ふんハアアアア！」

気合一闪、サロメの小さな身体は遂に跳ね飛び、ビルの外壁へと衝突、ぽっかりサロメ型の穴が開いた。

「……………姫様に力で勝るだと……………あいつは一体？」

「ぐふっ……半魔族ってヤツさ、騎士さん。見て分からねえか、ニルベールリング首都ってのは大層平和なんだな」

「サあロメえ！ お前の力はこんなもんじゃなかったああ、さつさと元に戻れえ！」

ばっ！ とサロメは すなぼこりの なかから とびだした

「っ！！」

ドッ！

サロメの一撃は彼の脇腹を穿つ。ハンマーで殴り付けたかのような鈍い音が、衝撃が走った。

「がっ、グ、ふふふ効かんなああ！」

両手を組み、鎚の様に振り下ろす。その一撃はあろうことかサロメの頭部を叩き、彼女を道端へと叩きつけた。さらに蹴り。建物を幾つも巻き込んで、サロメは彼方へと飛んでゆく。

ダンガルは更なる追撃の為、地を蹴り跳躍、サロメを追い掛けた。

「姫様っ！ あいつはやり過ぎだ、あのままでは姫様が……」

「安心するがよい。奴はあんな程度で死にはしない、何せ覚醒中だしな」

アトモスは言った。

「……あのよ、お宅はどちら様？」

「ただの通りすがりの魔法使いだ」

「シンノ バードードウ デアラセラレル コノオカタハ」

ゲエンバアの言語は、魔王以外に通じなかった。

宙舞うサロメに、下方よりダンガルが砲弾が如く突っ込んで来た。

「……！」

ブンッ！

サロメの いちげきを ダンガルは かわした

「ぬうううりゃああああ！」

一撃。今度は重力落下速度を超え、隕石の様に地上へと落下、倉庫を真っ二つに引き裂いて彼女は派手に墜落衝突する。

「グふあ、グふあ……どうおおしたああ！ あの頃のイカしたサ

ロメはどこにいったああ、俺がダイエットしてまで気に入られようとしていたサロメはあ!？」

手近な建物を足場にして、彼もまた、元倉庫へと飛び込んだ。ずうん、と着地。巻き上がる塵埃の中、目を凝らせば、彼女が立っていた。

「うっ、あ……」

彼女は口をきいた。

「っ、あっ、いつ、ああ、あああああああああああああ！」

言葉を発せようとし、言葉の羅列に掻き消される。が、明らかにこれまでとは様子が違っていた。

「んな、みんなああああすぎいつ、えあっ、えらべるっ、えらべない、みんなわたしをみでえ、わらし、わたっ、ちゃんとみでえええええ！」

「なんだあ……何を言っているっ？」

次の瞬間だった。サロメが消えた……否、移動した、目に映らない速度で。既にダンガルを射程圏内に捕えていた。

「なあ……?」

バゴオオオオツ!!

「……何の音だ？」

ラオドラの耳に、だん、だん、と何度も音が響く。音源は一気にこちらへ近づいて来た。

「クル……ニゲロ！」

全員がその場より動いた時、眼前の建物が破壊し巨漢の男ダンガルが背中から飛び出した。そのままメンバー背後の壁に衝突し、めり込んでようやく停止した。

「グうつ……」

ダンガルは幾つの壁を突き破って来たのだろうか……遙か遠方にビルが一つ、また一つと倒壊してしまっている。

「あ、あと……少し痩せて、たらなあ……死んでい……た……」

ダンガルは気を失った。

「なんとという事だ……」

そして皆の前にサロメが現れた。彼女は、泣いていた、涙を流していた。頬を伝いフェースラインを添って、ぽたぽたと落ちていた。それでも表情というものはなかった。どこまでも興味を失った様な無表情。

「ワタシガ ユク」

圧倒的な化物にも怯まず、ゲエンバアは前に出た。

第八十九姫 サロメ VS ゲエンバア

「……………」

ゲエンバアは無言のまま、爆走するサロメの正面に立った。

「……………！」

サロメは ウォーターブロックを しようした

バカッ！

「……………」

攻撃は確かにゲエンバアに命中した。が、彼は一步も動く事なく、その場に立ったままである。

「……………バードードウよ、あなたは私達の集落を救い、人々を救って下さった。争う事の虚しさ、奪い合う事の虚しさを我々に教えて頂いた」

「……………」

サロメは うごきをとめた

「ナニヲ イツテイルノカハシランガ ヒメサマノ ウゴキガ

トマツタゾ」

「コトバハ ケンヨリツヨシ ……アノオトコ サロメサマノ
ココロニ チヨクセツ カタリカケルキダ」

「ゲンゴノチガイナド ササイナコト デシカナイ ココロトモ
ナエバ ムシロ コトバナドフヨウ！」

「かく言う私も間違いを幾つも重ねた。相手を何度倒し、何人を
死なせたかは分からない……だが、あなたも間違えてみせたのだ。
間違いを認めてみせたのだ」

「……………」

「神とて間違える、絶対ではない。それは我々を一步前に進めた。
神を信じ盲目的に祈り御心に背かず生きるのは、実に容易い事だ。
他人の敷いたレールを歩めば良いからだ。だが、自分の中の神に従
い生きるのは困難である、何故ならレールを自ら敷き、安全かどう
かも分からぬ道を行かねばならないからだ」

「……………」

「そして、自分の中の神が間違っていた時、それに気付かせてく
れるのは仲間である……バードドウよ、あなたは今、間違えつつ
ある。それを正すのは私達……」

“ 仲間の仕事だ！”

言葉は不要、誰かがそう言った。ゲエンバアはサロメの精神へと
潜り込んだのだ。

「……バードドゥ」

サロメは せまくてくらい へやのなかに いた

ひとりきりでゆかにすわって にんぎょうあいてに ひとりごと
を つぶやいていた

“ おうじさま おうじさま わたしを およめさんに してくれ
ますか？”

“……”

“ うれしい ありがとう これわたしも おひめさま”

“……”

“ おうじさま わたしと おでかけしましょ”

“……”

“ おうじさま わたしと おかいものに いきましょ”

“……”

「バードドゥ、それは人形だ。確かにそれはお前を裏切る事はない、傷付ける事もない、だがそれに意思はない。結局あなたは自分同士で会話をしているのだ」

“おうじさま きょうのわたしは どうかしら きれいでしょ”

「目を覚ませ、バードドゥ！」

ゲンバアは人形を取り上げた。

“！？ 返して！ 王子様を、私の王子様を返しなさい！”

「現実を生きろ、バードドゥ！ それはあなただけしか居ない世界だ、己を腐らせてはならない！」

“返してええええ！”

ドオオオオン！

「グッ……マダ タリナイノカ」

ゲンバアは膝をついた。なにがあつたのか、当人ら以外には分からぬものの、あの様子では押し負けたらしい。

「と、なると……」

全員の視線は一人に注がれた。

「……わ、我か？」

アトモスは思わずそう言った。

第九十姫 サロメ VS 恐怖の大王？

「我もやらねばならんのか……？」

気付いた時、アトモスは既にサロメと対峙していた。相手は息を荒げ、肩を上下させている。

「むっ？」

息を荒げて？ しかもよくよくみれば表情が現れていた。ただし、こちらを何年かかっても呪い殺すみたいな顔だが。

「ほお、キサマ………どうした？ まるで仇を見る様な目付きだが」

「………！？」

サロメは アトモスに なぐりかかった

「やむを得ん、行くぞオオオオツ！」

アトモスも負けじと飛び出す。二人が後僅かで接触する、そんなとき、空が瞬いた。

「！！！？」

「なっ！？」

全身をビリビリと衝撃が走り抜ける。至近距離で爆発でもあった

かのような。二人は本能的に後退し、その直撃を避けた。

天を覆う暗雲、分厚い雲が再び瞬く。あたかも神の怒りの様な光景。

“アトモスキゅん、ダメって言ったじゃん。後は私がやるから下がってなさいな”

「なにっ！？ キサマ何を言っ……」

「アレハ ナンダ!？」

ゲエンバアが声をあげた。指をさしていなかったら誰にも伝わっていなかったであろう。皆は空を見上げた。

「あれは一体……」

雲を割り、一筋の光が差し込む。この地方でライト・ロードとも呼ばれる光の道に沿い、何かがゆっくりと降りてくる。

「まさか……神様ってんじゃないだろうな？」

事実、この光景は神の降臨とも考えられた。次第に光の中を下る者の輪郭が明らかとなってゆく。視力のずば抜けるゲエンバアは真っ先に声をあげた。

「イクサオトメ……マルデヴァルキリー デハナイカ！」

と。鎧纏う乙女、確かに。髪をたなびかせ、神聖なる登場もようやく終わる。音もなくそれは着地した。

「キサマ……いやムテキさん、干渉しないのではなかったのか？」

「やっぱりダメね、我慢出来なかったのうずうず」

「……ハア」

「……アン……ジェリ……」

「ん？」

サロメは くちをきいた

「アンジェリイイイイ……!!」

サロメは ムテキを かんぜんなてきとして とらえている

「そつ、そうか、第一皇女アンジェリ様とこの方の髪の色が同じだ！」

ラオドが言う。アンジェリの髪は金色の絹糸とも揶揄される。それは、ムテキさんの髪にも当て嵌まっているのだ。

「成る程、サロメ様はあの腹黒姉ちゃんに散々タイジメられてたそうだしな。過剰反応しても不思議じゃねえ」

ワイルドは、どこからともなく仕入れた情報を明かした。

「失礼ねっ、私をあんなラスボス悪女と混同するなんて！ ま、いいわ、アトモスキゅん、これから私もホンキ出すからタイミング良く助けてね」

「おっ、おい、だから何を……」

「無敵力っ、解放！ 過去の私よ、出でませい！」

光が集う。その光は一本の柱となり空を貫く。粒子は時をさかのぼり、次元を越えて遂に一人を捉えた。やがて柱は一つの型を形成する。その姿、正に……。

「……なにいいい！？」

ムテキさんとサロメの間に、それは立っていた。

「……………」

むてきゆうしやが あらわれた

第九十一姫 サロメ VS 全盛期無敵勇者

「……………」

むてきゆうしゅの こっげき

ザシユッ！

サロメに 3648のダメージ

「……………」

サロメの こっげき

バキッ！

むてきゆうしゅに 3337のダメージ

バツ メキッ ゴシヤ パキッ ガツガツ ダスダスダス ゲシ
ゲシゲシゲシゲシゲシゲシ パアン ヒユッ パシッ ドオン ピ
シッ

「……………なんといい戦いだ……………互いに何をしているのかさえ、よく
分からないとは」

「無敵力、か……」

「魔法使いさんよ、さっきからそればかりだが、一体どんな力なんだよ」

「ああ、それ私が説明するわよ」

ムテキさんが、緊張感の欠片もなく言った。それ以前にあんたは何者なのか、とその場の全員が思ったが、口には出さなかった。

「無敵力は、まあ、分かりやすく言うと過程を省略して結果だけを相手に突き付ける、いわば最強の能力ね」

以下、ムテキさんによるありがたい解説。

例えば“私は相手に殴り掛かった”とする。

すると当然相手は対処を行うよね？ 回避したりガードしたり、あるいはカウンターを狙ったり。

ところが無敵力ってのは、“殴り掛かった”とかの過程を省略して、いきなり“バキィッ”とかの殴った結果を相手に叩きつけるの。

すると相手は対処なんてとても出来ない。悲鳴をあげる事しか、ね。

先制攻撃による対処不能な一撃必殺……これが無敵力と違ってくれればいいわ。

「なんと……それが発動しては、どうやっても勝てないので……」

「うん、そ。いくら強くても実力があってもこればかりはどーしょーもない訳。だから、無敵力を持つ者に対抗出来るのは……」

「同じ力を持つものだけ、という訳か」

「いや、別に不意打ちでもして首チョンパしちゃえば勝てるけど？」

絶対それはダメ！ と皆が思っていた。

「アンジェリ、アンジェリイイイイイ！」

サロメは あねのなまえをさけび むてきゆうしゃを こっげきする

「……………！」

ザカッ！

「あがっ……………」

サロメは ふきとんだ むてきゆうしゃは ひとつとびし ふきとびサロメの はいごに まわりこむ

「えっ！？ そんな……」

サロメはむてきゆうしやに しょうりした

第九十二姫 サロメ VS アトモス

むてきゆうしやは はいぼくした

「あつ……あははっ、負けちゃった……アトモスキゅん、あとよろ〜」

「行くなと言ったり行けと言ったり……で、我は奴を黙らせればよいのか？」

「うん、時間稼いで、引き付けて。そうしたら奇襲して首チョンパするから」

「ダメエエエエ！」

声を荒げる騎士と山賊。それは自分達的にも、結末としても完全NGだ。

「冗談よ。ま、アトモスキゅん相手なら、無敵力もそうそう発動しないでしょ。彼女はカッコいい異性相手だと雑念混じって本気出せな……」

ガスッ！！

「ぎゃあああああああああああああああああああ！」

「アンジェリイイイイイ！」

ムテキさんは空の彼方へと消えていった。消えたそこがキラッ、と輝いたのは言うまでもない。

「フーツ、フーツ……………」

猫の様に髪の毛まで逆立て呼吸荒く怒りを示していたサロメ。が、対象の不在に元通りの無表情へと早変わりした。

「…………馬鹿も消えたし、仕方あるまい。おい、小娘！」

バキィッ！

サロメの こうげき

「ぐあっ…………いきなり来るとは、おのれキサマア！」

ドゴッー！

「ぐっ、ぬぬぬぬ許さん、許さんぞ我の本気を見せて……………」

「おっと待ちな、アトモスとやら。どうやらお前さんは女性の扱
いってもんを知らないらしい。だから攻撃されんだよ！」

「なにいい！？ では我にどうしろと言っのだ山賊！」

「名前で呼んでやればいいのさ。小娘だのキサマだのと呼ばれて
喜ぶ年頃の娘がどこにいる？ ものは試しに、サロメって呼んでや
りな」

「……………サロメ」

ピタッ。

(……こんなのでいいのか……)

スッ……。

サロメは えんりよがちに てをさしだしてきた

「……おい、これは？」

「分かんたろ、手を繋いでやるんだよ。多分……」

「……チッ」

アトモスはサロメの手を握った。

ピシヤッ！

「ぬあああつ！ 違うみたいだぞ！？」

「そうか、姫様はシチュエーションに煩いお方だ。アトモス殿、
姫様が遠慮がちに手を差し出したのだ、きつと初々しい状況なのだ
ろっ、お前も照れたりしながら手を、そつと握ってみてはどうか！
？」

「……いやあ、照れるなあ、サロメと手を繋ぐだなんて……」

興味ないありがたい教典を朗読するかの様な調子で、アトモスは
あくまでそつと、手を握った。

ピタッ。

「やはり、アトモス殿、細部まで気を遣わなければならない様です」

「めんどくさいわあ！ というより力ずくの方が早いのではないのか!？」

メキッ！

「ああっ、ほら、ダメですアトモス殿、しつかり演じて！ もしかしたらそれで姫様も元通りになるかもしれないのですから」

「やかましいっ、そんなの知らんわあ！」

「魔法使いさんよ、次はシヨッピングにでも出掛けてやれ！ 大丈夫、俺に従ってくればいい」

「……シヨッピングするか？ 小ムス……」

バキィッ！

「小娘はNGだろうが！ ほら、ちゃんとサロメ様を引っ張ってくんだよ！ 多分彼女は、少々強引な男に弱いんだ」

「……サロメ、シヨッピングにいくぞ」

ピタッ。

「よし、その調子だ！ さあ、次は店だ、店にいくぞ！」

「……………ハア……………何故我がこんな事を……………」

バキィッ！

こうして スリルとサスペンスときょうふの デエトは はじま
ったのです

サロメと アトモスは かいものに でかけた

「で？ どうすればいいのだめんどくさい」

さり気なく文句を混ぜる元魔王。独立した言葉で毒を吐こうものなら、すかさず攻撃が飛んでくる。

「ふうむ、私はよく知らないが、女性といえはまずはお召し物関係ではないか？」

「馬鹿め、サロメ様はなあ、既に服なんかは思う存分買ってたんだよ！ あれはよかったぜ、最高のオカ……」

「まるで常時監視している様な言い分だな、山賊」

「おっと、それは置いとこうぜ。で、だ、女と言やあ光モノが好きなのさ、例外なくな」

「ほう？ つまりあめんどくさいはやくいえ」

「ズバリ、ジュエリーショップだ！」

「じゅ、じゅえりー？ なんだそれは」

「宝石ってことさ！ まずはそこからだ」

以下、駆け足。

「ほ、ほらごらんコムス……サロメ、きれいな石だろう」

ゲシッ！

「ああっ、畜生！ こんな時に限ってアンジェリデザインの豪華
絢爛なネックレスが！」

「次だ山賊、ここはアウトだ！」

「ええい！ ならば公園だ、公園のベンチで二人きりになって、
そういう雰囲気を持っていけ！」

「早くもネタ尽きてないか！？ さっきまでショッピングあんな
に推してたのに」

「やかましい！ 俺様だってミナアラに来た事が無いんじゃない、
現地のデートスポットなんぞ知るかああ！」

「と、ともかく公園のベンチだな！？」

サロメは ひとり ベンチに すわっている

するとそこにアトモスが駆けて来た。

「ほら、コムス……サロメ、このなんだか白くて冷たいとぐるを巻いたものでも一緒に食べよう」

「それはソフトクリームっつーんだよ！」

だが、サロメはいまのところソフトクリームを食い入る様に見つめ、戸惑いながらも一口、また一口と舐めている。

するとどうだ、サロメの表情に微かだが笑みが浮かんだ。

「よし、これはいい兆しだ」

ところが、である。恐らくはまだ生意気言いたい年頃なのだろう、空気読めない年頃なのだろう、子供が二人現れてベンチの方へと走っていく。

「うわぁー鎧だ、カッコいい。これ何てコスプレ？」

空気が凍てつくのを、一同は感じた。

「ねえねえ、お姉ちゃん、この剣も本物？」

「こっちのオジサンは時代遅れの魔法使いみたいな格好してるよ」

バゴッ！

すかさず飛ぶ鉄拳。何故かアトモスが食らった。

「ぐふっ……ぼ、僕たち、ちょっといいかな……」

アトモスはゆっくりと子供らに顔を近付けた。

“小僧共オ、とつとと去れ……我がヒトで居られる内になああ”

「うえええーん、怖いよー！！」

子供らは逃げ出した。

「よし、これで……」

バキィイツ！！

サロメの こっげき

「ぐうああああああああ、何故だっ！？」

「たっ、多分、子供達を泣かせるなんてひどい、という事ではな
かるっか」

「どうしると言っのだああああ！」

デエトはその後も当分続けられた。デエトって何？ 一人の願いを叶える為にもう一人がぼこぼこにされる儀式だっけ？ 皆がそう錯覚する程に、アトモスは殴られ続けた。

それでもデエトを続けたられたのは究極の愛？ 否、元魔王のプライドと根性と頑丈さであろう。

事実、彼は奥歯が砕けかける程食い縛り、怒りを人知を超えた深呼吸で押さえた。ここまでの強さが、彼を魔王まで押し上げたのだ！

魔の遊園地を攻略し、死の川辺を這いずって、ダンガル穴の開くゴーストレストランでは、ラオドとワイルド、ゲエンバアまでもが料理を作り振る舞った。

こつした血が滲むどころかピューと吹き出し、池を作るまでの努力を重ねた結果、ついに陽は傾き、デエトはクライマックスへと差し掛かった。

現状、夜景の綺麗なレストラン(無論、サロメが暴れた後のゴーストレストラン)において、オシャレにお酒などを飲み交わし、談笑の真つ最中。

アトモスはある種の悟りを開きそうな、限りなく無に近い状態で語る。

「今日は、怒ウだっ他？ 楽しし、刈ったかNA？」

魔王でなければ何千回致命傷を負ったことだろう。それでも彼はサロメの理想のヒトを演じ続ける。

「……………！」

サロメは咲き誇るお花畑の様に微笑んだ。これが嘘偽り無きデートだったなら、これだけで一日の苦勞も報われたろう。だが、これはデイト。

上手く演じられなければ鉄拳制裁の飛ぶ、アドバイザー同伴のあゝる意味最もハードたるミスの許されぬ演技。

サロメの笑顔なんぞ、はっきり言って何の効果もなしだ。

「喪力、逸れ破ヨガったよ。 齒刃派羽覇端……………」

まるで文字化けしたメールの様に、アトモスは言った。

「おお…………山賊よ、見ているか？ 姫様のあの笑顔を…………美しい、な。 姫様は……………」

ラオドは、ワイルドの遺影を片手に眠りについた。

志し半ばで散っていったワイルド。遺影の中の彼は、微笑んでいた。

「バードードウ　ワタシハ　イカニジブンガ　ムリヨクカラ　シ

リマシタ……」

ゲエンバアは、その場に（極度の疲労により）倒れ込んだ。

フィナーレ。

ここは特別な場所だった。

ただの一つの岡の上。

が、しかし。眼下の景色を見るがいい。街の灯りはささやかに、
されど暗黒の空にちりばめられた星々の様に輝いている。

きらりきらりと、ダイヤだろうが宝石だろうが霞んで見える程の
光景。自然の作り出した美とは違う……紛れもなく人々が作りあげ
た極上の景色だった。

「……………」

サロメは、こちらを向いて、何かを言うと笑みを浮かべた。幻想
的、というのだろうか、この時の彼女は夜空舞う妖精にも見えた。

時と場所とシチュエーション……それを付加した結果の彼女は、
多分美しい。あの形ばかりの第一皇女よりも遙かにだ。

「……………」

サロメはゆっくりと、思い返す様に、語り続ける。時に空を見上げ、時に瞳を閉じ、時に身振り手振りをつけて、静かに。

もはやアトモスの意識は遠ざかりつつあったが、彼は見ていた。最後までは見えてやろう、と。

「……………」ありがとう

「……………」ああ……………」

一度、頬を風が撫でた。

自然、互いの距離は縮まってゆく。

もう、目の前には互いしか居ない。

彼の顔はぼこぼこに腫れていたが、それでも彼は気力を振り絞り、笑みを浮かべた。

サロメは、そっと目を閉じた。

アトモスも、そっと目を閉じた。

「……………」

「……………」

第九十五姫 サロメ VS アンジェリ？

「……………」

ニルベールリング王、アンジェリは星空を眺めていた。

（何故、なのかしら……どうして上手くいかないの？ あの無能な父ですら治められていた国なのに、どうして……）

だが想像して欲しい、いくら国民に人気があったとしても、アイドルに統率者がつとまろうか？ 答えは否である。

前ニルベールリング王は、二万からなる兵士らを統率し、共に他国との戦争を幾度も経験した。命懸けの状況も二度三度どころでなく味わっている。

今でこそ大国であるニルベールリングであるが、彼の即位した直後は決して豊かではなかった。そこから国を成長させていった並々ならぬ努力と決意、それは豊かさの中で育った現在の王に分かるはずもない。

（国民は私に王を求めていたのではないの？ どうして騎士達は私に従わないの!?!）

日が経つにつれ、騎士らはアンジェリから離れていった。間近でみる王は、ただ傲慢であり、苦勞知らずのお嬢様……合つはずなどないのだ。

「王……探しましたぞ」

扉がゆっくりと開き、一人の男が姿を現す。

「ラーズ……何か？」

アンジェリーの腹心、第七騎士団長、ラーズ。現在は筆頭騎士扱
いの男である。

「いえね、ニルベリング王……いや、アンジェリ様、どうにも
旗色がお悪いようで……」

「何を言うのかしら？ 王を批判するとても……」

「王？ あなたが王と？ ただの客寄せパンダが何を仰る」

「ラーズ……？」

「あなた方一族には感謝しておりますよ。こんな私を、敗戦国出
身である私を騎士に、あまつさえ筆頭騎士にまで取り上げて頂いて
……私はね、前ニルベリング王に対する感情を忘れた日などござ
いませんでした」

「あなた、さっきから何を言って……」

「あなたはもう、用済みという事ですよ！」

ラーズは剣を抜いた。

「……うーん……あれ？ 私は一体何を？」

サロメはベッドから、ゆっくり身体を起こした。

ここはどこだろう、そう思いかけて止めた。覚えている、ここは、あの忌まわしいネフィリム城のサロメの個室だったのだ。

「ホホホホッ、サロメ、あなたは どうしてそんなにダメなのかしら？ 父上のご慈愛で住まわせて貰っている立場なら、もっと役に立つたらどうなの？」

「……！！ 姉……様……？」

アンジェリが現れた。

第九十六姫 無敵P VS ムテキP

アンジェリが現れた。

「ちよっ……まさか、本物の……？」

サロメは姉にずい、と近づき、顔面をはたいた。

「何をするかサロメの分際でええええ！ 私の顔に傷がついたらどうするのよ、そんな出来の悪い愚妹にはお仕置きが必要だわ！！」

アンジェリは、針状の剣を抜いた。レイピアである。

「死ぬがいいいい！」

アンジェリは鬼が如き形相でステップを踏んだ。フェンシングにも似た歩調、右に追従し、左足、そして右。

が、所詮は嗜み程度の剣術であった。サロメは先端を確実に回避し、姉の顔面に再び蹴り、よろめいた所を更に一撃、一撃。

姉をボコボコにし、誇らし気に立つサロメ。どんな時よりスカッとしたに違いないだろう。

「所詮、外見だけのお飾り皇女よ！ 今の私に挑んだのが運の尽き、正当防衛じゃーい！」

「いい気になるんじゃないわよ、芋娘の分際で」

う。天上天下唯我独尊な人だし。

に、してもだ。例え偽物の類いでも気分は……そう、暗い室内で害虫踏み潰したよりも悪い。一丁、蹴散らしてやるかとも思った時だった。

「姉様、どうしたの？」

「えっ……？」

一瞬、鏡でも現れたのかと思った。いいや鏡じゃない、私は直立不動だ。なのに、あちらの私は歩いている。

奇妙な事だが、私と私は向き合っていた。肩まではいかない墨の滲んだ様な髪の毛、浅黒い肌、凹凸の目立たない体つき、悪い目付き、薄い唇、やせ気味……外見的特徴はそのままのサロメ。

だが、決定的違いが一つ。鎧姿の彼女に対し、あちらの彼女はドレス姿だった。髪や肌色に合わせたのか、暗黒色のドレスを纏う。頭の金色のティアアラが浮き上がって見えた。

「あらまあ、これはこれはあちらの私。外側の私、飾りの私、おはよう。元気だったかしら？」

そつと微笑み、彼女は言った。

「……ならあなたはこちらの私？ 内側の私？ 本質の私？ はじめまして、訳分らないけど」

睨み付けながら、彼女は言った。

「見て分からない？ 本質じゃない。王の私、アンジェリをこき使う私、そして、最強の私！」

彼女が両手を広げれば、アンジェリファイブは跪く。

「目覚めてすぐで悪いんだけど、また寝てて。あんたが起きてたら思う様に力が使えないから」

「力？ 何を……」

「さあ働きなさいアンジェリファイブ、馬車馬の如く！」

「キエエエエエ！」

「シャアアアア！」

「グピイヤヤヤ！」

アンジェリらはモンスターの様な奇声をあげてサロメに襲い掛かる。

「くっ、気持ち悪いのよアンジェリイイイ！」

サロメは躊躇せず、拳を振り抜い……。

「ちっ、余計な！」

キングサロメは逃げ出した。

「さ、サロメ様、ここは、俺達に任せて……あいつを追え……」

「でも、みんな立ってるのもやっとな……」

「いいから、いけよ、いい、だいえつとに、なるからなああ」

「う、うん分かったわ……」

サロメはキングサロメを追い掛けていった。

第九十七姫 サロメ VS サロメ 1

二人のサロメは広い部屋に辿り着いた。いや、ここは記憶に新しいネフィリム城、王の間である。

「お帰りなさい、弱虫サロメ……あなたにはちよっぴり懐かしいんじゃない？」

「そうね。帰るつもりはまるで無かったけど」

「それじゃあ、困るのよね」

「っっ、っっ……」。

キングサロメはサロメに背中を向け、一段、また一段と階段を上がってゆく。

「私は素敵な第二皇女、なりたくても誰にもなれない、私だけのもの」

「っっ……」。

玉座の手前で足を止め、こちらに向き直るキング。

「皇女でいいのかしら？ よくないよね、私こそが一番になるべきなのよ。王様、いや女王様に」

どかつ、と玉座に腰掛ける彼女。ご丁寧に足組みまでしてる。それにしても、セクシーさの欠片も感じられないのは鏡映してもガツクシくる。

「……なんで？ 別にいいじゃん、ニルベールリング一族に任せとけば」

「は？ あんた……ホントに私？」

「……あんたこそ。第一なんで王なんかになりたいのよ？」

自分にその資格も覚悟もないのは分かっている。毎日毎日、お父上様は難しいお話しばかりしてたし、多分私が王をやったら三日でクーデターだろう。

「何でか？ それは決まってるじゃない、力よ。私の無敵力に、権力、財力に兵力が加われば欲しいものは何でも手に入るわ」

「ハッ、とんだお笑い草だね。それじゃあ手に入らないものが入らなだけ、ああある！」

サロメは、彼女をビシツと指差し言った。表情は爛々と輝いている。

「……それは何かしら？」

「それはっ、人の気持ちよ！ 特に相手を好きだという気持ち、そればかりはどうやっても、権力でも財力でも兵力でもっ、ついでに無敵力でも手に入らないのよ！」

「ふうん……でも王様になったらハーレム作れるよね」

「……えっ？」

揺らいだ。

「お金目当てでも、イケメン寄って来るよね？ ついでに王様の命令は絶対だから……ねえ？」

「な、なんと……」

脚一本失ったテーブル位、ぐらぐら揺らいだ。

「ハッ!? そ、そんなのはダメ! ちゃんと互いに気持ちを確
認し合って少しずつ……」

「ぬるいわあ! 甘つちよろくて反吐が出る! 恋? 恋愛?
好き!? そんな不確定で目に見えないものが信用に値するのかし
ら!? 人の心は分からない、見えないし感じられない、信じても
裏切られて傷付くだけじゃないのかしらね!? 丁度この間のあな
たみたいに!」

「!?!?」

そうだった……サロメはついこの間、一人の男を信じ裏切られた
のだ。本当に間近に実例があった。あの時の痛みは……。

「だから権力を振るい人々を操る、財力を操り人々を虜にする、
兵力を振るい人々を服従させる! 目に見える分かりやすい形だ、

そつでしよつっ？」

「……違つよ」

それはつい、口を離れた。反発したかったのかもしれない、聞き
たくなかったただけなのかもしれない。

「違う？ 何が？」

それでも言葉は止まるどころかだだ漏れていった。

「ちがあああう！ 何だか知らないけど、それは違う！」

サロメは、鎮座する彼女に向け飛び出した。

第九十八姫 サロメ VS サロメ 2

「はあああああああああ！」

サロメの攻撃。

「ふん、単純っ！」

バシッ！

キングサロメは拳を受け止めた。

「むつかしー話や正論は苦手かしら？ まるで子供のよう……ま、確かに暴力は……」

キングサロメの攻撃。

バキッ！

「効率いいけど、ね！」

サロメの身体はいとも簡単に吹き飛ばす。どうにか着地したのも束の間、既に敵は空中からサロメを見下ろしていた。

「遅いね」

キングサロメはフレアキャノンを使用した

ガード、サロメに31のダメージ

「ちっ……」

地煙を掻き分け、キングは現れる。

「無力」

ドカツ！

「非力」

メキヤツ！

「そして、無駄！」

ゴツ！

「がっ……」

サロメに 1 1 4 3のダメージ

「それが、あなた」

コッ……

「だけど、わたし」

コッ コッ……

「だから、わたしが」

「ア、ア、ア、ア……」

「ア、ア、ア、ア……」

第九十九姫 サロメ VS サロメ 3

「わたしは、だれか？」

「……………」

「わたしこそ、王。わたしこそ、世界。わたしこそ、全て」

「……………」

「争う必要も、拒む理由も無かるうに。それは自己逃避、それは自己否定……………ヒトなら、当然の感情でしょう？ 強者でありたい、有名でありたい、気にされたい、好かれない、綺麗でありたい……………素直でいて何が悪いの？」

「……………げホツ、別に、いいじゃない、我慢するよりよっぽど。それこそ好きに。だけど……………それを私でやるなんての！」

サロメは立ち上がった。

キングは目を細めた。

「ただどあなたと私は表裏一体、要はどちらに優先権があるか。あなたがおとなしくしてれば解決なのにね」

「……………私は私のしたいようにするわ。あなたもわたしだろっけど、あんたはぶつちやけ、キャラじゃない！」

「キャラじゃない……………？ 意味不明ね」

「言ってる本人もね！」

サロメの攻撃。

キングの攻撃。

ガッ！

サロメに 35のダメージ

キングは ダメージをうけない

「はあああつー！」

キングの攻撃！

サロメに 67のダメージ

「口ばかりね、こんなもの？」

ぱきっ……

キングの ティアラが 砕けた

「え………？」

「わたし、結構、やるでしょう？」

サロメはそう言った。

第百姫 サロメ VS サロメ 4

「どう？ 私も結構やるでしょう？」

サロメは、砕けたタイヤラを見下ろし、言った。

「ふうん……そう、ムカつくわね！」

キングサロメは、サロメを睨み付け言った。

「ようやく本気？ それとも冠だけで精一杯？ どちらにしても強がりには止めてちょうだい。これで、あなたを痛めつける理由が増えたわ」

「わたし、エンジンのかかりが遅いのよね」

サロメは 無敵力を 開放した

「私は早いわ」

キングは 無敵力を 開放した

ザッ

バキッ！ バキッ！

「つりゃああー!!」

ドカッ！

「ちゅ……」

ドゴッ！

ヒュッ、バカッ！

グッ……ビシィッ！

「おそい おそいわ！ いらなことばかり かんがえてるからおそいのよ！」

「いらなことって なによ！」

ヒュン ガッ！

「あなたは みにくいわ あっちこっちに ぶれてゆらいで あしばが まるでたよりない りゅっぼく みたいね」

メキヤッ！

「そういう あんたは どうなのよ！ まるで じんせい っぽんみち みたいにいつちやって！」

ガンッ！

「わたしは じゅんすいに ちからがほしい ただそれだけ ち

からがあれば だれもさからわない だれもわたしを ひていしない
それがわたしの まっすぐ!」

ゴキイツ!

「おくびょうなのね」

ガキイツ!

「なにが!？」

「あなたは じぶんのおもつがままの せかいしか えがいていない
ひていされるのが そんなにこわいの!？」

「ちからをえた わたしに こわいものなんて ない!」

キングサロメは こぶしをふりかぶった

(!?!? 無敵力が、発動しない!?)

(……………!?!?)

バキィィィイツ!!

「きゃあああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああ!？」

キングサロメは ふきとんだ

第一百一姫 サロメ VS サロメ 5

「きゃあああああああああああああ！？」

キングサロメは ふきとんでいった

バガンっ！！

「がつ……ああ、あああああああ！ ホンツト、本当にムカつくわああ、あんたつてええ！」

「……………」

「なあにがこわいよ！ そうよ、怖い、怖いかもしれない、だから力が欲しいんじゃない、だから力を求めるんじゃない！ 力を手に入れて皆をひれ伏させて何がいけないのよオ！」

「分かってないわね、ひれ伏させたらそれは主人と従者、金持ちと奴隷よ！ 素敵な恋は対等の関係になる事から始まるの」

「またそれか！ 対等だと？ ヒトは生きている限り対等など有り得ない、貴様は三口オとりエジュツトを読むべきだ！」

「読んだわよ何度も！ 読むたび結末が変わって後日談が追加されたわ！」

「傲慢なのはどっちだ！」

「あんたでしょうが！」

キングサロメの こうげき

「だいたい きさま ミロオとリエジュットは ひげきだからこそ あいされるのだ」

「いいえちがうわ ハッピーエンドだったら もっとすかれてた あんなしんきくさいはなし だいきらい！」

「がくのないことだ ハッピーエンドのみを すくとは とんだガキだ！」

(……なんだ……)

「なによっ！ しあわせになっちゃったらダメなの！？ だいた
いおやの いざいざとか バカみたいなのよ！」

「おもいどおりに ならないから あのはなしは おもしろいの
だろうが！」

「……なんだ、やっぱり、あなたはわたしだ」

「なっ……？」

キングサロメは たじろいた

「叶わないから、面白いんでしょう、あなたは。私は叶った方が面白いと思ってた……それこそ、私がお話に入って、二人をハツピ

「エンドにしたい位に。逆だよ、今」

「あつ……」

「あなたなら、そんなものつまらないと断じるはずだった。私なら、それでも二人は恋をした、と断じるはずだった。あなたは、少しだけ力への固執が強いサロメ」

王の間の扉が開け放たれた。すぐに、中に入ってくるのは、沢山のサロメであった。

第三二姫 サロメ VS サロメ 6

バンッ

扉が開き、なだれ込んで来たのは、沢山のサロメであった。

「なっ……なんだ、何だこれは!？」

キングサロメは驚愕した。

「ああ、やっぱり」

サロメは納得した。

「わたしは かなしいときの サロメ」

「わたしは うれしいときの サロメ」

「わたしは カッコいいひとを みたときの サロメ」

「わたしは ねえさまを みたときの サロメ」

「わたしは……」

「わたしは……」

自己紹介は当分続いたと思う。

「どうなっている!? 何故、こんな……」

「わたしは 大体の状態のサロメ あなたは……欲張った時のサロメ っところかしら?」

そう、私は感情の数だけ存在する。喜怒哀楽から瞬間瞬間の気持ちにまで。

「だから、あなたが力を付けていたのは、私が何もかもを欲張っちゃったからか……バランスが崩れてたのね、私」

それが、裏切りを受けた時の感情。余程深い傷が入っていたらしい。

「抑止力、か。一つの感情が暴走して他の感情を忘れそうになつて……だけど、嬉しい事もあったんだね、私」

傷付き、落ち込み、ふさぎ込んで……でも、誰かが元気づけてくれた。誰か? いや、分かっている。

「あなたは、力が欲しかったのよね、裏切りを二度と受けない為に、心を守っていたのよね? けども嬉しい、私達は本来皆で一つだった。さあ、元の鞘におさまりましょう」

「なにを……一人で納得している! 私は私だ、サロメ・ニルベーリングだ、あらゆる力は私のものだ! 私は、お前を否定する!」

キングサロメは地を蹴り飛び出した。

「私は、あなたを受け入れる！ 皆っ！！」

「「「「「応！」「」「」」

サロメ達は地を蹴り飛び出した。

「うあああああああああああ！」

「「「「「うあああああああああああああ！」」「」

「」

多勢に無勢。

キングサロメは百近い数のサロメ達と衝突し、濁流に押し流されるが如く運ばれて、動きを完全に封じられてしまった。

「私は元々一人だからっ！ 彼女の感情は一つだからっ！ だからキング、私に戻れええええ！」

「ぐっああああ、ふざけるなああああ！」

「怒る事も、笑う事も、悲しむ事も、全部ひっくるめてサロメなんだ！ 一つでも欠けたらそれはサロメじゃないの！」

中央のサロメがそう言った。キングは彼女に吸い寄せられ、やがて末端から金色の光へと姿を変えていった。

「い、いやだっ、私はサロメ・ニルベリング、力を得て全てを統治する、無敵の……」

サロメは一つへとかえってゆく。一人へとかえってゆく。遂にキングは彼女へと吸収されていた。

「無敵のキングなのにいいいいいいー！！！！」

声はやがて消える。皆は遂に一つとなった。

そこで、終わった。

「むっ……ううん？」

サロメは目を覚ました。ベッドから起きてみると、周りには五人の男が眠っていた。

ラオド、ワイルド、ダンガル、ゲエンバア、そしてアトモス……サロメは一人一人の名前を呟いた。

「……ありがとう」

彼女は皆が起きぬよう、そっと言った。

第三三姫 サロメ VS 勇者達

「ではサロメ様……私はこれで戻りますから」

ラオドは一步踏み出し、サロメに言った。

「戻るって、牢屋に……？」

「はい。私はもう、筆頭騎士たる資格はありませんし、命に逆らったのは事実です」

「あんな連中の命令なんか無視すればいいのに……」

「腐ってもニルベールリング国の騎士です。申し訳ありません」

「そう……ラオド、あなたの剣術、格好良かったわ」

「光栄の極みです、サロメ様」

ラオドは跪き、サロメの手の甲に口付けすると、その姿を消した。アトモスが魔法で元の場所へと送ったらしい。

「なあ、サロメ様よお……」

続いては山賊頭、ワイルドが口を開く。

「俺様は出来ればあんと一緒に旅した……」

「はいはい、山賊のお頭が何言ってるのよ。早く仲間の所に戻ってあげなさいな。あ、でもあんまり張り切って活動しちゃダメよ?」

「うっ、くっ……あああああ……な、ならよサロメ様、お、俺と記念の口付けを……」

「はいはい、さっさと帰って、でも……」

サロメはゆつくりと、ワイルドの右手に口付けした。ポカンと見下ろすワイルドに、言う。

「あなたのお蔭で助かったわ、ありがとうね」

「あっ……お、おおおっ! マジかよオオ、俺様もう右手は一生洗わな……」

ひゅん

ワイルドはワープの術で帰って行った。

「グふ、ふう……サアロメ……」

満身創痍、所々見える包帯の痛々しいダンガルである。

「えっと、そのう……なんかゴメンなさい……」

「ガ? 何を謝る、俺は全力で戦えて満足だというのに!」

「え、あ、ああ、そうなんだ……助けてくれて、本当にありがとうね」

「なああに、お安い御用だ、今度会ったらまた拳を交えてくれるかああ？」

「……ええ、約束よ」

ダンガルの突き出された拳に、サロメは軽く拳をぶつけた。

「じゃあなあ、サロメ！」

ダンガルは、ワープ光の中に消えていった。

「バードードウ」

「あ、ゲエンバアさん、だったかしら……ありがとございまして」

「イヤ、ドウイタシマシテ。バードードウ、バルバロスハ イツデモアナタヲ カンゲイシテイル。マタ イツカ キテクレ」

「……何言ってるのかよく分からないけど、ゲエンバアさんの言葉ははつきり聞こえたわ。また、いつかバルバロスに行きます」

「デワ ワタシハカエル」

サロメはミナアラ港に辿り着いた。

「ハア……早いところ違う大陸行く。ミナアラは私にはまだ早すぎだわ」

サロメは取り敢えず、行き先を考えた。ニルベールリングは論外として、バルバロスはもう行ったし……となれば、ニルベールリングに次ぐ大国、ダリナタル……ここだ。そこに決めた。

という訳で、彼女がダリナタル行きの船へ搭乗したのだ。

やがて船はゆっくりと発進し港を離れてゆく。彼女はデッキで遠ざかるミナアラを見て溜め息一つ。

「あーあ……結局、皆帰っちゃったのよね……もう少し一緒に居てくれても良かったのに……」

と、呟くサロメ。ミナアラでの出来事は彼女に飛躍的な成長をもたらした事だろう。ただ、思い出が濃すぎて宿に買い物袋を置きっぱなしにしているのどうかと……。

「あー……まあ、のんびり出来ていいわ……たまにはゆっくりしよ」

サロメはデッキに設置されたベンチに、横になった。

「さあアンジェリ様、お選びなさい。ここで死ぬか自害するか、はたまた一生このラーズの傀儡となり果てるかを！」

ラーズは剣先を向け、ニルベールリング王女へと言った。

「別にいいですよ？　ここであなたがお亡くなりになったとしても、王の亡骸には利用価値がありますので。どうするにせよ、あなたはどこまでも私に利用され、ボロ雑巾のようになるのです、悔しいですか？　憎いですか？」

「らああああずうう……」

「おおっ、恐ろしい恐ろしい、まるで悪魔ですな。国民らが今のあなたを見たら何と言うか、さぞかし幻滅する事でしょう」

僅かにリアクションを取ったラーズ。その一瞬、アンジェリは彼にすがりつき、腕をぎちぎちと締め付けた。

「なっ、き、貴様！？」

「お前なぞ、お前なぞ死んでしまえ！！　私はニルベールリング王アンジェリ、お前なぞ、お前なぞオオオオオオ！」

第一百五姫 無敵P VS 船旅 2

(莫迦なあああ、王たるこの私がああ、死いいぬううう!?)

アンジェリは言葉にならぬ叫びを発した。それは国民らの興味と信頼を独り占めし、王にまで上り詰めた魔女の最後として、実に呆気ないものだった。

ラーズが何かを言っている。だが、耳には届かず、ぽつぽつという体液の落ちる音しか聴こえない。

(いつ、痛いいいい! くるっ、苦しいいいいいい! いやよ、こんな、ニルベールリングはわたくしのものなのがいいいいいいい!)

心音が鈍る。目が霞む。忍びよる暗黒は次第にアンジェリを覆ってゆく。

いやだ……。

そればかり叫んだ。

どうして私が……。

そればかり繰り返す。

息も漏れず、アンジェリ王はこと切れた……。

かに見えた。

“オマエの邪念、まことに凄まじきものよ”

（誰！？）

“これはこれはプリンセス……いや、キング、ワタシはただのしがない悪魔、といったところですよ”

（何を！？）

“アナタ、苦しいでしょう、恨めしいでしょう、此れ程の邪念を吐くアナタだ、どうですか？ アナタの魂を私に頂けるのであれば、アナタに全てを差し上げましょう”

アンジェリの邪気に惹かれ、一匹の悪魔が現れたのだ。見たこともない仕立ての服装、杖をつき不敵な笑みを浮かべる悪魔。

（私は助かるの！？）

“アナタと契約が成立したなら”

（いいわ、早く！ 早く私を助けて、早く！）

“承知致しましたよ、キングアンジェリ”

アンジェリは悪魔と契約を交わした。

「ハア、ハツ……てこずらせやがって……だが、これでニルベールリングの一族は途絶えた！ この国ももうおしまいだ、ハーツハツハツハツハツハアア！」

ラーズは声高く勝利宣言をした。後は処理だけだ、その為にも迅速に、等と考えを巡らせていた時である。

「ラーズ、ラーズよ」

「!!!？」

それは女神がそつと呟いた様だった。美しい、歌声を聞いたなら皆が振り向く程の声だ。

「な、ばっ、ばかなっ！ キサマ何故っ!？」

ラーズは声の方へと向いた。血塗れの女神が、直立のまま、重力を無視し身体を起こす。

「ほほっ、ラーズ……わたくしよ、アンジェリ、アンジェリよ」

「ねえ、ラーズ」

「!?!」

気付けば背後に悪魔が居た。一瞬で頭を掴まれて、ラーズの身体が浮き上がる。

「うっ、ががああああああ……」

「ラーズ、あなたはちょっとイタズラが過ぎたわね。でも、わたしは慈愛と美の女神、圧倒的寛大な心で許すわ」

「ぎ、ぎだれがぎさまに、許しを、こ、請うもの、か……」

「優しいわたくし、ああ、少し嫉妬してしまいそう、わたくし自身に」

アンジェリはマインドブラストをしようした。

「ううあああああああああ!?!」

ラーズは、糸の切れた操り人形のように手足を垂れる。床に下ろすと、彼はゆっくり頭を上げた。

「ねえ、ラーズ……わたくしのお願ひ事、聞いて頂けますか?」

「……ハイ 姫様の御心のままに……」

ラーズがしもべとなった。

第七七姫 無敵P VS 謎のカッコいい鎧騎士

サロメはダリナタル港に辿り着いた。

ダリナタルはニルベールリングに次ぐ大国ではあるものの、港からのイメージは一世代前、である。

どこか懐かしい街並みを歩みつつ、サロメは十字路へと差し掛かった。

ガシーン！

と、サロメと何かが出会い頭に衝突した。

金属と金属の触れ合う音、サロメは尻餅ついたが、すぐにかばって頭を起こし、鬼の形相で吠えた。

「ちよつとちよつと、どこ見てんのよ、こらっ！！」

「ああ、すまない！ 大丈夫か？」

（えっ………？）

カッコいい鎧騎士？ が現れた。

「え、あつ………だ、大丈夫ですっ………」

「そうか。ならいい」

鎧騎士？ は颯爽と駆けていった。

「ああっ、お待ちになってえ！　せめて名前だけでもおおー！！
……行っちゃった……」

と、サロメが落ち込んでいると、今度は三人組の男が現れた。彼らはサロメを見るなり言った。

「鎧姿……キサマ、あいつの仲間か!？」

と。その物言いに、サロメはピンと来た。こいつらはきっと悪者で、あのカッコいい人を追い掛けている、と。

「どうなんだ鎧女、答える!」

三人組はサロメに厳しく問う。サロメはニヤリと不敵な笑みを浮かべ、舞台の上に立つ様に言った。

「あなた達……私の（将来の）恋人に何かご用？」
と。

第八八姫 無敵P VS 偶然出会った三人組

「あなた達……私の（将来の）恋人に何かご用？」

と、サロメは三人組に対し言い放った。

先程十字路でぶつかったのが初対面、名前も何も知らず、頭の中に焼き付いた顔付きだけが全てな人物に対しての物言いが、自信満々なこれである。

「なあに？ 恋人、だと……？ あり得んな、キサマの様な小娘が」

「うむ。第一お前、あいつのコスプレか何かか？ 女のクセに鎧なんぞ着て……」

「ともあれ、怪しいな……連行するか？」

三人は口々に好き放題並べ立ててる。様に感じた。

「いや、構うな。どうやらただの馬鹿か、或いは奴の用意した目眩ましかもしれない。関わるな」

「誰が馬鹿よ、誰が！」

サロメの反論。が、彼らは耳も貸さず、鎧騎士らしい人物の逃れた方向へ走り出し……。

第九九姫 無敵P VS 鎧姿の騎士 1

「ふう、ふう、ふう……もう、追って来ない、か」

鎧騎士は、路地裏にて一息ついた。ここは網の目の様に張り巡らされた路地、その内の一つであり、現地の人間ですら迷子になる可能性を常に持つ。

また、辺りには家無き人々が、寝転がったり、はたまた粗末な小屋を自作し住んでいたりする。

騎士はただの一ヶ所を目指していた。それはこの路地迷宮の中央に位置する、古ぼけた教会跡である。

人通りの無いさびれた通路を、カチャカチャと駆け抜け目指すは彼らの待つてるところ。

後ろにこそこそ、スニーキングでストーキングしている者が居るとも知らず。

（んふふー、あっちがあのお方のお家かしら？ 拠点の把握は大切よね）

サロメにとっては戦も同じ。まずは居場所、次にタイミング、そこから名前を聞き出しそれから……。

やがて先行く騎士は、古びた教会に消えていった。何度も周囲をキョロキョロ見回した後にはだ。

(ふうん……ちょっと入ってみようかしら)

サロメは教会の扉に手を掛けて……。

「おい、何してる?」

「!!!?」

背後から声をかけられた。

第一百十姫 無敵P VS 鎧姿の騎士 2

「おい、おまえ何してる?」

背後から声を掛けられたサロメ。

「そのままゆっくりとこちらを向け!」

サロメの知る限り、騎士を訓練する際の叱咤にも似た調子である。彼女は固まったまま、かくかくときこちなく振り向いた。

(えっ!?! 子供……?)

振り向いた彼女が見たもの、それはまだ幼さを残した顔付きの少年であった。彼は腕程の長さの棒切れを持ち、こちらを睨んでいる。

「お前、貴族に雇われた奴か?」

「はっ? 貴族? いや、全然そんなんじゃないんだけど……」

「嘘言つな! そんな怪しい格好した奴がここに居るものか!」
「なんと言えばいいのだろうか? 敵と決め付けているらしい。今にも棒切れで殴り付けてきそうな少年に、サロメも拳を握りしめる。その時だった。」

古びた教会の扉が開け放たれた。

「どうした!?!」

「!？」

鎧姿の騎士が現れた。

「ん？ 君はあの時ぶつかつた……」

「はい、そうですう……」

サロメは既に騎士に見惚れていた。

第百十一姫 無敵P VS 鎧騎士アラン 1

「という訳で、私はあなたの事が気になって着いて来ただけのだの不束者ですがどうぞよろしくお願いします」

サロメは事情を説明すると、早速アピールを開始した。

「ああよろしく、サロメさん」

鎧姿の騎士はさらりと受け流した。

「ところで、あなたのお名前は何と仰るのですか？ 多分私が一番気にしている事です」

「私は名乗る程の者ではない。だが、どうしても呼びたければアランとでも呼んでくれ。本名は明かせないのだ」

「はいい……アラン様ア……因みにここで何をなさってるのですか？」

「ああ、それは……」

アランが発言しようとした時、先程の少年が“アラン兄ちゃん！”と割って入る。

「大丈夫、彼女は貴族側の人間じゃないよ。君はニルベールリングの人かな？」

「は、はい。……でもなんで？」

するとアランは自身の左肩をちよいちよい、と指差し、次いでサロメを指差した。

「ああ！」

サロメは納得した。彼女が身に付けている鎧の肩部には、ニルベールリング国の紋章が刻んであったのだ。

「という事は、君は女性なのに騎士団に入隊しているの？」

「あー……それは、そのう……」

言えない……本当はニルベールリング国の第二皇女で、権利を放棄して適当な鎧を掻つ払い各国を放浪中だなんて……。

「ま、そんな訳はないよね。君みたいな少女が騎士だなんて……それに、本国を離れて遊んでいるなんて……本当に騎士だったとしたらとんだお笑い草だ」

「あはは……ん？」

つい笑ってしまったが、よく聞けば妙にトゲのある発言に、サロメは顔を上げた。

アランの顔付きは、そよ風のようなそれではなくなっていた。荒れ狂う暴風の様に、サロメを見下ろしている。

「いや、申し訳ない。だが、ここでそんな格好は止めておいた方がいい」

発言の意図。それを知らぬサロメは、いくらカッコいい人相手でもムツ、とした。

「……あの、ちょっと言い過ぎじゃないでしょうか？」

「うん？ 自国の騎士を批判されるのは気分悪いか？ だけどね、君の国の騎士団が過去に何をしたか知っているかい？」

そうか、分かった。アランはわざと挑発しているのだ。そうしか思えない。

「……どんなにサイテーな王族の治める国でもね、自分の家を悪く言われていい気持ちな人間はいないわ。アランさん、つまり何が言いたいのか？」

「そうだな……強いて言うなら……」

アランはそういうと、腰に差した剣を掲げ、言った。

「ニルベールリングの騎士と、我が国の貴族は等しく許せない、つて事か！」

「……………」

サロメは言葉なくうなずいた。

「剣を握るのは初めてか？」

アランとサロメは今、教会内で三メートルほどの距離を開け、向かい合っていた。朽ちても尚、荘厳に立つ一体の女神が満ち満ちる殺気に目を覆う。

ひやり、と乾いた大気がゆるると吹き抜けた。サロメは返答の代わりにプリンセスブレードを、鞘より解き放つ。刀身は大袈裟な程に鋭く、白銀に輝いた。

「なるほど……余計か」

アランもまた、剣を抜く。一メートルにも満たない平凡な片手剣ショートソードであつたが、細身の身体と並ぶ光景は一体感溢れている。

ニルベリング筆頭騎士ほどの長身ではない。が、威圧やプレッシャーはびりびりと、自国の騎士に匹敵するほどに感じた。

「……どこまでやるんですか？」

「命には届かせない。私にはその技量がある。もっとも……そちらはどうだ？」

「一、二、三日は、痛いかもよ」

「……上等おお」

何処からか、小気味良い澄んだ音が一度、響く。シュンド銅貨の音だ。この時点でサロメは理解する。ガンマンの様に、地にコインが落ちたときが……。

キーン……

合図だ！

キイイイーン！

銅貨と剣の鳴いたのは同時であった。プリンセスブレードが揺るがないと知るや否や、刃を外し一步後退、体軀を捻り次撃。大気割り、外側より半円描き迫る。

バキイツ！

「！！！！！！？」

アランは大きく仰け反った。どこからともなく、ありえないタイミングでの一撃に。結果だけを突きつけられた様な。

どうにか着地をし、相手を睨む。何をされたのか全く見えはしなかった。

「お終いにして。こんなのは意味ないから！！」

第百十三姫 サロメ VS アラン

「ハッ……！？ あ……？」

アランは意識を取り戻した。

「目が覚めた……アラン？」

少年が言った。

「私は、どうなったのだ……？」

「負けたんだ。僕には全く見えなかったし追えなかったけど、確かに吹き飛ばされて気絶したんだ。あの女、凄く強い」

「そう、か。ではあの女は今何処に？」

「えっと、それは……」

「ん？ どうした」

「その、アランの隣に……」

「はっ？」

アランは慌て視線を落とすと、布団がもそもぞ動いている。ぼつ、と剥ぐってみれば下着姿のサロメがいた。

「ううん……アランさまあ……」

「ぬあぁっ！ 貴様っ、何している！」

アランはベッドから跳ね起きた。

「すみません……何せ腕力では誰もかなわなかったし、自分は医療の心得があると断言していたから、やむを得ず」

「これのどこが医療なんだ！？ 何故信用したのだ！」

「いや……貴族の側の人間じゃないって言ったのは、アランだし……」

「……ちっ、おい！ 起きろ女っ！」

「うっ？ ううん……あ、おはようございますアラン様、不束者ですがどうぞよろし……」

「何を言いたいかは知らんが、ここに来た理由をまだ聞いていない。お前は何をしに来たんだ？」

「えっ？ だから、私はただアラン様を追い掛けて来ただけですよ。貴族だとか何だかとは何の関係もございません！」

気持ちよい否定だった。

「……アラン、彼女にも協力を求めてみたらどう？ 彼女の力があればもしかしたら……」

「またその話か。私はそもそも反対なんだ。部外者にはお帰り頂いてくれ」

アランは部屋を出ていった。

第一百四姫 サロメ VS アラン 2

「僕や教会に居た子供は皆、捨て子なんだ」

アランの傍らに居た彼は、サロメに語り出した。

「この国の経済は、ニルベールリング国とのやり取りで成り立っている。要は大国の側について少しずつ大きくなった国なんだ」

サロメは、こくりと頷いた。ダリナタルはかつてニルベールリング侵略戦争に手を貸し、同盟国として共に戦った。

現在では良き関係を保っている。最近では経済国としての名をあげて来ているらしいが……。

「しかし……権力を持ったのは一部の商人と貴族だけだった。……あとは、貧富の差が拡大して、過酷な労働条件下で働かされた大人達は子供を教会に預けたのさ。大人達が悪いんじゃない、だってそうしないと子供も、彼ら自身も生きていけないからね」

「じゃあ、教会はどうやって子供達にご飯を？」

「……昔は、貴族や商人達も神様を信じていたからね。神父様はお布施を使って用意してたみたい。だけど今はお布施も減って……遂に神父様は倒れてしまったんだ」

年頃の、食べ盛りの少年少女らの生活を保証する。ソレは一体どれほどの心労、肉体的労働であったのだろうか……想像も出来なかった。

「って事は、アラン様が今は皆の面倒を見ているのね？」

「……うん。けどあの人は……責任からか、道を外れてしまっただんだ」

少年は、アランの行動を語り始めた。

「……ちっ、これでは今日は厳しいか……」

アランは、メインストリートを覗き込み呟いた。見れば同じ鎧を身に付けた者ばかり。金色の鶏を模した紋様は、最有力貴族の家紋である。

「タツケンギユットの成金め……容赦はないと見える。やはりダリナタラーのプライドか……」

と、アランは忌々しげに言うときびすを返した。そこに、彼女は立っていたのだ。

「アラン様……」

「お前か。これ以上は私達と関わるな、さっさと観光を済ませて

帰るがいいさ」

アランは、サロメを一瞬だけ見やると突き放す様に言った。

「事情、聞きました。あなたは子供達に食べさせる為に、泥棒までしてるって！」

「聞いたのか……だが、だとして、だから何だ？ まさかと思
うが、私を止めにでも来たのか？」

アランはサロメを睨み付けると、警告にも似た声を発する。あたかも、邪魔をするなど言っている風だ。

「貴族らを潰したい訳じゃない、それは経済力を潰す事となる。
だが、利益を……あげた利益を貧民にも分け与えるべきじゃないか
！」

“ だから……アランは貴族らの遺産を拝借しているんだ。悪い事
だって分かってる。だけど、生きていく為には仕方ないんだ”

義賊、と言えばカツコよく聞こえるかもしれない。だが、法に照
らし合わせれば犯罪者に変わりはない。今のアランがそうだった。

「どうして……どうして……」

来るか、とアランは迎撃体勢をとる。勝てる気はしなかったが…
…負けたなら、足を洗い、新たな方法を探るのだろうか？

第一百五姫 サロメ VS アラン 3

「貴族滅亡おおおう!!!?」

サロメは高らかに宣言した。

「ちよ、ちよつと待て！ 私の言う事聞いていたか!? 貴族が滅亡してしまつては、この国の経済を取り仕切る連中も居なくなる。そうなればもつと多くの人々が苦しむ羽目になるんだ、だから私は……」

「だから、貧富の差が激しい事自体がおかしいんじゃない、それなら一度全部リセットしちゃつてさ、イチからやり直しすればいいじゃない!」

「馬鹿かお前はっ!? それはクーデターも同じだ、貴族がどれほど居るか知つてるのか、そもそも国を作り直すなどと正気の沙汰とは思えない!」

アランはつい、声だかに叫んでしまう。それは、雇われの騎士らが駆け付けるのに十分だった。

「貴様ら……怪しいヤツ、何者だ!？」

「ちつ、やむを得んか……私はバーンランド家五番隊所属のアラン・スミスだ」

「バーンランドお？ 何故ここに居る？ ここはタツケンギユツトの管轄内だろう」

男はアランの鎧をちらと見やり、言った。こちらは黒の薔薇が描かれている。

「それなのだが、実はバーンランド管轄にてこの娘が盗みを働いていたのだ」

「はあ！？」

サロメは思わず言った。

「予想以上にすばしっこくてな、こちらの管轄まで逃亡を許してしまったのだ。このまま放置しては、タツケンギユツト側にも迷惑かと思ってな。無論、そちら側に引き渡すつもりだった」

アランは普段より尊大に、言う。権力者に選ばれし実力者とは、この様なものなのだろう。語尾にも皮肉が込められている。

「ほう、それはそれは。バーンランドの連中にしては殊勝な事だが。果たして貴様の様な者が居たかな？」

「嘘だと思うなら調べるといい。ただ、仕事によその管轄へ行っていただとあれば、査定もマイナスになるのではないか？」

「ふん、その通りだ。気を悪くしないで欲しいな、成り済ましなぞあり得ん事だが念のためだ」

「ちょ、ちよつと！ 何二人で勝手に話を……」

「黙れ罪人め！ さつ、早くこいつを……」

「……まあ、待て。ものはついでに、こいつを連れて来てくれな
いか？ なぁに、上にはウチの主人から話をつけて貰っておくから
よ」

「ああ。分かつ……」

しかし、サロメは空気を読めない。

「だああああ何言ってるのよもううう！！」

サロメはタツケンギョット騎士を派手に殴打した。

バキッ！

「なにいいいい、ばかなああああああああああああああああ
ああああああ！？」

タツケンギョット騎士に勝利した。彼は吹き飛び、家屋の外壁に
衝突すると派手に倒れた。

“むっ！？”

“なんだ、何事だっ！？”

音を聞きつけ、騎士らが殺到してきた。

「なんて事を！ タツケンギユットの騎士は手だれだらけだ、勝ち目なんて……」

しかしサロメは笑みを浮かべ、言った。

「大丈夫です。私に任せて下さい！」

彼女は騎士らの群れへと突っ込んでいった。

第一百十六姫 サロメ VS アラン 4

サロメはまるで放たれた砲弾のようだった。あっ、と騎士らが言う間にも彼女は懐に飛び込み、既に一人を殴り倒していた。

余りの早技に、騎士らはもう為す術なし。浮き足立つばかりであった。

有能な騎士らを烏合の衆へと変えたのは、紛れもなくニルベールング国の鎧を身に付けた女だ。

アランが瞬きする間にも悲鳴は三重、四重に重なっていき、遂には皆動かなくなってしまっていたのだ。

はた目には、全員同時に倒されたとしか見えないだろう。

「……………なん、だと……………タツケンギユットの精鋭を、一瞬で……………？」

目の前の娘は何奴か、アランは思考を巡らせたが、自身を満足させる回答は到底出てこない。出てくる筈もない。

「お前は一体……………」

アランは問うた。空いた口を塞ぐ事さえ忘れ、ただ呆然と少女を眺める。この時ばかりはアランも間抜けな面を晒していた。

「うーん……………話せば長いんだけど。それよりもアラン様、あなた

は子供がまともな生活も出来ない現状を捨て置けるのですか？」

サロメの発言に、ようやくはっ、と目を覚ました心地のアラン。白昼夢でも見ていたのかと錯覚が襲う程に、呆けていたらしい。

「……それは、私とていいとは思えん。だが、相手は国の仕組みそのものなのだ。個人の力など、大波の前の木の葉に過ぎない……さっきまで、そう考えていた。だが……」

「だが？」

「……お前を見てると、何となく分かったよ。私は……戦う前から諦めていただけなのだ」と

アランの発言に、サロメの顔はぱあつと明るくなる。だが、相手の側は未だ沈んだままの表情である。

「並大抵では成し遂げられぬ、遙かな高みであろうな。……しかし決意したからといって、拝借を止める気はない。あの子達を食べさせなければならぬのだ」

「それなんだけど、私がやるわ。見たでしょう、私の力を。正面から乗り込んでごっそりと頂いてやるんだから！」

「確かにお前の力はずば抜けているが……下手をすれば貴族全てを敵に廻すぞ。見ず知らずのお前に、そこまでやらせる訳にはいかない」

「大丈夫だつて、みみっちい事しないで一気にいきましょうよ！ だつて私、あなたの為なら……」

そこまで言った時、アランはクスリと微笑んだ。初めて見た顔である。その中性的な美しさにサロメは思わず見惚れてしまう。

「ありがとう。それだけで十分だ……サロメ、と言ったか……悪かったな、つかかかってしまつて。分かった、これ以上はいい。まず私は本来の役目を果たして来るから……」

アランはそう言うと、サロメに背中を向けた。

「アラン様、どこへ？」

「すぐに戻る。サロメは教会に居てくれないか？」

「まさか、一人で貴族に!？」

「いいや。神に誓つてそんな事はしない。大丈夫だから、私を信じてくれないか？」

サロメは、うなずくより他なかった。

第一百七七姫 サロメ VS 貴族？

サロメは教会でアランの帰りを待っていた。彼女にしては珍しい判断であったと思う。

力持つ者として正しい行動だったのか……疑問残す結果だ。私が気合い入れて無双して、貴族一つでも陥落させるべきだったろうか……？

こんなにも自分の行動が腑に落ちないのは、初めてである。アランはきつと帰って来ると言った……信じるしかないというのは、何ともイヤな気分だ。

「はああ……あんなイケメンな目で見られたらダメだよっば」

分かれ際、アランの見せた微笑が網膜に蘇る。ズルいよ、目力……
…一瞬で、脳髄まで沸騰させたのだから。

記憶に惚れなおしていると、扉の外から声が聞こえた。“お前、ここで何をしている”と。まるで自分がここを訪れた時の様だ。

もしかして、そう考え外へと飛び出す。すると……。

「私はここに用事があります……」

そこに居たのは、ドレス姿の麗人であった。だが、このボロボロ

第一百十八姫 サロメ VS エメリー 1

(ええええええ！？ アラン様が女だったなんてええ！)

「そんな……バーンランドって……」

二人の論点は微妙にズレていた。サロメはアランが女であるという事実しか受け止めていない。

少年は、アランが女であるのにも驚いていたが、それ以上にバーンランドの姓に驚愕した。バーンランド家といえば、ダリナタル貴族の内、ナンバー2の名家であるからだ。

「そうだ。私はバーンランド家の次女……エメリーなんだ。結果的に騙す様な形になって、すまないと思っている」

「……その貴族の次女が、なんで……何で僕達を……同情、それとも憐れみのつもりだったのか!？」
少年が言う。

同じ境遇だったなら、それは善意だろう。だが、片や絢爛豪華な金持ち、片やその日その日にも苦勞する子供では……途端に素直な感情など失せる。

「鎧なんか着て、わざわざこんな所まで来て……自分で生きられない僕達を見て笑ってたんだろう！ なんて今更、本当の事を言っただんだ！ 夢なら夢のまままで良かったのに!」

「……私は、馬鹿だ。大馬鹿者だ。私はこの歳になるまで世間を知らなさ過ぎた、そして余りに浅はかだ……お前達に差し出した食事も、銅貨も……全てはバーンランドの財産だったんだ」

バーンランドの財産。それがどういう意味を持つのか……繰り返すが、彼女はバーンランドの次女である。つまり……

「私は、身内から物を拝借し、配っていたのだ。だが、つい先日遂にバレてしまってな……そこから私は……タッケンギュットに行った」

サロメは、タッケンギュットの名が出て、僅かに反応した。

第一百十九姫 サロメ VS タツケンギョウト騎士

当然ながら、人の数だけ考え方、捉え方がある。十人居れば十通りの考え方……十人十色と言う様に。

例え良かれと思い実行した事だろうと、受け取る側は必ずしも感謝してくれる訳じゃない。最低の皮肉だと思われたりもする。

何故、こうなった？

誰の所為で子供らが涙を垂らし、大人達が呻きを洩らすのか。

断じるのは簡単で、決め付けるのも容易い。

だけど、悪とは自分から見た悪でしかない。あちらからすれば、悪はこちらなのかもしれないのだ。

しかしそれでも……サロメにはそんな当然の事が我慢ならなかった。

どうして弱者が傷め付けられるのだ！？ どうして手を差し伸べた人が一番傷付くのだ！？ 強者がどうして弱者を踏み付けるのだ！？

難しい事なんて分からない、知りたくもない。こんな不条理を知る位なら、馬鹿のままでもいい！ それが本音だ。

だからサロメは……馬鹿になった。ただただ、タツケンギョウト

の大屋敷を目指していた。

鎧姿の彼女はすぐに、タツケンギユツトの私兵に発見されてしまう。更に悪い事に彼女はもう、同兵を数人ばかり蹴散らしている。すぐに一人の騎士が騒ぎたてた。

「テメエ、見付けたぞクソアマア！ さっきはよくもやってくれたなあ！」

騎士としてのプライドでもいたく傷付いたのか、必要以上に吠える。そして奴は簡単に鞘から剣を引き抜いた。

サロメは、そんな一連の動作を興味なさげに映していた。視界の片隅だ。

「……きなさい……」

サロメは呟く。

「ああ！？ なんだあ、今更謝っても遅い……」

「タツケンギユツトの一番偉い奴の所に連れて行って言ったのよ！ 耳掃除はしっかりなさい！」

「なっ……」

この時ばかりは、ただの少女が一国の王にも見えた。その堂々たる立ち振舞いは、剣先を向けられた人間のものではない。

一瞬、歴戦の戦士なる彼らも気圧された。雇い主の叱責など、彼

女に比べれば猫の様だ。

「ば、馬鹿かキサマっ、連れて行く訳がないだろう！ 第一オマエどこの誰だ、女のクセに鎧なんぞ着やがって」

「私は……ニルベールリング国、影の筆頭騎士、サロメ・メシユリトスだ！」

「ごめんラオド、と頭の中で呟く。案の定、嘘つけだの冗談も大概にしるだのと聞こえて来る。

ぶっちゃけ嘘だし冗談だ。だけどここまで大風呂敷を広げられる理由は一つ、お前達より今の私はずっとずっと強いという、事実のみだ！

「ならよっ、実力見せなあ！」

剣の男が躊躇なく振りかぶる。数時間も前に圧倒的力の差を見せ付けたというのに、まだ私を過小評価しているのか！

振り下ろした鉄の先に、目標はもう居なかった。それだけでない、からからと剣は地に落ちて、男も同時に倒れこむ。彼の背後に、サロメは立っていた。

「……分かった？ やってもムダよ、アンタ達なんて秒殺だから！ 理解したならとつとあんたらの雇い主の所へ案内しなさい！」

そこから連中の顔付きが変わった。俗に言う殺気というやつらせ

いだろうか……空気と混じり、濁き、張り詰めてゆく。

一人が屋敷の方角へと走っていった。

彼らは普段より行動を共にしているのか、すぐに二人が三歩ばかり前に踏み出し、三人が僅かに後退する。残り二名は待機。ある種フォーメーションともとれる布陣を築く。実力者揃いの意味がひしひしと伝わって来た。

「ただ者ではないらしいな……だが、我らとて仕事だ、断じて通さん」

「最後よ。どきなさい……」

「いいや、どかぬ！」

お喋りは仕舞いだった。サロメが踏み出す。

電光石火の一撃に、二本の剣が迎え撃つ。プリンセスブレードはがっちりと止まっていた。

直後、中段の二人が駆け、両サイドからサロメを挟み撃ち。右から、左から剣が迫る。

「はあああっ！」

彼女は跳んだ。その脚力は地面を抉り、軌跡がキレイに二つ。二名の前衛を易々と飛び越せば、後衛の三人が予想していたか、サロメ目がけ魔法を放つ。

三発もの火球はしかし、彼女を捉える事もなく剣の一振りで霧散。たん、と着地。

前衛中衛は既に向きを変え、サロメの背に殺到していた。後衛も抜かりなく次撃への詠唱を開始する。やはり、彼らの兵隊としての練度は非常に高い。

が、サロメは更に上に行く。

ガッ！

バキィッ！

ズドッ！

パシィッ！

メキッ！

ドッ！

パカッ！

あり得る筈の無い一撃、いや七撃。ヒトならざる動作。一点へと向かっていた力は、途端に七方へと拡散した。

誰もが、何が起きたのか理解出来なかった。

まるで……結果だけ……“殴られた”という結果だけを叩きつけられたみたいだ。

七人はそれぞれ別々の方向へと吹き飛んで、気を失ったらしい。これが、彼女の絶対的自信を支える理由、無敵力である。

「ごめんなさい！」

サロメはそうとだけ言い残すと、タツケンギユットの屋敷へと駆けた。

かの貴族の屋敷は、ニルベールリング国のネフィリム城を思い起こさせる程の、個人邸宅としては破格のサイズで、万人単位の騎士を雇ったとしても収容可能であろう。

入口の門は今、固く閉ざされつつあった。黒一色の鉄門は堅牢さを容易くイメージさせた。破壊するにしても、拳が絶対痛い。

多分、厚さも相当だろう。が、高さといえば、低くくて有名なネフィリム城壁、その半分もない。

あの時も私は跳んで見せたのだ、行けぬ筈がない！

彼女は爪先に力込め、騎士らの制止も完全無視。思い切り跳躍した。

天地がひっくり返ったような……空に向け落ちているかのような感覚。空気を切り裂き押し退けて、上昇し続けた。

あの時と同じだ……。

呆然と見上げる騎士達。やがて訪れた、心地よい浮遊感。鳥はいつもこんな風にヒトを見下ろしているのかと、ふと思った。

数秒の過程を経て、眼下の広大な庭にダン、隕石が如く落下、着地。

騎士らが駆けて来る。規格外の彼女に対し、尚も追いつがる彼らの気迫も大したものだ。

「タツケンギユットの主……待ってなさいよ！」

サロメは振り返らずに、玄関扉と思しき場所へと飛び出した。

第二百二十姫 サロメ VS タツケンギユットの騎士 2

「ダラム様っ、申し訳ございません敵襲です！ どうかご避難を
！」

騎士は、タツケンギユットの主ダラム・タツケンギユットに言っ
た。

「ほう、抑え切れないのか？ 賊の規模は？」

「それが…… たったの一人です……」

「一人？ ふうん…… そんなに手強いのか」

ダラムはあごに手を当て、考えている。

「ダラム様っ！？ 賊が迫っているのです、早くご決断を……」

「…… 賊の目的も分からないのか？」

「はっ？ あ、いえ、はっきりとはしませんが、“タツケンギユ
ットの主を出せ”の一点張りらしく……」

「ならば会おう。では、“お客様”を私の元に案内してくれたま
え」

「な、なんですって！？ 馬鹿げています、もしもダラム様の御

身に何かあつたら……」

「通せと言つたのが聞こえなかったのか……？ 直ちに戦闘を止めさせる」

「……はっ……」

騎士は、雇い主の言葉に従つた。

「あたあああつ！」

ドカアツ！

「ぐあああああああああ！？」

サロメは、騎士らと戦いの真つ最中であつた。

「はあ、は……キリがないわね、ホント」

騎士らは進む事に増えていき、次々に向かつて来る。さすがのサロメと言えど、消耗しつつあつた。

撤退の単語が頭を過る。無論、ただで帰してくれるとは思わないが、進むよりは確実だ。

(仕方ないけど……一旦引き上げるしか……)

「うおおおっ!」

「!?!」

ガギイン!

プリンセスブレードが弾かれた。

「よし、今だ!」

「くっ、そおお!」

サロメが再び無敵力を行使しようとした、その時だった。

ごおおーん、と屋敷全体に妙な音が響いたのは。

第二百一十一姫 サロメ VS ダラム 1

急展開であった。

大きな鐘を思わせる音が鳴り響いたと思うと、騎士らは途端に呆然と立ち尽くした。

サロメも何事かと様子を伺っていたら、騎士と様子の違う、正装をした人が駆けて来た。

「あなたを、客人として主であるダラム様の元に案内させて頂きます」

さすがにこの発言には、サロメも、周りの騎士らも目を丸くした。反論する騎士達。当然だろう、仲間をあれだけやられたのだから。

しかし、“ダラム様の決定だ”の言葉に、彼らは悪態つきながらも退がっていった。

「では、どうぞ」

言われるがまま、サロメは案内人の後をついて行く。

無論、畏かもしれない。あの男が何かレバーみたいなものを操作しようとしたら全力で阻止しよう、と彼女は思った。

床が突然、ぱかっと開いて奈落の底。

死に匹敵するガスだ！ 恋は乙女の原動力、（かつこいい）異性は大事な宝物が座右の銘なサロメには、致命的である。

「……分かってるわ。私も話があるだけだし」

「そうであって欲しいものです」

歩く事数分、長い廊下を経てから、扉が一つ現れた。案内人は軽くノックをすると、客人です、と言った。

内側からは、通せ、との返事。彼は扉の右に避けると、どうぞと述べる。

「……入りますよ」

サロメはゆっくりと扉を開いた。

「ようこそいらつしゃいました。どうぞそちらの椅子に腰掛けて下さい」

「……!?」

なんとダラムとはイケメンであった。

「ほう……あなたは……。ケチな一商人に何用ですか、サロメ・ニルベールリング元第二皇女様？」

「えっ……?」

第二百二十二姫 サロメ VS ダラム 2

ダラムは、サロメの正体を知っていた。

「ど、どうして……私の名前を？」

「商人たるもの、相手の名前と容姿は覚えていなければなりません。特に、お得意様のニルベールリング王家の方はね」

驚いた……まさか引きこもりがちだった自分を記憶しているとは。

「で、その王家の第二皇女様が如何なるご用件でしょうか。聞けば、私の騎士団を蹴散らされたとか」

「そ、それは……まあ、ちょっと勢いで……。それで要件なんだけど、この国って、貧富の差が激しいと思わない？」

「そうですね」

「ならば、子供達だってその日の食事も精一杯なのは知ってる？」

「知ってますよ」

……やっぱり、知ってるのに……。

「あなたは何もしてあげないの？」

「意味が分かりませんね」

「だからっ、そんな人達に何もしてあげないのって聞いてるのよ
！」

するとダラムはふう、と溜め息をついた。

「……何故、私が見ず知らずの連中を助けなければならぬのですか？ 金を渡して、彼らを救えと？ 馬鹿らしい。そんな事をし
てまで彼らを助け何になるのか詳しく教えて頂けませんか」

その答えに、サロメは目眩を覚えそうだった。

第二百二十三姫 サロメ VS ダラム 3

「あなたには損得しかないの!？」

「そうです。商人とはそういうものなのですよ。どうすればプラスとなり、どうしたらマイナスに転じるのか……自然な事です、ヒトの行動原理でしょう? 誰しも助けた相手に罵声や無視を期待しない」

「……そんな事……」

「ありませんか? ではあなたは常に見返りを求めずに生きてきたのでしょうか。だとしたならあなたは素晴らしいお方だ」

彼は、一度息を深く溜め、言う。

「……しかし、あり得ない。そんな人間は居ません、絶対にね。どこかで考えてしまうのですよ……褒められたい、認められたい、興味を持たれたい、それも立派な損得の感情なのです。私は見合うだけの対価さえあるのならば、助けますよ、恵まれない人々を。ですがただでは私が汗水垂らし手に入れたものを手放せません。納得のいく説明をしてください」

「……………」

情けの無い事だ。サロメは即答出来ないばかりか、頭の中で返答

をまとめる事さえまならない。

「あなたは、腹がたったからここに来たのではないですか？ ただ、何もしない私に腹を立てて。理由も根拠も取引材料も無し、なれんとお粗末でしょうか？ ……お引き取り願えますか、サロメ・ニルベールリング殿。それとも、暴力に訴えますか。先程の様に」

「!!!？」

「さ、早くお帰りなさい。執務がありますので」

ダラムは、机上の資料へと目を戻す。はなから、彼は元皇女が会いに来たから話を聞いただけである。中身には一つの興味でさえ示さなかつたのだ。

「ちょっと待ってよ……………」

だが、サロメは……………」

「まだ何か？」

「ええ、この通り……………」

サロメは土下座をしていた。

第二百二十四姫 サロメ VS ダラム 5

サロメは床に頭を摺り付ける程、深々と土下座した。正に最後の手段である。

「……………なんですか？」

「お願いします」

「あなたは、ふざけているのですか？ その行為に何の価値があるというのです。無意味だ、無意味極まりない行為です。さっさとお帰りなさい」

ダラムは吐き捨てる様に言った。だが、サロメはそのまま微動だにしなかった。

まさか、自分が了承するまで帰らないつもりなのか…………ダラムは、その無意味さに苛立ちさえ覚える。

無意味と言えば無意味なのだ。今日の取り引きはそちらが何の材料もなしに来たのが悪いのであって、発言も行動も支離滅裂だ。ここまで話を聞いてやっただけでも、こちらに感謝すべきである。

「全く…………あなたの母国は大変な状況にあるというのに…………」

ダラムが不意に口走った言葉である。しかししかしだ、サロメは

「えっ…………？」

と目に見えて動揺した。やれやれと彼は洩らす。

「知らないのですか、あなたのお父上ニルベールキング国王がお亡くなりになられた事を……。お陰でまだお若いアンジェリ様が即位なさったと聞いておりますが？」

第二百二十五姫 サロメ VS アトモス様

サロメはダラムの屋敷を抜け出すと、ゆっくりと帰っていった。

その姿に覇気はなく、しおれた花の様に頭は下向きとなっていた。しばらく、思考を空っぽにして歩いている時だった。

「おい、サロメ」

と、声がした。彼女は無意識に顔を上げると、そこに見知った顔がある。

「あ、アトモス様!？」

そこに立っていたのは、ニメールにも及ぶ巨躯の黒マント男。そう、自称魔法使いのアトモスであった。

ていうより今、彼は確かにサロメと呼んでくれた様な……。

「それで？ 商人風情に負かされて、これからどうするつもりなのだ？」

「……うう……それは……取り敢えず、アラン……じゃない、エメリーさんの所に戻って、どうにか上手い方法を……」

「ほう？ 忠告しておくが、お前は後をつけられているぞ。あそ

ここに戻れば、迷惑がかかるのではないか？」

そう言われ、私はばつと振り返ってみたが、それらしい人物は見えない。強いて言うなら、異様に人通りが多い事だけだ。

「まさか、あの中に……」

「居るぞ、間違いなくな。それに、お前が戻ってやった所で何が出来ようか……残念だが、強ければ何か動かせる訳ではないのだ。今回は諦める」

「そんな……」

「自分に出来ない事を知るのも人生だ」

なんかジジ臭い発言だったが……その通りかもしれない。元々、このいざこざに勝手に関わって勝手な事したのは自分なのだ……。

でもなあ……あの子達を放っておくのも……。

「そもそもお前は馬鹿だしな。猪突猛進考えなしであろう、そんなキサマが口先で相手を惑わせる商人相手に口先対決とは……無謀を通り越して絶望的だ」

「いやあ、それほどでもお」

どうやら一定以上の悪口は誉め言葉に変換されるのか……はたまた、一つも聞いていないのか。

第二百二十六姫 サロメ VS アトモス様 2

“全世界に告げる、我が名はアンジェリ。ニルベールリング国改めアンジェリ帝国の王である。私は今、貴国に対し宣戦を布告する。猶予は十日、満月の夜までである。返答無き場合も、敵国と見なし攻撃する。降伏の場合は貴国を歓迎し、唯一帝国に名を連ねるものとする”

「……………確かそんな内容だったと思うぞ、お前の姉が全世界に対してばら撒いた書状は……………」

「うああああ……………」

サロメは頭を抱えた。血が繋がっていないとはいえ、姉が……………こんな中にくさい文章の書状をスパムメールか不幸の手紙が如く全世界に送り付けた……………。

恥ずかしい……………恥ずかし過ぎる……………。そもそも、騎士の皆さんや大臣だとかは何をやっているのだ！

「……………因みに、その書状を携えた騎士は手紙を渡した直後に、狂った様な声をあげて玉座目がけ突撃したそうだ。最も、それで国のトップが犠牲となった例はないがな」

「それって、別にアンジェリボケ姉様が一人発狂して馬鹿な事しているって訳じゃなくて、国の総意じゃないかって事？　そもそも、魔王アンジェリって呼び方は一体……………？」

「まあ待て。そもそもあの女に国一つが収められる訳がないだろうっ?」

サロメは激しく同意した。

「が、しかし今のニルベリングは異様だ。皆が皆、王の無茶を支持し妙な一体感に包まれている。民らは皆、アンジェリの為なら何だっつてする人形となっているのだ。何故か?」

「……色仕掛け、とか? 民一人一人相手に抱かれたとか……まさか、そっちの意味の魔王っ!?!」

「違うな。プライドの高いあの女はそんな真似など死んでもしないだろう?」

「……ジョークだっつて、今世紀最大級の」

「だから、あの女が民や王室内の連中を操っているのだ。そんな事、魔王でもなければ出来まい?」

「ああ……」

そう言われてサロメは、民の前で振り子を振り催眠術をかけるアンジェリを思い浮かべてしまった。もっととあり得ないが。

「とにかくだ。ニルベリングは今、混乱している風でまるで混乱していない。どうだ、目的が特に無いならアンジェリを倒すというのは?」

「え、なんで？」

アトモスにしては、妙だとサロメは思う。くをしたらどうだ？
これは今まで彼の使わなかった言葉である。

しかも姉様を倒す？ 意味が分からない。あの女とかかわり合い
になるのさえ嫌だというのに。

「うーん、私がしなくてもいいんじゃない」

サロメはそう言った。

第二百二十七姫 サロメ VS 決戦前夜 1

(いよおおおおおし！ 目指すはニルベールリング、ネフィリ
△城！)

サロメは少しヤル気を出した。

つい一時間も前の彼女と比較したら雲泥の差である。

「それにしても私がアンジェリ倒したとして、その後は？」

「いや……お前が王になって、国を治めるのだ。それがニルベール
リングにとってベストだ」

「だーから、やだつてば。私は王様になんてなりたくないし」

どうしてさっきから彼は、私を王にしたがるのだろうか？

「……そもそも私の旅の目的は素敵な人を探す事であって、王に
なる事じゃあ……」

「王になれば男なぞ選び放題だろうに」

「……………」 揺らいだ。

に、してもアンジェリが本格的におかしくなってるみたいだから
倒すのは分かるけど、王、か。

「……面倒くさいでしょう、皆も」

「サロメを王に、推進派のコメントを聞くか？」

そう言つとアトモスは、召喚魔法を唱えた。

第二百二十八姫 サロメ VS 決戦前夜 2

「つて訳で、俺様はハナっからサロメ様が王に相応しいと思ってたんだ！ ああんな見てくればかりの女に勤まるかつつーの！」

ガハハハハッ、との笑い声をあげているのは、召喚魔法の効果で最初に現れた山賊の頭、ワイルドだった。

「そうですね、少なくとも今の姫様は様々な経験をなさっていますし、数年もすれば立派な王となりましょう！」

サロメを王にする推進派のトップらしい、元筆頭騎士ラオドが言った。

「いや、あの、そう言われてもね……ほら、あれよ、王様は皆に好かれなきゃならないでしょ。そういう点じゃアンジェリの方が上じゃない？」

「細けえこたあいなんだよ！ 今のニルベールリングは史上最悪なんだ、これ以上悪くはならねえ！」

「おおっ、ワイルド殿、正にその通りですな。よし、あちらで共に飲み明かしましょう」

山賊と筆頭騎士というかつてないコンビがそこにあった。

全く、召喚陣から現れたと思えば、イロイロと喋ってすぐに酒飲み会と化してしまった。つまり、周りは皆酔っ払いである。私はま

だ飲めないのに……。

「別になああ、サロメは王にならなくてもいいんだよなあああ！ ニルベールリングにでっかい闘技ぢょうを建てて、俺が一生涯チャンピオンだああ！」

ダンガルもまた、真つ赤な顔をし支離滅裂な発言を繰り返す。つてか飲み過ぎだろ推進派あ！

「トリアエズダ ナゼ ワタシハ ココニヨバレタノダ？」

例の如く、異国言語でゲンバアは言った。どの道喧騒に紛れ、聞き取れなかつたのであるが……。

「ゲエへへへへ、そうかあ！ あんたつて案外よこしま邪なんだなあ筆頭騎士様よお！ 皆聞けえ、なんとなあ、ラオドのダンナはあー」

「わああああ山賊う、言うんじやないいうんぢやないぞオオ！ 私はお前が口の固い男と見込んだから言ったんだ！ それ以上言えばたたつ切つてくれるうううう！」

「おおつとお！？ ダンナがご乱心じゃー！」

「なんだああ？ 争い事かあ！？ 争い事なのかあああ！？」

等と彼らは気が触れたか、という位にはしゃぎ、お陰様で船も微かにぐらぐら揺れてしまふ。頼むから沈めないで。

「ムウ、ワタシモ ハメヲハズシタハウガ イイノカ ……ヨシ、

マゼテモラウゾ！」

「全く……騒がしかったわ……」

サロメは一人、甲板で夜風に当たっていた。ぬるく湿った風であるが、酔っ払いの詰まっている部屋の空気よりも遥かにマシだ。

「姉さんは確かにニルベールリング最大の癌細胞だけどさ、倒した方がいいんだろうけどさ……でも私が王なんて、荷が重過ぎるんじゃないかしら」

「確かにな」

「うおおわあ！？ 居たんですかアトモス様！」

そういえばアトモスは酒の席？ でも見かけなかったし。

「だが、お前が王になってみれば、案外面白くなるかもしれないぞ？」

「……なんかやけに私を王にしますよねえ。目的は何ですか？」

「あ、いやなんとなくだ。目的など、ない」

明らかに動揺してるけどなあ……。

「ふうーん？ まあいいですけどね」

夜はふける。

船はゆっくりと大陸目指し進む。

多分、明日には辿り着くだろう。その後すぐにサロメは眠りについた。

第二百二十九姫 サロメ VS ニルベールリング決戦 1

決戦開始当日の空は澄み渡り、雲一つないという天候だった。だが陸地が近づくことに、不吉な光景も当然ながら近づいて来た。

「嫌な予感してたけど……まさかこんな事に……」

船に乗り、初めて余所の大陸へと旅立った日の事を思い出して見た。あの時と同じ天気だ……だが、明らかに違う所が一つ。

ガンドという名の港町、その船着き場にびっしり隙間なく並ぶのは、人々だ。人間バリケードとでも言うべきか。しかもただ立つだけにあらず、しっかり武器を携えている。

「おいおい、なんだよありゃあ！ 祭りでもあんのか、それとも派手にお出迎えってか？」

ワイルドが手摺りより身体を乗り出し言う。双眼鏡を用いている為か、“農夫にガキに……俺様の山賊の連中も居るじゃねえか！”とも言っていた。

しかも一同、こちらの船を認めたのか、奇声とも怒声ともつかない声をあげ始めている。その様子は、単に敵視だとかの言葉で片付くものでない。

ゆらゆら揺れる帆船は、少しずつ港に接近してゆく。やがては接岸するだろうが、その時は恐らく……。

ざつと見、万というところか。港に並ぶ第一陣、その後方、幾重にも人の列が出来、厚い布陣を築いているのだ。

「なんてこった、連中、上陸すらさせてくれなさそうだが。どうするよ？」

「丁度いいい、全て蹴散らせばいいだろおオオ！」

「ダメよダンガル。あの人達は、騙されてるだけかもしれないじゃない」

と、というか、その可能性しかない。むしろ全員マインドコントロールでも受けているのだろうか？ どちらにしろ彼らに罪はない。

「しかし姫様、あれを突破するのはいくら何でも……」

「ふふん、それについては大丈夫よ！ だってアトモス様が空を飛べるじゃない。何ならワープでもいいわ、お願い！」

そう言うと、サロメは先程から静かなアトモスを指差した。

「……………」

が、彼はバツが悪そうに頭を垂らす。滝の様に汗を流しながら、彼らしくもなく、ボソボソと言葉を吐く。

「残念だが、ムリだ……」

「えっ、今何て……」

第三百三十姫 サロメ VS ニルベールリング決戦 2

「うらあああああああああああああ！」

サロメ一行は、ガンドの港町を全速力で走りぬけていた。

見渡す限りの人、人、人。襲い来るそれらを、ちぎっては投げちぎっては投げて……。

先頭をサロメが走り、両サイドはラオドとダンガルが。後方をゲエンバア、そしてアトモスが担当している。ワイルドは更に先を行っていた。

相手にする人数を最小限とし、最速で目的地へと行く……それに一点突破より他ないのだ。

ぐずぐずしては、完全に包囲されてしまう。まあこちらは人が敷き詰まっているから派手に立ち回る事は出来ないだろう。

「こちらはいくらでも、派手に暴れてやるのだ！」

「ふうんっ！」

ダンガルの拳が、一人の鎧の兵士を吹き飛ばすと、それに巻き込まれて二人、四人と連鎖し倒れていった。

「ジャアクナモノタチヨ クラエ！」

ゲエンバアの三メールもの槍が振り回され、人々を押し退ける。

しかもきつちりと味方の位置を計算しているのが凄い。

「ハアツ！」

ラオドは一人、また一人と確実に相手を倒してゆく。相手側はど
うやら単調な動きしかして来ないから、まだ峰打ちで仕留められて
いる。

「サロメエ、こつちだ！」

ワイルドはその素早さを生かし、退路を確保してゆく。ある意味
でもっとも危険な立場だが、確実にこなしている。

「だりゃあああああああ！」

バキィッ！

言うに及ばず、サロメの無敵力は最強の戦力である。その一撃は、
人々の海を真っ二つに割った。

こうして、あっさりとガンド包囲網を一行は突破していった。

第三百一十一姫 サロメ VS ニルベールリング決戦 3

サロメらはガンドを突破し、街道をひた走っていた。幸いながら港町の人々は追い掛けては来るものの、スピードといえば牛歩が如く遅い。

そのゆっくりと群れで歩む姿は、ゲール（ゾンビ系モンスター）のようだ。

「ねえ、なんであいつらって、走ってこないのかな？」

「さあな検討もつかねえが、操られてるんなら、複雑な動作は出来ねえのかも知れねえな」

楽観的意見だが、それは一理ある。本当に一行を行かせたくないのなら、やりようはいくらでもあつたらうに。

実際はただ正面から武器を振ってくるだけだった。そんな動作しかプログラムされていない人形みたいだ。

「コノ チヨウシナラバ イケルダロウ！」

「ふん、俺はなあ！ もっと手応え歯応えを期待してたがなああ！」

「ダンガル殿、その様な発言は控えて下さい。あの程度だからこそ、極力殺傷を避けられるのですから」

等と皆が会話する中、アトモスただ一人は押し黙りいつになく鋭い眼差しを、彷徨わせていた。

(……アトモス様、どうしたんだろう?)

と考えていたら、すぐに次の街が見えて来た。あれはかつて、ダ
ンガル・アフブリトと出会い、カースという少年と出会った街であ
る。

彼女らは勢いそのままそこを目指した。

(……ここは無事だといいいけど)

そんな事を考えながら……。

第三百三十二姫 サロメ VS ニルベールリング決戦 4

ダンガルと出会い、そして激しく拳を交えたこの街……名をポルトといった。

サロメ達の思いは霧散し消え、現実が突き付けられる。人々は列を成し、行き先塞ぐ壁として立ちはだかった。やはり、ここもダメだったか……。

「……ロツガア、アルドオ、ミューゼエエ、カースウウ……」

と、ダンガルが呻く様に言った。サロメも見た。

カースは、かつて世話になった……というか、逆に世話をした少年である。そしてロツガ、アルド、ミューゼというのはあそこの鎧の一団。ダンガルとつるんでいた騎士連中である。

「悪いサロメ、先に行つてくれええ……俺はなあ、ちよつと用事がある」

そいつらの姿を見てからか、ダンガルの動きが停止した。

「ダンガル殿、どうなされたのですか!? 今はとにかく進みま……」

「黙れええ、俺にはなあ、大切な事なんだよなああ!」

「ダンガル！」

サロメだ。

「怪我しないでねっ、あとヤバくなったら逃げる事、いい？」

彼は決めたら死んでもやり遂げようとする、そんな人物だろう。

あの時、ボロボロながらもサロメに突っ込んで来た事からも明らかだ。

そんな彼だから、サロメは止める事をしなかった。ダンガルの実力なら大丈夫、というのもある。

「誰に対して言っているうう！ 任せとくだなああ！」

気合い十分のダンガル。

サロメ一行は、付近の民家に目を付けた。当然ながらここは人々が暮らしていた一つの街である。建物はいくらかでもあった。

ワイルドとゲンバア、そしてアトモスはひよいと、鎧姿のラオドはサロメが抱え、屋根へとひとつ飛びしたのだ。

あとは屋根伝いに飛び移り、人間バリケードをスルーしてやればいい。

それに遅れ気付いた人々は緩慢な動作で振り返る。ダンガルは言い放つ。

「この街の住人ならなあ、俺が相手だああ！」

舗装された道が砕ける程の一步を踏み出すと、ダンガルは人々目がけ突撃した。

第三百三十三姫 サロメ VS モンスター軍団

サロメ一行はニルベールリング大陸を北上していた。かつてサロメの通った道である。

モンスターの群れが現れた！

「邪魔ああああ！」

バキバキイイイ！

モンスターの群れを撃破した。

「しかし……姫様の力のなんと凄まじい事か。我々のやる事がない」

「ナント カノジョノ スサマジイコトカ ヤルコトガナイ」

かぶっているが、言語の違いで理解できた者はいない。

（無敵力、だんだんと使いこなせてきている様だな。だが、それでは……）

「早くしてやろうぜ、ダンガルのダンナに楽させてやんなきゃな」

首都ニルベールリングまで、あと百キロを切った。

第三百三十四姫 サロメ VS 花 1

サロメらは溪谷に差し掛かった。さすがにモンスターや人々を相手にしつつ、ノンストップで走り抜けて来たのだ、疲労がたまっていた。

サロメやアトモスはまだマシであったが、ラオドラ普通の人間には休息が必要。よって、モンスターの気配のないここで、一休みしようとしてサロメは提案した。

無論、最初は“大丈夫だ”等との返事が返って来た訳だが、結局数分の休息をとる事に決定した。

「ハア……ハア……申し訳ありません、私が、疲労したばかりに……」

「なあに、旦那はフル装備だ。仕方ないさ……」

「ムッ バードードウガ イナイゾ？」

「アア、アンシンシロ、ヤツハ、スグニモデル」

アトモスがゲエンバアに説明した。

「また、来ましたよ。どうにもあやふやなんですけれど……」

サロメは崖下に来ていた。そこには微かに崩れた跡があつて、名も知らない花が四輪、黄色く咲いていたのだ。

「また来るつて、何だか約束したみたいで……確かに、私には世話になりました。ありがとうございます、それだけです。今日のことるはこれで、またいつか来ます」

サロメは一度だけ頭を下げると、振り返り歩み出した。その時だ……。

「サロメさま……」

確かに、声がした。

第三百三十五姫 サロメ VS 花 2

“ サロメさま、お久しぶりです。また来て下さったのですね ”

どこか懐かしいその声に振り向いてみれば、そこには、あの四人家族が立っていた。

思い出した。以前、崖から転げ落ちた時に知り合い、過ごした暖かな記憶のひとかけら。

確かに彼女らは居たのだ。父親と母親、そして二人の子供達。

“ サロメさま ”

“ サロメさま ”

子供達だ。双子らしく息もぴったり私の名前を呼ぶ。父親は相変わらず腕を組んでそこにじっ、とたたずんでいたが、表情は柔らかだ。

「 皆さん……この間はどうもありがとうございました！ やっばり夢じゃなかったんだ……けどあなた方は多分、夢、みたいなものなんでしょね…… 」

薄々と感付いていた事がある。あの家族の人は夢にも似た何かではないか、という事だ。それも、もしかしたら……。

「 ううん。いえ、なんでもないんですきつと。今は急いでいます、

この国をどちらかといえば救わないといけないんです……落ちついたら、また、ゆっくりお話ししましょう。ちょっと、皆さんの顔が見たくなっただけですのぞ」

“ そうですね。国の危機に立ち上がったのですね……きっと、あなたならどんな事でもたちどころに解決なさるでしょう。どうかご武運を”

“ えー、もういつちゃうのー？ 何の為に来たんだ！”

“ 来たんだー！”

双子ちゃんがきゃーきゃーと奇声をあげて騒ぎたてる。確かに何の為に来たんだろ？ なんとなく覚えてて、それがとても大切なことに思えたから、かな？

“ こらこらお前達、サロメ様は忙しいんだ。また会えるさ”

父親がそう言い子達の頭を軽く撫でた。その様子を見ながら、サロメは少し、ほんの少しだけあの頃を脳の隅っこに滲ませた。

鮮明に響く、母の声。何故かいつも母親しかいない幼い頃の思い出、ひどく赤く見えた夕焼け。

「ごめんね、また来るから。次はまた、一緒に遊ぼうよ、鬼ごっこしたりかくれんぼしたり！」

サロメの提案に、双子ちゃんは腕を組んで、うむむー等と考えて

いる。どこまでもシンクロしている二人だ。

やがて、“分かったー” “分かったーじゃーね”と返して来た。サロメもじゃーね、と言い手を振りゆっくり背を向けた。

“ねえ、アナタ……サロメ様、大丈夫かしら？”

“……正直、大丈夫とは言い切れないが”

“大丈夫だよー”

“だよー”

“ほう、どうしてだい？”

“だってサロメさまは”

“むてきのプリンセスだもん”

“ふふ、そうね”

相変わらず、地面にぼつりと花が四輪、寄り添っていた。

「ただいまー、どう？ 調子は」

サロメは仲間の元へと戻った。

「ああ姫様、私はもう大丈夫です」

「俺様もだ。水を飲んでスッキリ爽快、あと三日はぶっ続けて走れるぜ！」

「オールグリーンダ バードードウ」

「……アトモス様は大丈夫……ですよね？」

「……ああ……」

アトモスの素っ気ない返事が気になったものの、皆の調子は良いらしい。

「じゃあ、行くよ！」

サロメの声に、待ってましたとばかりに返事が重なる。一行はそのまま直進して行った。

記憶が正しければ、これから先はどんどん登って行き、山を越えなければならなかったと思う。

確か、その山の頂には……。

(俺様の部下、無事ならいいがね……)

ワイルド一味のねじろがある筈だった。

第三百三十六姫 サロメ VS 山道

一行は山道を駆け登っていた。まもなく頂に到達するそんな時、ワイルドが言う。

「すまねえんだが、ここからは山道を外れて獣道を下らないか？
ちと道が悪くて遅くなるが……」

「それはまたどうして？」

「あー……騎士のあんたにや教えなくなかったんだがよ、実はこの山ワイルド山賊団のアジトがあるのさ。山道をそのまんま行ったら、もしかして街の連中みたいになつて俺様の部下達と鉢合わせするかもしれねえ。それに、少なからず畏もあるしな」

ワイルドの意見にサロメも“そういえばそうだったわ”と同意した。

「なるほど……急がば回れと言いますし。しかし、ワイルド殿の事を疑る訳ではありませんが、獣道は本当に安全なのですか？ アナタの言う少々とはどんなレベルの話ですか？」

ラオドが気にするのも無理からぬ話である。もしも複雑な経路であつたら、もしも相当な難所であつたら。しかも自分を初めサロメなどは登山しやすい格好かといえばそうではない。

全身鎧の重装備だ。虫には刺されないかもしれないが、山道を歩くのには普通に障害でしかない。

「安心してくれよ、俺達がきちんと整備済みさ。だが……もう使えねえな、この経路は」

そう言ってワイルドは苦笑した。どうやら山賊らの便利な抜け道みたいなものであるのだろう。

「そういう事なら皆、こっちから行こうよ」

サロメが言う。その言葉に反論はなく、実にスムーズに意思決定がなされた。だが、ワイルドはただ一人、道の分岐点にたたずんでいた。

「ワイルド殿、どうかされたので？」

「や、あのさ……連中の様子、見てきていいかな、なんて……」

「それって仲間の様子を見てくるって事？」

「ああ……そうだ。どうにも、な……」

「ワイルド殿、ダンガル殿ではないのです、単独行動は控えて下さい。ただでさえ戦力が少ないというのに……」

「待つて、ラオド。……心配、なんだね。いいよ、行ってきて」

「姫様!？」

サロメの判断に、一人が目を丸くした。因みに残り二名は待機しているだけで、判断は任せているらしい。

「ただし、絶対に帰って来る事！ 危なくなったら逃げる事！ いいね？」

「……ありがとうよサロメ様……」

ワイルドはすぐに駆け出し、見えなくなった。

「……姫様、何故彼を行かせたのです！？ あれでは死に行くようなものではありませんか！」

「ごめん。でもさ、彼にとっては一番大切なものなんだよきつと。ここに居る誰もが、強制なんてされてないでしょう？ 彼がそうしたいって言うならそうさせてあげようよ、ね？」

「……分かりました。そうですね、確かにこれは自国の、ニルベリングの問題。本来ならば我々だけで解決せねばならない……その通りでした」

「うん。じゃあ、行こう！」

サロメ一行は獣道を下っていった。

「オイ アノオトコハ ドコヘイッタんだ？」

ゲエンバアはただ一人、言葉の壁によって混乱していた。

第三百三十七姫 サロメ VS 街道

サロメらは休憩をはさみつつ驚異的スピードで進行していった。まだ陽がある内に山道を抜け出した。

今はモンスターを蹴散らしつつ、街道を北上し、ますます首都へと迫りつつある。何のトラブルもなければ夜中にはネフィリム城へと辿り着けるだろう、とラオドは読んでいた。

出来る事なら迅速に、今回の件を解決しなければならぬ。その為には元凶であるところのアンジェリの打倒、それに尽きる。

「という訳で、後は一本道です。懸念があるとするならば、この先のトシューズの街、首都近くの関所……そして首都ニルベールリング。順調に行けば深夜にはネフィリム城へと到達できますが……まず無理でしょうね」

「やっぱり、街の人達に襲われるのかな……」

「恐らくは」

「ツマリ コノサキハ キケンモ オオキクナル ソウイウコト
ダナ」

地面に描かれた図を見て、ゲンバアも納得している。が、アトモスだけは一人離れ、じつと遙か遠くの灯りを眺めていた。

「……しかしアトモス殿はどうしたのでしょうか？ 以前とはまるで別人のようですが……」

「なんだか複雑な事情がありそうなんだけど……それはまたよ。今はアンジェリをどうにかしないとイケないわ」

ラオドは静かに頷くと、ゆっくりと腰を上げた。サロメとゲエンバアも同様だ。

アトモスもゆっくりと歩いて来た。次はトシューズの街だったか、そこを通り抜ければ間もなく目的地である。

全員は一斉に出発した。

第三百十八姫 サロメ VS トシューズ住人

トシューズの街には灯りが無数に蠢いていた。

大方の予想通り、街の人々がたいまつでも持って巡回をしている風だ。

「行くよ皆っ！」

サロメの合図一つで全員は物影から飛び出した。

うろつく一人を一撃で気絶させると、そのまま一気にストリートを突っ切る。こちらに気付いたのか、半鐘の音が鳴り響いた。

あちらこちらから、ゆらゆらと灯りが揺らめく。まるでアンデットの群れの様を集まってきているのだ。

「うりゃああああ！」

バキバキドカツ！

次々と襲い来る住人を倒しつつ、実にあっさりと街を抜けて行く。はつきり言って拍子抜けした気分だが、スムーズに突破出来るに越したことはないのだ。何より最短距離で突破したのは大きい。

速度そのままにサロメら一行は住人をぶっちぎっていった。

第三百三十九姫 サロメ VS 関所

トシューズの街を越え、ラアズ大橋を渡り残るは関所と首都ニルベーリングのみ。

関所は常時、兵士の駐留する防風壁のように見える高い壁である。

サロメは以前、この壁を拳で砕き突破したのだが、さすがに穴はもう塞がっていた。

だとしてもやることは変わらない。サロメは再び壁に一撃を叩き込んだ。

バゴオツ！

関所はあっさりと崩壊し、すぐに兵士らが現れた。

が、もう遅い。彼らの間隙を縫い、駆け抜けるサロメ一行。

またしても置いてきぼり状態となる兵士たち。

「よし、あとはっ！」

残る障害はニルベーリングの人々と騎士連中、そしてアンジェリだけであった。

第四百十姫 サロメ VS ラーズ

首都へ足を踏み入れたサロメ一行を待ち受けていたのは、無数のニルベールリング騎士らであった。

そして先頭に立つ男、それを見てラオドは

「貴様は第六騎士団長のラーズか！」

と言った。

「残念ですが、現在は筆頭騎士ですよ元筆頭騎士のラオド殿……」

ラーズはどうやら他の連中とは違い、明確な意識を持っている。

「サロメ様、アナター人だけおいで下さいませ。アンジェリ国王様のご命令です。他の方はどうぞ、お引き取り願います」

「何を言う、姫様どうせ畏です！ こいつの言う事を聞いてはなりません！」

「嫌ならばそれでいいのですが……こちらの全戦力、ニルベールリング騎士三万と交戦して頂きましょう。それこそ、無駄な犠牲ではありませんか？ サロメ様、アナタがお一人で来れば思う存分、アンジェリ国王様と戦えます。さあ、如何にしますか？」

サロメは、ある答えを即答した。

第四百十一姫 サロメ VS 闇ジェリ 1

サロメはたった一人で、ネフィリム城の長い長い回廊を歩んでいる。

目指すは王の座す玉座。王の間である。

よつやく、ここまで辿り着けた。王の間への扉を、ゆっくりと開く。

漆黒の闇を照らす炎の揺らめき。一つの影。

アンジェリである。

「お帰りなさい、サロメ。私、待ってましたのよ」

「姉さま……」

「サロメ、私はとうとう国を統一したのよ。最初は皆若輩者の王に敵しかつたみたいだけど、私、精一杯頑張つて頑張つて……今では誰も反対しないの。さあーこれからが大変だわ、何せニルベールングは唯一国になって私は唯一王にならないといけないのだから。だからね、サロメ……あなたの力はとても魅力的なのよ、だから手伝ってくれないかしら？ もう、いじめたりしないから、ねえ？」

お願い」

その言葉に、まるで雷にでもうたれた様な衝撃を受けるサロメ。

「い、今更何？ そんな事する訳ないでしょ！？ 本気で言ってるの！？」

「半分本気、半分冗談ね。だけど、私達は戦わなくても済むべきじゃないのかしら？ 何のプラスもないじゃない」

「……………国民を操っておいて？ 私達を襲わせておいて？」

「だから、必要なのはアナタだけ。他はまあ、居なくてもいいわ。どうだっていいじゃない、私は力しか興味ないの、それとも何、あなたも私を敵に回してのた打ちながら死んでいく？ お父様やお母様みたいに虫みたいに死ぬの？」

アンジェリは眉一つ動かさなかった。

第四十二姫 サロメ VS 闇ジェリ 2

「アンジェリイイ!!」

サロメは一瞬で間合いを詰めた。

ヒュッ!

ぱしっ

「えっ!?!」

サロメの拳は、アンジェリの掌に受け止められていた。

「ほほっ、サロメ、暴力とはこうよ」

どかつ!

アンジェリに何をされたのか、全く分からなかった。

気付けば自分は背中から肩にかけてを壁に埋め、腹には鈍痛がはしっている。

「サロメ、ここは王の間ですよ? はしゃぐのなら、もっと相應しい場所がありますから、そこへ行きましょうねえ」

彼女の顔を掴み、強引に引き起こすアンジェリ。

そのまま天井目がけ、サロメを放り投げる。

鎧が何度も衝撃を感じ、ついには城の外壁を突き破って、辿り着いたのは見晴らしの良い決闘場である。

間もなくして、アンジェリもここに現れた。

「どう？ なかなか決闘としてはおあつらえ向きじゃない？

私達を見下ろしているのは夜空の星だけ……邪魔者はどこにもいない」

「……………」

「ほほう、では、いざ参ります」

二人の最終決戦が、幕を開けた。

第四百十三姫 サロメ VS 闇ジェリ 3

しん、と二人以外の全てが眠りこけたか、黙っていた。

サロメは音もなくプリンセスブレードを抜き、刃先をアンジェリへと向ける。

じり、とアンジェリが一步前に。

ざっ、とサロメが一步前に。

「ねえ、アナタがこうして私に剣を向けるのって初めてではないかしら？ 知っているの、これは武器といってねえ、斬る為のものなのよ」

姉が表情そのまま、余裕の笑みを浮かべたままレイピア状の、針の様な剣を抜く。

返答、その行為に意味なんてない。一秒でも早く、この姉を倒さなければならぬ。

サロメは質問に、切り掛かるといふ形で答えた。ワープさながらの移動、もう剣は振り下ろされていた。

アンジェリは一切を理解し、対処した。切っ先に二本の指、それだけを使用。

サロメの手には鈍い、実に鈍い鋼鉄を殴り付けた様な衝撃が走っ

た。

剣はアンジェリのピースサインの谷間に捕われていたのだ。

「切れるって言ったわよねえ……全くう、不出来な子ねエエエエ
！」

アンジェリは二本指を軽くひねった。が、その僅かな動きが剣を
伝い、サロメの身体を大きくひねる。

柔道の技ありでも決められた様に、サロメは倒れた。

「寝ているのです、蟲の様に！」

どくっ！

サロメの腹に蹴りが食い込んだ。

第四百四十四姫 サロメ VS 闇ジェリ 4

どぐっ！

サロメは腹部に蹴りを食らい、力の方向へと素直に吹き飛んだ。

しばらく、床を転がってから身体をどうにか止めた。

「ねえ、サロメ、私が国で一番人気があったわよねえ」

もう、アンジェリはサロメの目と鼻の先に立っている。

今度はサロメを物のように持ち上げると、顔面を殴り付けた。やはり、吹き飛ぶ。

もうすぐ足場が終わり、その先には奈落が口を開けている。

姉は、じりじりとこちらに迫っていた。

「皆、民は私を王にと望んでいたのよ。なのにね、私がいざ王になったら色々と面倒な事になったわ。言う事を聞かないのは居るし、ケーザイとかセイジとかやかましいっいたらないわ。だったら、全部私の思う通りにすれば万事解決じゃない。全て一つに、全て私の思うままにね」

アンジェリは隅にサロメを追い詰めつつある。妹が如何な事をしようとする確信があった。

だがサロメはにやりと不敵な笑みを浮かべ、ぺっ、と血を吐き言葉葉を吐いた。

「結局、我が儘で自己中なだけじゃない……何様のつもりなの？もしかして自分は神にでもなつたつもり？」

「いいえ、神じゃないわ、絶対神よ」

「ああ、そうー！」

サロメは再び姉目がけ突進した。

第四百十五姫 サロメ VS 闇ジェリ 5

サロメは正面からアンジェリへと突っ込んだ。

「ほほっ、馬鹿な子っ！ 今度こそ奈落の底に落ちなさいな！」

レイピアを突き出すアンジェリ。

しゅっ、と音がして目にも止まらぬ速度で迫る切っ先。

その一撃は、サロメの顔面を捉える予定であった。が……バキッ！

レイピアは根元から折れ、刃は遙か下へと落ちてゆく。

「えっ……」

サロメは細身のレイピアを剣で下方から打ち、砕いた。根元ならばしなりもごく僅かとなる。

確かにどうしてか、姉のパワーも、スピードもとても凄い。だが、テクニクといえば……片や見た目だけ習った者と、片や一ヶ月とはいえじっくりやったもの。その差は、確かにあった。

「お前が、落ちろオオオオ！！」

勢い余り、前傾のままの王の背後にサロメは回り込むと、その背に剣を振り抜いた。

ズトオッ！

「がっ……あああああああああ！？」

アンジェリは足を踏み外し、下へ下へと落下していった……。

「はっ、はあっ……どうよ、これが……私の、底力……」

サロメはその場へたりこんだ。これで勝ったと、そう思っていた。

が……。

「サアロオメエエ……よくも、よくも私を落としてくれたわねえ！
このニルベールキング王である私をを！」

「なっ……？」

その時、サロメの目の前に何かが現れた。言葉は確かにアンジェリのものだ。

しかし、その姿は……邪龍とでも言えるものであった。

「ホホホホ……素晴らしいじゃない！ 正に私に相應しい姿だね、さあ、サアロオメエ、絶対神の御前よ、お死になさい！」

カースブラックドラゴン、アンジェリが現れた。

第四百十六姫 サロメ と ダンガル

「ふんぬあああああ！」

バキッ！

どうやら最後の一人であつたらしい。

ダンガルは遂に街の住人全てを倒してしまった。

「がつ、ふうふう、サロメエエ……今、から行くからなああ」

しかし彼は無傷という訳でなく、所々には深い傷も見受けられた。

「ふう、ふうふう……」

片足を引き摺りつつ、移動を初めるダンガル。が、そこで気付いた。

（そういえば……あのガキ、殴ったっけなあ……）

ドスッ……。

ダンガルの背中に、何かが突き刺さった。

「がつ……」

殴ったかどうか分からなかったガキ……カースがそこに居た。手

には、剣。

「……………」

「お前、どっ、どこに……隠れて、たああ！」

振り向き様に一撃。バランスを崩したものの、拳はカーブを捉え、彼は建物に叩きつけられ動かなくなった。

「がつ、ぶうつ、や、やばい……なああ……………」

剣を、筋肉運動でどうにか押し出したものの血が吹き出し、ただでさえ減っていた体液を更に減らしていった。

「……………駆け付けられないなあ……………これじゃあ、なあ……………」

ダンガルはその場に崩れた。

第四百十七姫 サロメ と ワイルド

(仲間達も心配だ、サロメ様も勿論心配だ。だけど、俺様の……)

ワイルドは自分達の拠点へとひた走っていた。

(俺様のサロメコレクションも心配なんだ！ ありとあらゆる人間、あらゆる場所、あらゆるマニアックな連中から買い漁った至高の品々、無事であってくれよ！)

因みに彼のサロメコレクションに、盗品は一切ない。それが山賊頭ワイルドの誇りであった。

(どれどれ……あいつらはっと)

ワイルドの目に飛び込んで来たもの、それはゆらゆらと揺らめく松明。そしてうろつろつと徘徊する部下らの姿である。

(ちっ……やっぱり待ち伏せてやがったか。仕方ない、さっさと戻ってあいつらと合流を……)

諦めかけたその時、一人の部下が目についた。そいつは、松明でなく別の何かを燃やしている。

丁度、一メール前後の正方形。よくよく目を凝らして見てみれば、それは……

「ぎゃああああああああああ俺様の至宝がああああああ！」

燃料と化していたのは、サロメの肖像画であった。大枚はたいて購入した、買い手のつかない珍品。世界に一つだけの絵画。

思わず絶叫したところ、部下ら全員は一斉に声の方向目がけ歩み出した。

「ぐっ……ちくしょおおおう！ アンジェリババアめ、ぶち殺してやるうう！」

ワイルドは振り返えると、山道を疾駆した。

第四百十八姫 サロメ と アトモス

「……………」

ラオドとゲエンバア、そしてアトモスは地下牢に囚われていた。

ぴちゃっ、と水滴だろうか、がどこかで落ちる。ここは最も古い牢であった。

三人それぞれ別々の牢で、静かに時を待っている風である。

と、そこへ足音がいくつも響いた。一同は期待も興味も見せずにむっつり押し黙っている。

「ラオド・メシユリトス、出るがいい」

この声、第六騎士団長のラーズだ。彼は数人の部下を引き連れており、ピンと背筋を伸ばして立っていた。鏗音を響かせ開く格子扉。

ラオドは言われるがまま外へと出た。

「抵抗なさっても良いのですが？」
それには答えない。

「まあ、いいでしょう。ではラオド、私に付いてきなさい」

そう言つと無防備な背中を向けて、ラーズは歩きだしたのだ。

「イッテシマッタカ」

「……やはりだ。性に合わんわ！」

ラオドらが連れていかれ数分、アトモスは遂に牢を破壊した。格子を折り曲げ静かに脱出したのだ。

「……悪いが一抜けだ。好きにやらせてもらうぞ」

「オオ サスガダ シンノ バードードウ ソレデ ワタシハ
ドウスレバヨイカ？」

「オマエハ タダ ナリユキヲ マテバヨイ”ではすまん」

「ワカッタ マツテオコウ」

アトモスはゲンバアを残し先に進んだ。

第四百十九姫 サロメ VS 邪龍アンジェリ 1

「ほほほほっ、逃げ回っても無駄よサロメ！」

アンジェリは最早かつての面影など残していない。四本の逞しい脚は蹴られただけでも致命傷は免れなさそうだし、黒光りする鱗はあらゆる攻撃を弾きそうだ。

ドラゴン……遂に姉そのものが異形と化したのであった。

ビュッ、と丸太のような尻尾が凄まじい勢いで振り抜かれる。

その衝撃たるや、砕けちった灰鉱石製の床が物語っていた。

「別に逃げ回ってる訳じゃないわよ！」

と、サロメは尻尾攻撃を回避し跳躍、既にドラゴンの首根っこ目がけ拳を振るっていた。

首と言えば尻尾や四肢に比べても細く、あらゆる生物のウィークポイントであるのである。サロメも当然そう思っていた。

が、殴り付けた瞬間、全身を衝撃が駆け抜けた。殴り付けた威力をそのまま拳へ返されたような感覚。

「ホホホホ、なあにそれえ！」

前脚だ！ が、サロメを弾くと彼女を床に叩きつけ、更にアンジエリの口元には炎が灯る。

(くっ……うぁ……あ……ヤバ……)

「消えてなくなれええ、サロメエエエ！」

火球が放たれた。紅く紅く灼熱した火炎は一直線にサロメを捕えると、彼女を燃やし尽くした。

「ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ、死ねエエエエ！」

第五十姫 サロメ VS 邪龍アンジェリ 2

「ホホホホホホホホホホホホ死ねエエサロメエ！」

アンジェリの火球がサロメを包む。めらめらと燃え盛る炎が彼女の形でさえも塗り潰した。

やがて炎が引いた後には骨さえ残らず、完全に焼き尽くされた塵だけが残ったのだ。

「やったわ、やった……これで私の邪魔をする者は居なくなつたあ！ 我こそは、世界の王、惑星^{ほし}の王、アンジェリなのだああああ！」

「勝手な事を言われても困るんだが。愚かしい道化師よ」

「なにい！？」

アンジェリドラゴンは声の方向を見上げた。

それは遙か上空、東の空が明るみ差し込む陽光、それをバックに飛行する何か……。

「きさまああああ……何者だ！？」

「我が名はアトモス、ただの謎の魔法使いだ。そして……」

アトモス、と名乗るそいつは、サロメを抱き抱えていた。

「この小娘に力を与えた者だ」

「貴様が元凶かあ魔法使いとやら！ おのれ、貴様も抹殺してくれる！」

邪龍がわななき、薄い翼を羽ばたかせ飛行してゆく。浮いたところで滑空し加速、見る見る内にアトモスと同等の高さにまで上昇した。

「凶に乗るなよ……」

アトモスは右手をかざした。

第五百一十一姫 サロメ と ラオド 1

「ここならよいでしょう……」

ラーズが連れてきた場所、そこは決闘場であった。訓練スペースの中央に位置し、試合を行う為の場所である。

そこを取り囲む様にして、騎士らが配置されている。

「何のつもりだ、ラーズ……」

「いえね、私の肩書きはもう筆頭騎士となりました。ですが、前筆頭騎士たるあなたには一度も勝てていないのでね……改めて決闘を申し入れようかと思いましたが」

「どうした？ お前らしくもない……筆頭騎士に必要なのは剣の腕でなく、政治力と統率力が貴様の持論だったろうに」

事実、ラーズは各騎士団長らより剣の腕では劣っている面があった。ただし、王族ニルベールリング家からは持ち前の政治力と話術を用い、いたく気に入られていたらしい。

もっとも、他騎士団長らからはそんな面が疎まれていた様だが。

「今はもう違います。私はアンジェリ様付きの筆頭騎士！ そう、ナンバー2なのですよ！ 実力もアンジェリ様より授かりました、力も手に入れた私こそがこの立ち位置に相応しい……あなたなど、一捻りでしょう！」

と、ラーズは決闘場の西側へと立ち、剣を抜いた。ラオドは向かい合う様に東側へと立つと、音もなく剣を抜いた。

「では、初めましょうか……血闘をねええ！」

先に動いたのはラオドであった。間合いを駆け一気に詰めると、中段からの一撃を放つ。

白銀の一本線、ラーズはその場から一本踏み出し、剣をぶつけた。

かん、と鳴く金属。

「はははっ、あなたの太刀筋がはつきりと見えますよ！ 随分遅くなりましたなあ、ラオド・メシュリトス！」

ラーズが剣を振るう。ラオドはいとも簡単に弾き返され、後方へ着地した。再び間合いが開く。

が、パワーの差をまざまざと見せつけられたにも関わらず、ラオドは笑みを浮かべていた。

「安心したよラーズ、お前は姫様程じゃない。姫様はまるで人知を超えた何かだった……だが貴様はただの人間だ、人を超えられないただの人間だ！」

「何を訳の分からん事を。ならば見せてやる、私の授かった力を！」

地を、一蹴り。弾かれた様に飛び出したラーズは一直に敵に向かう。そして攻撃。この間はほぼ一瞬だ。

手に伝わる感触は、無きに等しいものだった。

ラオドは身をかわし、即座に反撃の一打。だが、ラーズはもう正位置に構え、剣を受ける。

「小さくなつたなラーズ！ ただでさえ小物だったお前が今やただの飼い犬か、前のお前は野心家で有名だったじゃないか！」

力を抜き、相手の空振りを誘う。案の定ラーズの剣は刃を滑り跳ね上がる。ラオドの剣は綺麗に沿って、あと僅かでラーズを袈裟切りにするところだった。

「知っているぞ、お前はかつてニルベリングに滅ぼされた国の出身だ。王族に近づき何かを企んでいたろう」

振り向きざまに更に一撃。これまたラーズは剣でガードしたものの、またもラオドは力を抜き、弾かれ間合いを開けた。

「何を今更！ そんなものアンジェリ様の前には全て無意味！ あの御方こそが全世界の王にして私が仕えるべき唯一の存在であらせられる！ 私がアンジェリ様の筆頭騎士なのだ、世界のナンバー2なのだ、分かるかラオドオ、貴様の存在など私の前では塵あくたも同然なのだ！」

「そうして己を捨てたかラーズ！」

「捨ててなどいない、気付いたのだよ！」

「そうか……ならば……」

ラオドは瞳を閉じ、剣を正位置に構えた。

（あれは……筆頭騎士の奥義、光一閃か。あいつしか使えないという技。だが、今の私ならば、奴の剣閃より、速い！）

（ラーズは速い。テンポを早めろ……姫様の1テンポ遅れ程か。逃すな、奴の動作を）

それはサロメのプリンセスブレードをも弾いた必殺の技。

ラーズは元筆頭騎士のこの技を充分過ぎる程研究していた。

（その技は視野を断ち、他の感覚をフル活用して一步をより早く踏み出し、余計な感情……恐怖や躊躇を捨て去る。それで剣閃は従来より速度が高まる……だが、所詮は一撃。空振れば仕舞いだ！）

乾いた空気が吹き抜ける。ラオドは棒の様に立っていた。

ラーズは十二分に息を吸い込み、吐き出す。さすがに元筆頭騎士のプレッシャーは細く鋭い。今、この瞬間にも油断すれば真つ二つにされそうな……そんな空気。

（……ラーズ、見せてやろう。これが、筆頭騎士だった男の意地と力だ）

ますます、空気は重く沈みゆく。騎士らが正気ならば、直視に耐えない光景であろう。

ラオドをじいつ、と凝視するラーズ。一定のリズム刻む心音、呼吸。

(……まだだ、まだ)

ハアツ……ハアツ……ハツ……

(今だ！)

ラーズは地を蹴った。

第五十二姫 サロメ と ラオド 2

地を蹴り飛ばした音は、瞬間にもラオドへと伝播する。

大気を割り飛び来るラーズを頭に描き、元筆頭騎士は渾身の一撃を振り下ろした。

が、敵は一発の元で飛び込んでおらず、一度着地をしブレーキをかけていた。剣の振り下ろしのタイミングをほんの僅かにずらす。

目を閉じているからこそその、確認不可。

（終わりだ、ラオドオオ！）

再度の突入を敢行するラーズ。が、元筆頭騎士は甘くはなかった。更に一步の踏み出し、そして振り下ろされた筈の剣先が現れた。

「!!!?」

ズバツ！

「な、なにいいいいいいいい!?!」

ラーズは肩口から反対側の腰付近までを、斜めに切り裂かれていた。そのまま着地に失敗し、倒れ込む。

「……やはり、タイミングを外して来たな」

「に、二段構えだったのかぁ……」

「そうだ。咄嗟だったが上手くいって良かったよ」

ラオドは振り下ろした剣を続けて踏み出し振り上げた。偶然でなく、必然。二の太刀は想定内であったのだ。

「ぐぐっ、くくくくだがっ、今の私は当たり前ではないぞラオドオ！ 痛くない、まるで痛みを感じないぞはははははは、まだまだ終わらんよまだ行けるまだ……」

だが膝に力を込めた瞬間、がくりと崩れる。最早立ち上がる事もままならなかった。

ぼたぼたと体液を垂れ流して、見る見る内に顔色が青ざめていく。

「はははははははははははははははは……どうしたあ、まだ、私は……」

遂に顔から倒れ、ピクリとも動かなくなっていた。

「ハア、ハア……ぐっ……」

ラオドもまた、膝を付いた。みれば、肩が赤く染まっていたのだ。

ラーズの死を受けてかは知らないが、騎士らがジリジリとラオドを包囲しつつあった。手中には既に白銀が煌めく。

「やれやれ……持ってくれよ……」

ラオドは身体に鞭打って、再び剣を構えた。

第一百五十三姫 サロメ と ゲエンバア

“私は、暗闇の中に居た……”

「イヤ チガウナ モット デダシハ ハデナホウガイイカ」

“私は何も思わず考える事さえせず、ただただ戦っていた”

「ムウ コレデハ ムキシツスギル ダロウカ」

“私はただ暗を手探りにて歩んでいるに過ぎなかった。戦う、とはその中の一つでしかない”

「ナンカイダロウカ コウセイニ ノコスナラ ワカリヤスイホ
ウガ イイノダロウカ」

“私はただひたすら争っていた。困っている人々を救う為にも”

「コレデハ ヤスツポイ ヒーローモノノヨウダナ」

“私はバードードウ。又の名をサロメという。旅立ちとは正に運命であった”

「ムツ!? コ、コレハ……」

“姉はアンジェリ。吟遊詩人が歌にも歌う程の美しい女だった。対して私といえはこれといって目立つ所はない、普通の人間だった。あの人に出会うまでは……”

「オオッ コレダ タイサクノ ヨカンガスルゾ！」

こうして、ゲエンバア著の“神の書”、そのプロローグが出来つつあった。

第一百五十四姫 サロメ と アトモス

ネフィリム城最大の尖塔の更の上、空中中で両者の攻防は激しさを増す。

圧縮された火炎が空間を、朝日より明々と照らし出す。

が、アトモスは突き出した右手、そのみで炎を引き裂いた。そしてその場にもう姿はない。

「消えた……？ おのれ、逃げたか！？」

「勘違いするな」

「！？」

邪龍の背には、まるでドラゴンライダーの如くアトモスが立っていた。これで綱を引いていけばモロにそれだろう。

向き直りざま、視線が交差した。

その時の眼光は、威圧は、果たしてこの男がただの魔法使いだろうか？ と激しく問う。

その昔、まだ子供だった頃に聞いた物語の“魔王”のようだとさえ思えた。

「あ……くっ、ぶ、無礼者っ、降りろオオ！」

我を取り戻した龍はその身を激しく揺すって、背中の異物を振り落とそうとする。だがまたしても魔王はその場におらず、既に腹下に肉薄していた。

「ふうんっ！」

拳が下から上へ、アッパーカットの要領で振り上げられる。腹がへこみ、背中の彼方にまで衝撃が走り抜けて一転、最強の生物が白目を剥いた。

「私はな、無敵力こそもう失ってしまっではいるが」

への字に折れ曲がった邪龍の背中、今度はそちらにアトモスは現れる。

「それでも貴様ごときには劣らんよ」

背の中央、頂点に拳をたたき込む。龍の堅固な鱗をも粉碎し、アンジェリは勢いのまま落下していった。

「ぐっあああああああああああああああああ！」

邪龍はネフィリム城に突き刺さると、そのまま外壁を貫き中へ中へと落ちてゆく。そして最深部、王の間へと再び戻って来てしまっていた。

玉座を自らの身体で破壊し、床にズン、と倒れる邪龍。

やがて龍は縮んでゆき、翼も鱗も牙も爪も消えていって、後に残ったのはボロボロとなったアンジェリの姿であった。

「お、のれ……おのれおのれおのれおのれええええええええええ！ 私を誰だと思っている、我こそは全世界の王、世界の救世主アンジェリであるぞ！ 何故私がこんな目に合わなければならぬの、私は、私はああああああ！」

「憐れだな……」

今だ埃舞う王の間の手前より、サロメを抱えた男が一人、現れた。

「力でねじ伏せるやり方に反対はせんよ……それは一つの摂理であるからだ。だがなアンジェリ、お前にはそれだけの力もそれだけの器量もない。小国の玉座で王様ごっこを楽しんでいれば良かったのだ」

「何をを！ 私は、それに相応しいだけの地位も！ 名誉も！ 存在も！ 人気も！ 力だって持っている！ 世界に私程の優れた者が居ようか、私以外にいないだろう！ 誰より優れた私が世界を統治するのは当然だ、何も間違っではない！」

「……黙りなさいよ……」

「！？」

サロメは目を覚ました。

第一百五十五姫 サロメ と アンジェリ 1

今や豪華絢爛を誇った王の間も、瓦礫の山で半分程が埋まっていた。

玉座に倒れ伏すは、ニルベールینگ現国王、アンジェリ。

対するは元第二皇女サロメ。

天井の大穴からは絶えず日光が差し込み、キラキラと輝いていた。

「アンジェリィィ……」

剣を構える、サロメ。

「サロメエエエ……」

立ち上がるアンジェリ。

「……小娘、いやサロメ、私はもう手を貸さん。それでもやるか？」

アトモス。

「大丈夫……」

剣先で、そつと敵を示す。

邪龍形態時の火球にも似た炎を放つ。大理石の床をどろどろに溶かしながらサロメへと向かう。

光と熱を感じながら、サロメはしっかりと意識を保っていた。

身体中のあちこちがずくと痛む。多分、血が出てる。さっきから口の中は鉄と塩分率高めな味だ。

鎧がへしゃげたか、足首や腹をコルセットみたいに締め付けて来る。それでもサロメの剣先は相手の側を向いていた。

(もう一度、もう一度私にあの時の力を……)

そんな事を願う。あの時、そうだ、初めて異性からの裏切りを受け暴走してしまった時の力。

訳も分からず、気付けばみんなボロボロだった。でも、何もかもを破壊し尽くしそうになったとき、皆がちゃんと止めてくれた。

今度こそどうなるか分からない、だけど……アトモスが、そこに居るから。

「アトモス様ア！　お願い、“お前なんてキライだー”みたいな事言つてええええ！」

「お前なぞ眼中にもないわ、超キライだ」

即答。

「うう、うわあああああああああああああああああ！」

第一百五十六姫 サロメ と アンジェリ 2

「うわああああああああああああああああああああああああああああああ！」

サロメの身体を光の帯が包んでゆく。変化には僅か数秒を要したものの、実にスムーズに進行した。

すぐに光中より現れたサロメは一見して何の変化もないが、その目は眠る直前の様に虚ろであった。

「何だか知らないけど、それで私に勝つつもり!？」

「……………」

バキィッ!

「えっ」

アンジェリに143のダメージ。

「なっ、なにが!？」

ドカッ!

アンジェリに486のダメージ。

バキィッ、ガッ、メコッ、ビシュッ、ズドッ!

「がっ、ぐ、ぐはあっ！」

(何なのよ!? 本当に何をされているのか分からない……どうして、どうしてよオ!??)

ドゴオオオッ!

「ぎゃあああああああああああああああああ!?!」

アンジェリに3677のダメージ。

(ダメ……かなわない、勝てるものか、こんな化け物にいい!)

かしちゃ……。

サロメはプリンセスブレードを構えた。

「ひっ、ま、まさか……」

サロメはアンジェリ目がけ駆け出した。

第一百五十七姫 サロメ と アンジェリ 3

「……」

振り上げられた剣は、確実に、着実にアンジェリへと迫った。

もうアンジェリには、止めるすべなどない。

「いつ、いやあああああああああ！」

キンッ……

プリンセスブレードの先端は、アンジェリの数ミリ手前で停止していた。

「あっ……はっ……」

アンジェリは膝砕けになり、ぺたりと崩れた。

「……ちっば……」

サロメの瞳に光が戻る。

「止めようか、な」

「あつ、さつ、サロメつ、私を、助けてくれるの？ 情けをかけてくれ、るの？」

「別に……アンタがさ、心入れ替えて頑張るつてのなら、殺さなくていいかなつて。死んで逃げるより、生きて戦いなさいってヤツよ」

「ああつ、サロメ！ あなたは何て……何て器の大きいのかしら。私は民を苦しめて、アナタを殺そうとした……そんな私を許すというの？」

サロメは首を横に振る。

「私は、許す気なんて更々無いわ。だけど、私以外の沢山の人に許して貰ったらいいんじゃないの？ そうね、やはりあなたはやり直すべき。死にそうな程に努力をして、誰かに偉大な王だと言われなさい」

「……ええ、ええ、そうね、そうしましょう！ 国の為に尽力するわ、自分より民を第一に考えて何事も努力し、立派な王になる……それが私の使命、なのね」

「……じゃあね、私はもう行くから。あなたさえしっかりしていれば、国は良くなるの」

そう言うとサロメは振り返り、アトモスの元へと歩いていった。

「…………アトモス様」

サロメが言った。

「終わりました」

と。

だが、その背中に…………。

「馬鹿めええええ！」

アンジェリの凶刃が

ズバッ！

「ほほほほほほほほほほほほほほ…………ほ？」

「馬鹿はあんだ、アンジェリ」

一瞬だった。

突き出されたアンジェリの刃は空を切り、アンジェリの身体には

深々と、斜め袈裟に切り傷が入っていた。

「がはっ……ごっ、こ、こんな……何故、何故何故何故何故何故何故何故何故なぜええええええええええ！？」
何故私が、どうして私が！」

第二百五十八姫 サロメ と 結末 1

ニルベールینگ国王、アンジエリは倒れた。辺りにどす黒い体液を撒き散らし、喚きながら。

だがやがて、それもなくなり静寂が周りを包んでゆく。王の間には既に、朝を告げる光が燦々と降り注いでいた。

サロメはふらりとよるめくと、そのまま背中から倒れていく。その背を、ゴツゴツの太腕が受け止めた。元魔王の手である。

「今度こそ終わったよ、アトモス様……」

サロメは小虫の羽音ほどでつぶやいた。今にも消えそうな燭台の炎のようだ。アトモスは思う。

「皆はどうなったかなあ……街の人達は……？ とっても気になるけど、ねえ、もう身体、動いてくれないや」

そう言うと、彼女は右手をぶるぶる震わせながら持ち上げ……だが、すぐにぱたと落ちる。

「どうしよ……何だか、凄く、眠い……ね、アトモス様、私……皆を、助け……」

サロメは目を閉じた。

「……………」

アトモスは何も言わなかった。

第百五十九姫 サロメ と 結末 2

ここは、皆も知つての通り、大国ニルベールリングである。広大な面積と潤沢な資源を持つ、今最も豊かで熱い国だ。

そして平和過ぎる程平和な国…… たつた今、このネフィリム城の門番兵士がうつらうつらと夢心地なのが何よりの証拠だった。

さて、ニルベールリングの名物といえは何か？ と問われたならば、人々は口を揃えてこう答える。

“それは、第一皇女アンジェリ姫である”と。まだ歳は二十一つばかり。だが、誰もが…… 同性の者でさえも立ち尽くし、見惚れてしまう程の美貌の持ち主であった。

長く腰まで伸びた金色の髪はどんな糸よりなめらかで、風にふわっ、と揺れ動く。薔薇の香りがほのかに流れ、人々は酔いしれる。

常にその顔は微笑みをたたえ、民の誰もが手を振った。

純白の淡雪の様な肌を、純白のドレスが包み込むそのさまは、さながら女神とさえ言わしめた。

今日も詩人が歌うのは、アンジェリ姫の事ばかり。言葉に出来ぬ美しさ、天より舞い降りたアンジェリ、耳をすませば、そればかり。

さて話は変わるが、アンジェリ姫には一人、妹が存在している。
第二皇女サロメ……それが妹君の名であった。

そのサロメは目を開いた。部屋には必要最小限のものしか置かれておらず、殺風景。小綺麗なだけの、まるで牢獄だ。

「ヨホホホホッ、サロメ、アナタまた今日も外出なさらなかったのですってねえ！ まあ、仕方ないわよね、アナタみたいなお子様、相手にしてくれる殿方なんていないでしょうから！」

姉は、サロメの個室に入るなり、高笑いを交えて言った。

「うっ、うるさいお姉様！ 私だって、化粧すれば……」

「化粧さえすれば、なあに？ おぐしも肌も真っ黒、お子様体型、挙げ句口汚くてがさつ……そんなアナタが化粧したところで隠せないわねえ」

「ぐっ……」

「そうそう、わたくし今度お見合いますのよ。相手は名家の貴族でとても素敵な方だわ。どう、どうせ顔も知らない殿方とくつつけられるであろうアナタにとっては羨ましい話でしょう？」

姉は言い返せぬ妹をいいことに、益々攻勢を強めた。サロメは事実であるだけに拳を握り俯くばかり。

「ホホホ、ではねサロメ。せいぜい、おしとやかに振る舞う訓練でもしてなさいな」

「!!!?!」

突如、背後から声がした。サロメは慌て振り向くと、そこには見慣れない男が仁王立ちしていた。

「なっ……あなた、どこから!?!」

そう言う間もサロメは、相手をしっかりと観察していた。男はただ、部屋の中央に立っているだけだ。その手に武器の様なものは持っていない。

だが……彼が、ただ者ではないのは明らかだ。新しい世話係では決まてないだろう。頭には天に向き直つ直ぐ伸びる角が二本。黒一色で統一された衣服とマントを身に纏う彼は。

「どこからと言われてもな、正面からとしか……まあ、あれだ、私は見るも無残な第二皇女を見兼ねた、ただの世話焼きだ」

「へ?」

あからさまに怪しいわ! との全力ツッコミをぐつと飲み込み、ただ少し考えて……もしかしたらに辿り着く。あの角から察するに、この男が魔族であるという可能性だ。

「……で、その世話焼きが、この地味な第二皇女に何の用よ!? 誘拐とかなら姉様にしときなさい、私をどうこうしても誰も悲しまないし、身代金なんて払って貰えないわよ!」

彼女は怯えるでもなく、怪しい男に言い放った。命が惜しいから、他人をおとしめたいから、そう言っている訳ではない。純粹にそう思っているのだ。

だって私は、いらぬ子なんだから……。

だが、男はやれやれと言わんばかりに首を振ると、言った。

「フン、何かを勘違いをしているらしいが……そうだな、私からすれば裏のないお前の方がマシだ。腹に一物持っている者にろくな奴は居ない……それに、その堂々たる態度、なかなか気に入った」

「えっ……？」

男の言葉に、サロメは戸惑いを隠せなかった。異性に姉よりもいい、と言われたのは初めてだったからだ。

あの人？ は私の方がいいと言った。ただそれだけでサロメは、涙が出る程嬉しかったのだ。と、同時にもしかしての考えが頭をよぎる。

彼は、本当に私をさらいに来たのだろうか？ もしこの男が魔族で、私を魔界だかに連れ帰るのが目的だったとしても……自分でもとんでもない事、考えているなと思えた。

だけど彼が手を差し出し、“私の元へ来い”と言ってくれたなら、多分躊躇う事無くひよいひよいと行ってしまっただろう。

サロメはもう、正体不明の世話焼き男に虜だったのかもしれない。

完全な一目惚れだったのかもしれない。

よくよく見れば、彼はとても素敵だった。背が高く足は長く……顔も悪くない、第一に私の方がマシと言って貰った時点でどうでも良かった。

それにピッタリだ。人々が私を悪魔に例えるのなら、魔族になってもいいとさえ思っていた。

「ごほん……では、唐突なんだがお前に問おう」

「……はい……」

既に目がハートマーク状態の彼女に気付きもせず、世話焼き男は言った。「お前は何を望んでいるのだ？」と。

サロメは一瞬迷ったが、すぐに答えた。

「（アナタの）ステキなお嫁さんとかになりたいです……」

と。すると男は、ようやく笑みを浮かべサロメに言い放った。

「よかろう！ ならばお前は世界を行け、世界を旅しお前の目にかなう屈強な者を探しだせええ！」

サロメが何か、呆けた顔で何か言おうとしていたが、きっぱり無視し、世話焼きは両の手から光を放った。

あまりの眩しさに目を閉じた。やがて光が消え、彼女が目を開けた時には、男の姿はどこにもなかったのだ。

彼女はまた呆けていたがすぐさま我にかえると、

「チクシヨオオオオー……！」

と叫び、再び壁を殴り付けた……。

翌朝、王の間は異常な雰囲気にも包まれた。皆が皆黙り込み、顔面に深くシワを刻む。

特に王と王妃、第一皇女の表情といったら、醜悪なモノを見る目付きだった。それらの視線は全て、玉座の下でうやうやしく頭を垂れる者へと向く。

それは、第二皇女だった。もう彼女はドレスなど身に付けてはいない。その身体には、どこで手に入れたのか、鉄の鎧を着付けている。ガントレットも完備で、新人兵士に見えなくもなかった。

「サロメ……ワシはポケたのか？ それとも耳がおかしくなってしまうたのか？ もう一度、言ってみる」

王は低く、厳かに言った。大国を束ねる者らしい、威厳に満ちた、それと同時に重量を感じさせる言葉であった。

「はい、父上……いえ、ニルベールリング第十二代国王様……私、サロメ・ニルベールリングは本日を持って王位継承権を捨て、旅をい

たします。」

彼女は堂々と王の言葉を受け、そして返した。王をきつ、と睨み付け、一時たりとも目を逸らす事はなかったのだ。その言葉に嘘偽りの無い事を確認した王は、激怒した。

「許すとも思っているのかサロメ！ 誰がキサマを養子に迎え、誰がお前を育て、誰がお前を立派に教育したのか……答えよ！！」

「それとて、他国に私をくれてやる為でしょう？ この妾の娘を！」

「口を慎めサロメえ！ ラーズ、この不埒者を捕えよ、牢にでも放り込んでおけ！」

「承知致しました」

ラーズ・アンバール、我が国の筆頭騎士。

しかしサロメは知っている。あの男は口先だけで筆頭騎士となった、しかも姉の夜の相手の一人であるということ。唾棄すべき人間のクズ……彼女の印象は正にそれだった。

「さあ、サロメ様……あまり我が儘を申されるな」

彼の腕がサロメへ伸びる。このままなら、なすすべなく捕まっっているところだろう。

「私に、触れ……」

サロメが触れるな、と抵抗を示そうとした時だ、王の間に一人の男が颯爽と踏み込み、筆頭騎士とサロメの間にこじ入った。

「なっ……何だ貴様は!？」

その男の登場に、どれだけ時が止まった事だろう。乱入男の身に付けた鎧は、ラーズの筆頭騎士を示す鎧と瓜二つであった。

「あの……あなたは？」

サロメは目の前に現れた男に問うた。男は、にこりと爽やかに笑む。

「私はラオド・メシュトリスと申します、姫様。外に出るのでしよう、私がお供致します、さ、行きましょう」

差し出された手。何故だろう、どこかで見た事のある人の様な気がしてきた。サロメは僅かに戸惑いを見せた。

「ええい、ラーズよ何をしている！早くこの不埒者共を捕らえるのだ！」

「あ、そ、そうです！衛兵は何をしている、さっさと来なさい！」

だが、ラーズの声が虚しく反響を繰り返すのみ。やがてたった一人、兵士が現れたが既にボロボロであった。

「ほ、報告致します！ 中庭、詰所、訓練場でそれぞれ正体不明の者共が暴れて……手が付けられません！」

中庭

「どうしたどうしたああ！ 騎士とやらは綺麗な戦い方しか知らないのかよ！」

ワイルド。

詰所

「フン ドンナニ タンレンヨツンデイテモ
ファイヨツカレテハ
モロイナ」

ゲエンバア。

訓練場

「グフフフフフ、次はどいつだかかって来るんだなああ！」

ダンガル。

.

「さ、姫様行きましょう。私はあなたの味方です」

「……本当に？」

「神に誓って」

「分かったわ、私を連れて行って！」

「御意！」

ラオドはサロメの手を引いて、駆け出した。

「おのれっ、行かさぬぞ！」

二人の背中に、剣を抜いたラーズが襲い掛かる。

「やはり、お前では私に勝てない！」

が、既にラオドは剣を振るっていた。白銀の斬閃が一撃の元にラーズの剣を叩き割る。

「なつ……」

その際に、二人は王の間を脱した。

例えば、こんな物語ならば……。

最終姫 無敵P と

焚き火が夜闇をゆらゆらと照らしていた。

辺りには時折、獣の咆哮を思わせるわななきが響いては消える。

生暖かい風が木々を騒めかせ、通り過ぎる。

そんな中、サロメは目を開ける事が出来た。

(結局、私はどうなったんだろう……)

ふと、視線を落とす。

ラオド・メシュトリスがあぐらをかいたまま、眠っていた。

(……色んな意味で凄いわ……)

ワイルドが、自作と思われる枕を抱き締め、眠っていた。

(ん？ あの枕、何か書いてある様な……)

ダンガル・アフブリトが少し離れた場所で豪快ないびきをたてていた。

(さっきから聞こえてるの、ダンガルのいびきだったんだ……)

ゲエンバアが、大量の紙を片手にうなされながらもぶつぶつと寝言を呟いていた。

(……どんな夢、見てるんだろうか)

皆をぐるりと見渡して、サロメは満足そうに一言呟いた。

「ま、いいか」

と、誰にでもなく。

最終姫 無敵P と(後書き)

無敵P STAFF

文章

算裏友城

キャラクター提供

ぬーちゃん先生(花家族) まっくMAX様(ダブルフックアー
ム船長)

スペシャルサンクス

アクセスして下さった方々、お気に入り登録して下さった方々、
レビュー・感想を下さった方々、無敵シリーズに関わって下さった
方々。

THANK YOU FOR ALL THE PEOPLE!

明日六時から、新シリーズ始まるよ！
まだまだ続く！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7080s/>

無敵プリンセス

2011年9月30日18時06分発行